

仙台市文化財調査報告書第237集

# 船 渡 前 遺 跡

—発掘調査報告書—

1999年 3月

仙 台 市 教 育 委 員 会

仙台市文化財調査報告書第237集

# 船 渡 前 遺 跡

—発掘調査報告書—

1999年 3月

仙 台 市 教 育 委 員 会



II B区SD1（東より）



III区SI1（北より）

## 序 文

日頃より、仙台市の文化財保護行政に対しまして、多大のご協力を頂き、担当する仙台市教育委員会にとりまして、誠に感謝にたえません。

富田地区は豊かな田園地帯であり、おもに近郊農業地帯として推移して参りましたが、近年は仙台市南部の副都心である長町・富沢地区の発展とともに新しく生まれ変わりつつあります。

この度の船渡前遺跡の調査は、こうした流れのなかで、昭和51年度に続く発掘調査として実施され、数々の貴重な成果が得られました。本報告書はその成果をまとめたものであります。

まもなく21世紀を迎えるとしているなかで、先人の残した文化財資源を保護し、保存活用を図りつつ後世に継承していくことは、私たちに課せられた責務と考えております。ここに報告する調査成果がこうした意味で研究者のみならず、市民の皆様に広く活用され、文化財に対するご理解と保護の一助になれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査並びに本報告書の刊行に際しまして、多くの方々のご協力、ご助言を頂きましたことを深く感謝申し上げ序といたします。

平成11年3月

仙台市教育委員会

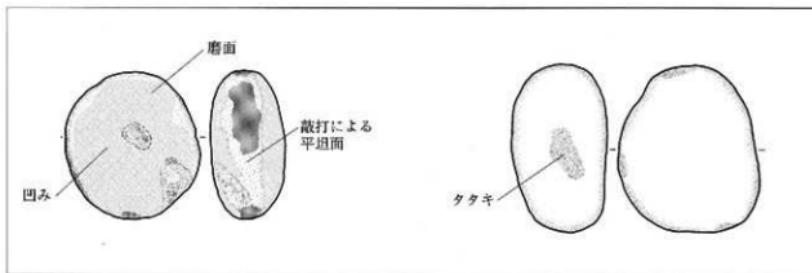
教育長 小松 弥生

## 例　　言

- 1 本書は、仙台南部道路Ⅲ期事業に伴う、船渡前遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 整理作業は、吉岡恭平、佐藤　淳、森　剛男が担当し、執筆（第4章を除く）は吉岡、写真撮影・写真図版は佐藤が担当した。なお、自然科学分析に関しては、礫古環境研究所に依頼した。
- 3 発掘調査および報告書作成にあたっては、次のの方々のご指導、ご助言、ご協力を賜った。  
松本　秀明（東北大学理学部）　　宮城県道路公社
- 4 本発掘調査に関わる資料は、仙台市教育委員会が保管している。

## 凡　　例

- 1 本書の土色については「新版標準土色帖」（小山、竹原1997）を使用した。
- 2 本書使用の地形図は国土地理院発行5万分の「仙台」（平成8年）である。
- 3 本書中の北は真北を示している。
- 4 遺構の略称は次のとおりで、それぞれに通しNoを付けた。  
S I：堅穴住居跡　　S D：溝跡　　S B：建物跡　　S K：土杭　　S R：河川跡  
S X：性格不明遺構　　P：柱穴・ピット
- 5 遺物の略号は以下のとおりに表している。  
A：縄文土器　　D：ロクロ使用の土器　　E：須恵器　　J：磁器　　K：石器  
P：土製品
- 6 磬石器の使用痕の表示は以下のとおりである。



## 目 次

第1章 はじめに .....	1
第1節 調査に至る経過 .....	1
第2節 調査要項 .....	1
第3節 位置と環境 .....	1
第4節 これまでの調査成果 .....	4
第2章 確認調査 .....	4
第1節 確認調査の方法 .....	4
第2節 確認調査の結果 .....	4
1 南東地区 .....	6
2 中央地区 .....	6
3 中央北地区 .....	13
4 西地区 .....	18
5 隣接北地区 .....	19
6 隣接西地区 .....	19
7 確認トレンチ出土遺物 .....	20
第3章 本調査 .....	
第1節 I区 .....	21
1 基本層序 .....	21
2 遺構 .....	21
3 基本層出土遺物 .....	23
第2節 II区 .....	26
1 基本層序 .....	26
2 遺構 .....	26
第3節 III区 .....	34
1 基本層序 .....	34
2 遺構 .....	34
第4節 IV・V区 .....	44
1 基本層序 .....	44
2 遺構 .....	44
第5節 VI区 .....	53
1 基本層序 .....	53
2 遺構 .....	53

## 目 次

第4章 自然科学分析	徴古環境研究所	.....	55
第1節 船渡前遺跡における屈折率測定	.....	.....	55
1 はじめに	.....	.....	55
2 屈折率測定	.....	.....	55
3 考察	.....	.....	55
4 小結	.....	.....	56
第2節 船渡前遺跡における放射性炭素年代測定	.....	.....	56
第5章 まとめ	.....	.....	58
第1節 遺物について	.....	.....	58
第2節 遺構について	.....	.....	58

引用参考文献

写真図版

報告書抄録

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査に至る経過

仙台南部道路は、東北縦貫自動車道と仙台湾岸を縦走する仙台東部道路とを接続する延長11kmの自動車専用道路である。西の山田料金所と若林ジャンクションとの間7.4kmは、I・II期工事分として既に平成6年までに供用されている。未整備であった山田料金所から仙台南インターチェンジの西の区間が、III期事業として、平成8年に着手された。そして、山田料金所付近は盛土構造のインターチェンジに改良される計画となった。予定地内には、船渡前遺跡が存在することから、平成9年に、山田IC建設担当である宮城県道路公社より発掘届が提出され、協議の結果、平成10年度に発掘調査を行うことになった。

## 第2節 調査要項

遺跡名 船渡前遺跡

調査名 船渡前遺跡発掘調査

所在地 仙台市太白区山田字船渡前、同区宮田字八幡西

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育委員会文化財課調査第二係 担当職員 吉岡恭平 佐藤淳 嘴託森剛男

調査期間 平成10年4月13日～7月29日

調査対象面積 48000m<sup>2</sup>

調査面積 3200m<sup>2</sup>

調査協力 宮城県道路公社

発掘調査参加者

阿部あき子 阿部敬子 阿部八重子 右井千代子 板橋栄子 板橋静江 伊藤幸子 横野美登子  
遠藤いな子 遠藤福子 大槻明美 小川良子 小野紀美子 小野寺達重 加藤けい子 神崎是夢  
菊地恵子 菊地敏子 小林薫子 小松千代子 佐藤清治 佐藤久栄 佐藤ゆう子 佐藤リキ子  
佐野たみえ 岩崎なつ子 菅原弘 鈴鹿久子 鈴木きみ子 鈴木峰子 関谷栄子 高橋たづよ  
千葉恭子 富永美輪子 幸川裕子 麻沼みのり 松野順子 三浦たか子 三浦つよの 三浦貢  
宮城富子 吉田公治 渡辺純子 渡辺篤子 渡辺芳裕

## 第3節 位置と環境

船渡前遺跡は、JR長町駅の西南西約4.3kmに位置し、太白区山田字船渡前および宮田字八幡西に所在する。

奥羽山脈に源を発する名取川は、茂庭一白沢丘陵・青葉山丘陵と高銀丘陵の間を東流し、山田、鈎取地区でその谷幅を広げ、仙台平野に臨む。名取川北岸の山田付近には3つの段丘が形成されており、本遺跡はその最低位段丘上に立地している。上位2つの段丘は、高い方が北前遺跡や山田上ノ台遺跡のある台ノ原あるいは上町段丘、低い方が上野遺跡や山田条里遺跡のある中町段丘である。本遺跡のある段丘面と中町段丘との比高差は約4～5mである。

以前は本遺跡の東端部を「八幡西遺跡」として取り扱っていたが、現在は同一の遺跡として登録しており、遺跡

の範囲も東西600m、南北200mと東西に長くなっている。現在の標高は約22~27mで、緩やかに南へ傾斜しながら名取川に至り、その比高差は約4mである。遺跡周辺の現況は、水田、畑地、宅地である。また、昭和54年頃に遺跡東半部で耕地整理が行われている。全体の標高は変わらないものの、旧地形の起伏などを若干変貌させているようである。

名取川流域には数多くの遺跡が存在する。ここでは当遺跡の周辺の遺跡について概観することにする。

旧石器時代の遺跡としては、北西約1.5kmにある山田上ノ台遺跡、北前遺跡がある。山田上ノ台遺跡は、前期旧石器時代の存在が証明された遺跡として著名である。東方約3kmには、旧石器時代の森林跡と当時の人の間のキャンプ跡が発見され、地底の森ミュージアムとして保存された宮沢遺跡がある。また、西方約4kmには後期旧石器時代の上ノ原山遺跡がある。

縄文時代になると遺跡の数は増加する。丘陵・段丘上では、早期末から中期後葉の北前遺跡、前期前葉の三神峯遺跡、中期末の大集落である山田上ノ台遺跡、木遺跡の北西に隣接する中期前・中葉の上野遺跡がある。低地にも早い段階から生活の拠点がみられ、早期前葉の下ノ内浦遺跡、早期末の富沢遺跡、山口遺跡があるほか、中期末から後期中葉にかけては、富沢・大野田地区において下ノ内遺跡、六反田遺跡、下ノ内浦遺跡、大野田遺跡、山口遺跡、王ノ塙遺跡という互いに近接した遺跡群の中で連続して集落の変遷を追うことができる。

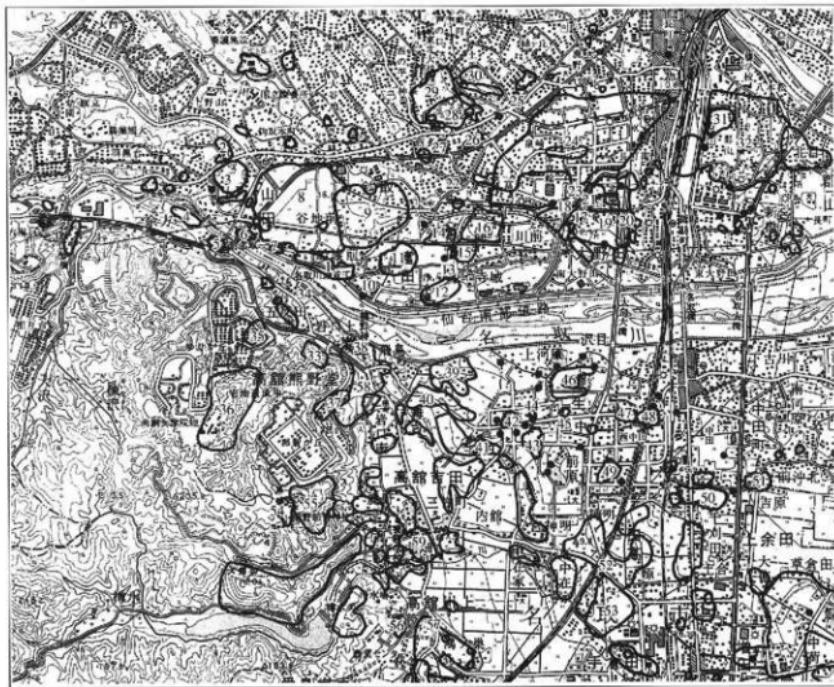
弥生時代の集落の様相は明らかではないが、後期の堅穴住居跡が北東約1.5kmの原遺跡と同約2.5kmの上手内遺跡で発見されている。生産遺跡としては東方の低地にある富沢遺跡で中期から後期の水田跡が検出されているほか、下ノ内浦遺跡や西台畠遺跡で墓域が検出されている。

古墳時代の集落は、段丘上の原遺跡や上手内遺跡にもみられるが、六反田遺跡や伊古田遺跡、下ノ内遺跡など低地の自然堤防上にも多く存在する。隣接する後背湿地には富沢遺跡でみられるように水田跡が広がっており、生活の場が低地に移行したようである。古墳は丘陵と低地の境に築かれ、当遺跡の対岸にある高館丘陵裾部には熊野堂横穴墓群が、北東の青葉山丘陵の裾部には、裏町古墳や砂押古墳、兜塚古墳などの高塚古墳や上手内、茂ヶ崎などの横穴墓群などが存在する。また、高塚古墳は、大野田古墳群のように低地にも分布している。

奈良・平安時代の集落も前述した東方の自然堤防上に多くみられる。当遺跡近辺では東方約1kmの鍛冶屋敷A遺跡や鍛冶屋敷前遺跡がある。

中世では、周辺の丘陵上および低地に城館跡や岸敷跡などが数多く存在する。特に本遺跡対岸の高館丘陵北東・帯は、中世において東北太平洋岸における熊野信仰布教の拠点となった熊野三山勤謹の地で、それらに関連する遺跡が多くみられる。

近世の本遺跡周辺は山田村と富田村の村境部分にあたる。北に隣接する山田条里遺跡の調査では文政5年（1822年）の絵図にみられる屢敷の堀跡を検出している。また、本遺跡の南辺沿いに近世に掘削された木流堀がある。この堀は富田と広瀬川の根岸を結ぶ約6kmのものである。本遺跡の西端付近から取水し、南辺を通り、東端で北東へ方向をかえ長町方面へ向かっている。



第1図 周辺の遺跡 (1/50000)

遺跡名	種別	立地	年代	遺跡名	種別	立地	年代
1 俗波前塚	集	沼 自然林地	銅器・弥生・奈良・平安	31 西古谷塚	墓	沼 自然環境	弥生・古墳
2 北前堤	集	沼 段	松 古墳群・漢文・平安・近世	32 鹿目塚	墓	沼 自然環境	銅鏡・平安
3 山王ノ台遺跡	遺跡	丘 古墳群	白 古墳・漢文・平安・近世	33 滝野塚六段群	墓	大 那 正規古墳群	近代・奈良
4 下中敷溝	遺跡	谷 古墳	丘 古墳・古氏	34 猪狩本宮	神	林 丘陵	御祖
5 金方塚	遺跡	谷 古墳		35 小原(古墳)等	坂	林 丘陵	山岳
6 信太塚西遺跡	遺跡	谷 古墳	自然林地・平安	36 信貴大崩原	坂	那 丘陵	中唐
7 信太塚北遺跡	遺跡	谷 古墳	自然林地・平安	37 大門山遺跡	坂	那 丘陵	古墳・中唐
8 白日塚	遺跡	谷 古墳	丘 古墳・奈良・近世	38 鶴野所宮	神	社 林	中古~
9 下野塚	遺跡	谷 古墳	丘 古墳・奈良・平安	39 八ノ口塚	鳥	那 自然環境	古代・中古
10 信田西古墳	統合	谷 古墳	自然林地・平安	40 犀台中経塚	集	那 自然環境	古代
11 信ノ東古墳	統合	谷 古墳	自然林地・平安	41 乗馬塚	集	那 自然環境	古代
12 大木塚	遺跡	谷 古墳	自然林地・奈良・平安	42 丹木塚	集	那 自然環境	平安~近来
13 経治山型古墳	遺跡	谷 古墳	自然林地・銅鏡・奈良・平安	43 四輪山	路	那 自然環境	古墳~平安
14 経治山型古墳	遺跡	谷 古墳	自然林地・銅鏡・奈良・平安	44 通水塚	路	那 自然環境	平安
15 経治山型古墳	遺跡	谷 古墳	自然林地・奈良・平安	45 通水塚	路	那 自然環境	平安
16 信波前塚	遺跡	谷 古墳	自然林地・奈良・平安	46 佛生寺相模	集	那 自然環境	古墳~中世
17 伊西田塚	遺跡	谷 古墳	自然林地・古墳・平安	47 安久塚	海	門地 自然環境	初期・古墳・奈良・中世
18 下ノ丘塚	遺跡	谷 古墳	自然林地・銅鏡・中世	48 安久塚	海	門地 自然環境	古墳・平安・中世
19 大津田古墳群	古墳	谷 古墳	自然林地・奈良・古墳・平安	49 朝日塚	海	那 自然環境	古墳・平安
20 二ノ塚	遺跡	谷 古墳	自然林地・銅鏡・平安	50 中山山遺跡	集	那 古墳	銅鏡・中世
21 六反玉塚	遺跡	谷 古墳	自然林地・奈良・平安	51 佐河原遺跡	水	那 自然環境	奈良・飛鳥・平安
22 白日塚	遺跡	谷 古墳	水田跡・田畠跡・平安	52 通水塚	集	那 自然環境	奈良・平安
23 下ノ丘塚	遺跡	谷 古墳	自然林地・銅鏡・中世	53 通道塚	集	那 自然環境	中世
24 信波前塚	遺跡	谷 古墳	自然林地・奈良・平安	54 佛母智智寺	寺社	那 亂原	銅鏡・奈良・古墳
25 神古墳	四塚	丘 古墳	自然林地	55 西都城	坂	那 丘陵	中世
26 美原古墳	五段	丘 古墳	自然林地	56 金葉土丘塚	墓	那 丘陵	銅鏡
27 原塚	遺跡	丘 古墳	銅鏡・奈良・平安	57 今須曾遺跡	墓	那 古墳	銅鏡・平安
28 三ツ塚	遺跡	丘 古墳	銅鏡・奈良・平安	58 石口山遺跡	墓	那 自然環境	奈良・平安
29 真ノ口塚	遺跡	丘 古墳	銅鏡・平安	鹿野宮室遺跡	寺	那 亂原	中世
30 上手内塚	遺跡	丘 古墳	銅鏡・古墳	59 通水塚	集	那 銅鏡・奈良・古墳	中世

周辺の遺跡地名表

## 第4節 これまでの調査成果

本遺跡では、船渡前遺跡と八幡西遺跡として各々1回調査が行われている。

**船渡前遺跡** 昭和51年に仙台南道路建設（I期）に伴う事前調査として、宮城県教育委員会により実施された（宮城県教委：1977）。その結果、現在山田料金所のゲートになっている箇所で、弥生時代の遺物包含層と土坑2基が発見された。包含層は、東西35m、南北9mの規模で、前期から中期中葉にかけての弥生上器が多く出土した他、石庖丁や扁平片刃石斧などが出土している。また、この包含層は集落の一部を構成するものと考えられた。

**八幡西遺跡** 同じく昭和51年に、農地改良工事中に遺物が発見され、緊急調査が実施された（仙台市教委：1977）。その結果、平安時代の堅穴住居跡1軒が検出された。住居跡の平面形は長方形で、南北4m、東西3.2mで、東辺のほぼ中央にカマドが作られ、両袖部の石組と煙道の一部、支脚が残存していた他に、焚口の天井石と考えられる84×44×38cmの大きな凝灰岩が出土している。また、床面からは炭化材が出土しており、焼失住居の可能性を考えられる。遺物はロクロ使用の土師器、須恵器、鍛先や刀子などの鉄製品が出土している。

## 第2章 確認調査

### 第1節 確認調査の方法

調査対象区域が本遺跡部分と隣接地部分とを合わせた約48,000m<sup>2</sup>と広大なため、当初は遺構等の広がりを把握するための確認調査から実施した。調査区設定箇所は前回の調査成果をふまえ、その周辺を重点に、宅地や道路等を除く畠地や水田、荒地などを対象とした。設定順序については、土地買収契約の進捗状況や作物などの植え付けの都合などを考慮した。トレーンチは地形の傾斜が南であることから南北方向を基本とし、幅は3mとした。長さは設定場所の条件により10~40mとまちまちになったが、20~30mとしたものが多い。計26箇所の確認トレーンチ（1~26トレーンチと呼称、以下1~26Tと表記）を設定し、総面積は約1800m<sup>2</sup>である。

調査はまず重機により、表土や盛土、搅乱等を除去し、以下はおもに人力による各層での精査を行ったが、遺物の出土状況に応じ、中途の層の除去にも重機を使用した。また検出された遺構の時期や性格が不明な場合は、掘り込みを行い本調査の必要性を検討することとした。

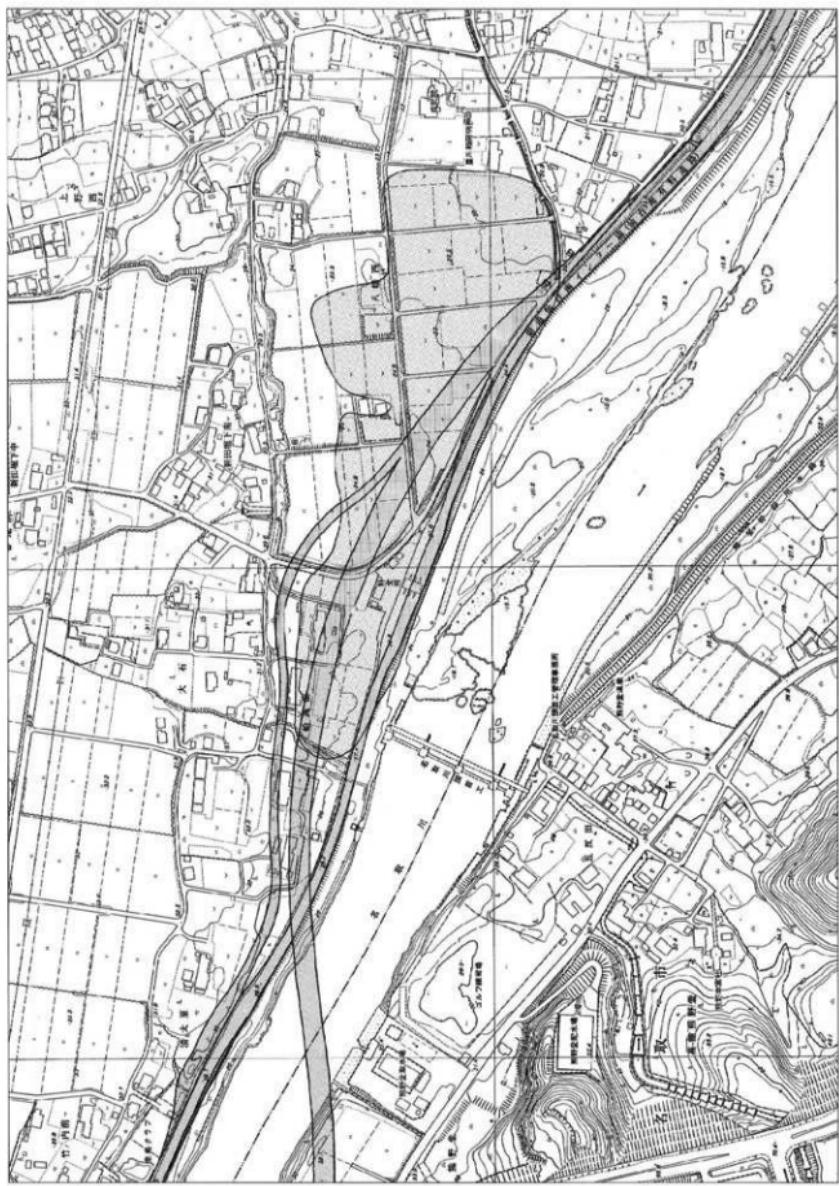
確認調査の結果、遺構遺物とも予想外に少なかった。遺構が検出されたのは、3・5・12・13・14・15・16・17・18・20・25Tであるが、抜擢して本調査が必要とされたのは6箇所で、3T=I区、5・13T=II区、25T=III区、15T=IV区、16T=V区、20T=VI区とした。他のトレーンチの遺構については、以下に記述する確認調査の結果の項で報告する。なお、遺構の名称は確認調査と本調査と区別をしない種別ごとの通し番号である。

各確認トレーンチの面図は、各トレーンチ内に任意の基準点を設けて四角化しているが、各トレーンチの四隅の座標を測量し座標値を求めている。

### 第2節 確認調査の結果

確認トレーンチの設定箇所は、標高や地形等から6つの地区に分けられるので、以下に東側から地区ごとにその結果を記述する。

第2図 道跡の範囲と路線（1/5000）



## 1 南東地区

標高22~23mの畠地、荒地部分である。25T、26Tを設定した。

### 26T（第6図）

東端のトレーニングで、3×10mの規模で設定した。トレーニング南壁断面を図示した（第6図）。耕作土以下は黄褐色の砂質シルトと細砂が厚く堆積し、礫層となり、その標高は20.3mである。遺構は検出されず、遺物はI層から陶磁器片が数点出土したのみである。

### 25T

3×10mのトレーニングである。基本層序は大別で10層確認され、X層が礫層となり、その標高が20.3mである。IV層上面で、トレーニング中央の西壁際に土師器の一括上器が伴う多穴遺構の一部を検出したが、これは堅穴住居跡の東部確認した可能性が考えられた。他に溝跡1条、土坑3基も検出されていることから、本調査として西側を拡張することとした。本調査のⅢ区である。

## 2 中央地区

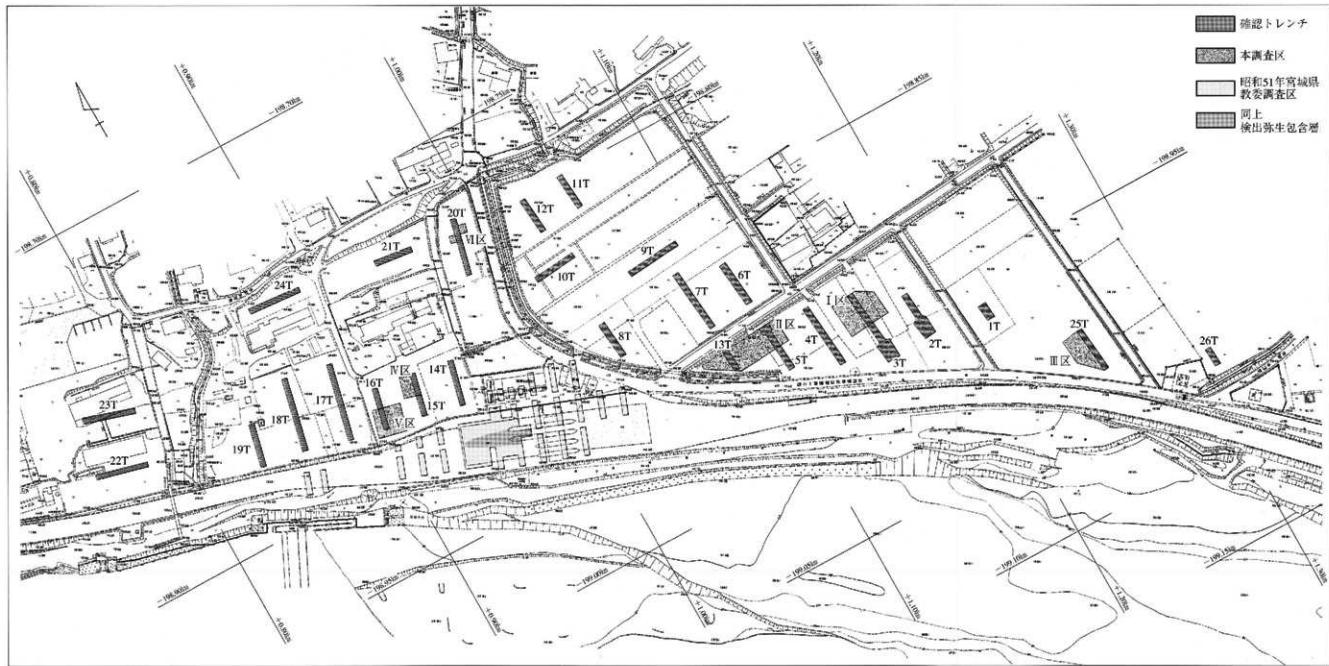
遺跡中央部の南側でより名取川が近い地区である。標高は23~24mで南東地区よりやや高くなる畠地部分である。1~5T、13Tを設定した。後述する小崖より北側におけるこの地区的基本層序は、2~5Tの調査の結果ほぼ共通していた。2Tの北壁断面により略述する（第6図）。I層は耕作土、II層は図示されていないが褐色系統のシルトで3Tや5Tなどに部分的に分布する。IIIa層は暗褐色砂質シルト、IIIb層は褐色砂層でIV層への漸移層、IV層は黄褐色砂層、Va層は暗褐色シルト、Vb層は褐色砂質シルトでVI層への漸移層、VI・VII層が鈍い黄褐色砂層で、VII層が礫層となる。ただし各層の層相には変化がみられ、特にIIIa・b層、Va・b層は場所によりシルト化あるいは黒褐色化して分布する。

### 1T（第4図）

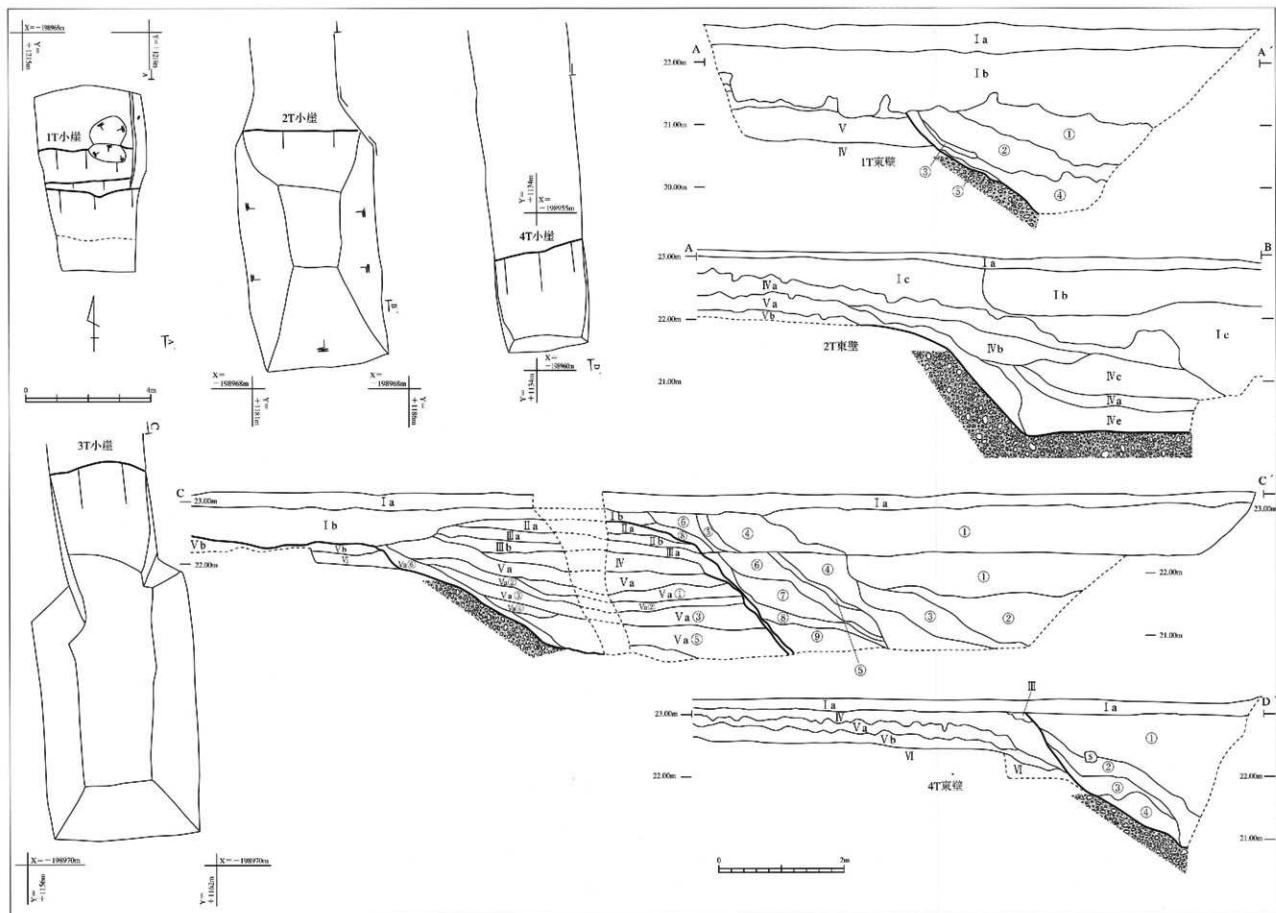
3×35mのトレーニングを設定したが、北から約3mの所で小規模な段丘崖状の落ち込み（以下、小崖）を検出し、それ以降は名取川の河川敷に連続し遺構はない判断されたため、3×9mのトレーニングで調査終了とした。現耕作による天返しが深さ1.5mまで及んでおり、基本層序は東壁北側で確認されたのみである。II~IV層は褐色シルト系の土層で、V層下部から礁が多く含まれVI層が礫層となり、その標高は20.8mである。小崖はV層で検出されたが耕作の搅乱が深いため、本来はより上位で確認されると考えられる。小崖の傾斜度は38度で、その高低差は1.5mまで確認したが、小崖下の礫層は未検出で、標高19.6mまで掘り下げている。小崖部分の堆積土は5層である。①・②層は砂や砂利がなく水成堆積というより土石流のように一度に堆積した可能性が考えられる。④層は水成堆積である。⑤層は小崖を覆う薄い層であるが、ある時期の地表面の落ち込みと考えられる。遺構は検出されず、遺物はI層より土師器片、繩文土器片が数点出土したのみである。

### 2T（第4図）

3×40mのトレーニングを設定したが、1T同様、約16mの所で小崖を検出したため、3×25mのトレーニングとなった。基本層序は前述したとおりである。小崖はVb層で検出されており、Va層が磁面に落ち込んでいる。小崖の傾斜度は50度で、高低差は2mである。崖下では礁層が検出されその標高は20.2mで、崖面にみられる高位の礁層の標高はトレーニング北端部と同じく21.5mである。小崖部分の堆積土は6層である。IVa~e層は砂で水成作用により一時期に堆積した可能性が強い。小崖を覆うVa層の時期には、平坦部が離水し地表面として安定していたと推測される。また南端のIc層の落ち込みは近年まで残存していた小崖を埋めたものである。遺構は検出されず、遺物はI・IIIb・IV・V層から繩文土器片、剥片、磨石等が出土地している。



第3図 トレンチ配置図 (1/2000)



第4図 1~4T 小崖平面・断面図

原種	土 色	土 色	性 格	特 徴
I-a	暗褐色 HYB434	シート	粗粒代土	下平太底邊しりがまで深掘
	暗褐色 HYB435	シート		
II	黒色 HYB440	砂質シルト		
III	灰褐色 HYB441	純土質シルト		
IV	褐色 HYB442	シラミ		
V	茶色 HYB443	含水シルト	アラビア形態 小粒成す	
VI	褐色 HYB445	繊維	40-100cmの断面か	
(1)	暗褐色 HYB434	シート	4-15cmの断面か	
(2)	暗褐色 HYB444	均質シルト	4-15cmの断面か	
(3)	褐色 HYB446	砂質シルト	上よりやや硬い	
(4)	黄褐色 HYB454	砂質シルト	透水性を最も多く含む。径1-20cmの断面を	
(5)	黒褐色 HYB455	シート		

27 東壁

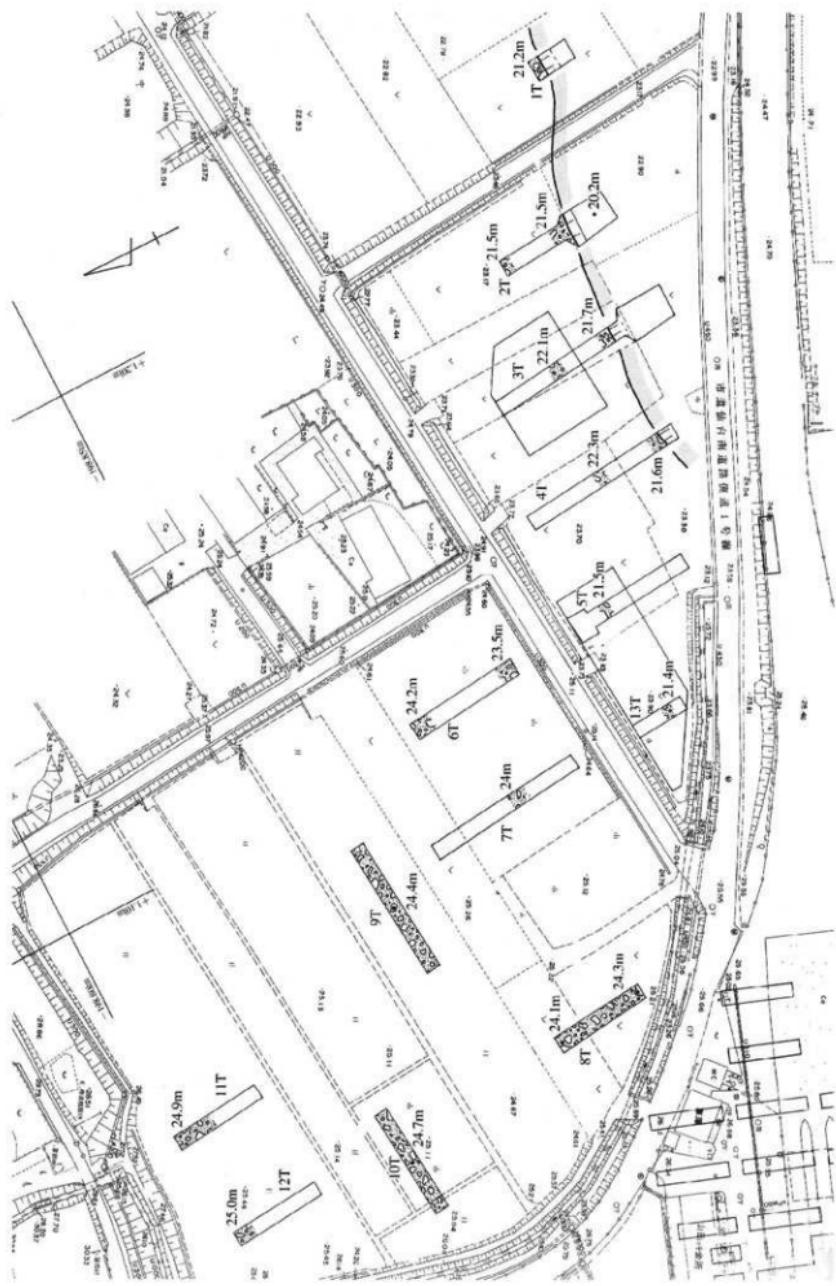
品目	土	色	規 格	考
I-a	赤	鉛白高麗色10YR3/4	砂輪シルト	抗振研磨上
I-b	薄い青紫色	10YR3/8	砂輪シルト	及振幅上
I-c				凹面振動板の軸内上(例に当たる点は附註について述べている)
II-a	アーチー	2.5Y4/4	砂輪シルト	
II-b	10R1/4	10YR4/4	砂上	及作物保護を含む
II-c	斜め	2.5Y3/4	砂上	
II-d	斜め	10YR3/8	砂上	
III-a	赤	2.5Y3/4	砂輪二	若干は10R3/8と混用され得る
III-b	赤	10YR3/2	砂輪二	若干は10R3/8と混用され得る
IV-a	赤	10YR3/2	砂輪シルト	及作物保護を含む

3785

474

位置	上	中	下	備考
I-a				越野車上
-b				浅草橋上
II-a	黒褐色10YR8/2	シート		奥花物販を含む(黒色多いのは必ずみ)
III-b	黒褐色10YR8/3	神奈川シート		
V-a	黒褐色10YR8/3	シート上	(下の部分強度多い)	
V-b	黒褐色10YR8/3	シート下	(凹み部分では、より黄色強い)	
VI	黒褐色10YR8/3	シート		
VI-a	黒褐色10YR8/3	前輪上		
VI-b	黒褐色10YR8/3	前輪下		1630cm <sup>2</sup> 内の大型壁面か、1520cm <sup>2</sup> 内の小壁多基
VI-c	黒褐色10YR8/3	後輪上		1630cm <sup>2</sup> 内の大型壁面か、1520cm <sup>2</sup> 内の小壁多基
VI-d	黒褐色10YR8/3	後輪下		1630cm <sup>2</sup> 内の大型壁面か、1520cm <sup>2</sup> 内の小壁多基
VI-e	黒褐色10YR8/3	前輪上		混合層
VI-f	黒褐色10YR8/3	前輪下		混合層

第5図 横層と小屋 (1/1000)



### 3T (第4回)

3×42mのトレンチである。基本層序は前述のとおりだが、Ⅲ a・b層、V a・b層がシルト気味になり、黒味を増している。北から14mのⅢ a層上面で昭和51年調査の窓穴住居跡（以下S51年住居）を検出し、その正確な位置が確認された。同じく北から28mで小崖を検出した。小崖の傾斜度は30度で、高低差は1.7mまで確認したが、崖下の礫層は未検出で、標高20.5mまで掘り下げている。トレンチ中央部と崖面にみられる高位の礫層の標高は22.1mと21.7mである。崖面に沿ってV a層が落ち込んでいる。小崖部分の堆積土中には、黒味のある4つの層—⑤・⑥・Ⅲ a・V a層が見られる。そのうちのⅢ a層を境に、南側では礫を多く含む①～④層が堆積し、北側には砂質シルトを中心としたⅣ a～g・V a層が堆積する。Ⅳ a～g層の全体としての層相は2TのⅣ a～e層に類似する。①層は近年まで残存していた小崖を埋める層である。前述の黒味のある層は各々が地表面であったことを示すものと考えられる。S51年住居が再確認され、Ⅲ a層が平安時代以前の層であることが判明し、周囲に遺構の存在が予想されたため、本調査としてトレンチの東西を拡張することとした。本調査のI区である。

### 4T (第4回)

3×35mのトレンチである。基本層序は前述の3T同様だが、特にⅢ a層とV a層が北半部で黒色がより強い。トレンチ北端部で5Tから延びるSD1の南岸部を検出した。方向がE-30°-Nと5Tでの方向より北に振れています。北5mが計画路線の境界となるためSD1の拡張は行わなかった。また南端部で小崖を検出した。小崖の傾斜度は32度で高低差は1.5mまで確認したが崖下の礫層は未検出で、標高20.8mまで掘り下げている。トレンチ中央部と崖面にみられる高位の礫層の標高は22.3m、21.6mである。小崖部分の堆積土は4層である。①・②層は1Tの①・②層の層相に類似し、同じ成因によるものかもしれない。③層は小崖直上のⅢ a層の崩壊土の可能性がある。④層は自然堆積層である。なお、V a・b層、VI層上面が北へ向かって傾斜し、北端部手前でやや急に立ち上がる。これは3・5Tにもみられ、礫層の凹凸があることが推定される。SD1以外遺構は検出されず、遺物はI、Ⅲ～V層から繩文土器片が10箇点出土している。

### 5T

3×27mのトレンチである。北端部で溝跡を2条検出した。北側の溝は北岸がトレンチ外になり上端幅が10m近くなること、掘り込んだ結果人工的な形態であること、東西20m離れた4・13Tでも確認されることなどから大規模な溝跡であることが推定され、本調査として5Tをを中心に拡張することとした。本調査のII区である。大規模な溝の方をSD1、その南をSD2とした。

### 13T

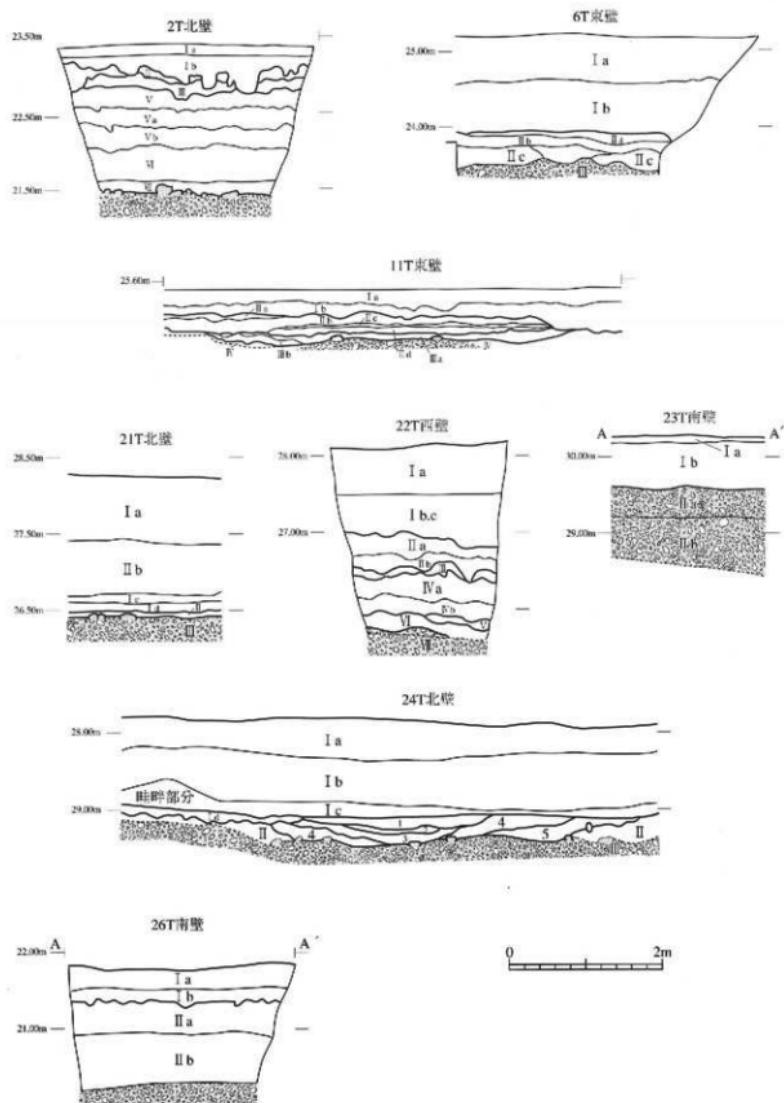
3×12.5mのトレンチである。5Tで検出されたSD1の西へ延長を確認するためのトレンチである。ここでも北岸は検出されなかった。5Tと共に本調査として拡張した。

## 3 中央北地区

遺跡範囲外の隣接地も含め、6～12Tを設定した。標高25～26mの畠地と水田部分である。前項の中央区よりも一段高い地区である。6Tの結果から以前行われた耕地整理により基本層がだいぶ擾乱されており、耕作土直下がすぐに礫層となる場合が多い。

### 6T (第6回)

3×35mのトレンチである。基本層は大別3層であるが、地表下約1.3mまでは耕地整理時の盛土と動いた礫層で、以下は褐色粘土質シルトそして礫層となる。礫層の標高は北が24.2m、南が23.5mである。遺構遺物は確認されていない。



第6図 確認トレンチ断面図

## 4T前編

部位	土色	土性	質	号
a			原生層作土	
b			結成層作土	
2a	茶褐色10YR2/2	シルト	氯化物を含む 呈色無いのは北半のみ	
2b	褐色10YR3/5	砂質シルト		
3a	褐色10YR4/3	砂質ナ	下半部の鉛灰多く	
Va	褐褐色10YR2/3	シルト	団み部分では、より高色多い	
Vb	褐色10YR3/2	シルト		
W	灰褐色10YR4/2	粘質土		
SDT 1	灰褐色10YR3/2	シルト	氯化物を少含む	
2	暗褐色10YR3/5	シルト	珪藻を小ブロック状に含む	

## 12T後編

部位	上色	土性	質	号
1	灰褐色10YR3/2	砂質シルト	抗酸性色沙質シルト小ブロック少含	
2	褐褐色10YR2/2	粘質シルト		
3	暗褐色10YR3/2	シルト	45cm内の陽面砂質上ブロックを多含	

## 14T西壁

部位	土色	土性	質	号
A	暗褐色10YR3/3	シルト	無機性土	
B	褐褐色10YR4/3	砂質シルト	各々のブロック混じり、高色	
C	褐褐色10YR2/2	粘質シルト		
D	本褐色10YR2/2	砂質シルト	日射作土	
E	茶褐色10YR2/2	砂質シルト	氯化物を少含む、表面根状茎多い	
F	暗褐色10YR3/4	シルト		
G	暗褐色10YR2/2	シルト	1cm内の陽面ブロック、他物を所々に含む	
H	暗褐色10YR2/2	シルト	他2cmの陽面ブロックを常に含む	
I	暗褐色10YR3/4	シルト	地表色ブロックを少量含む	

## 17T SK12

部位	土色	土性	性	号
SK17 1	褐 色10YR2/1	シルト	植生山椒を少含む	
2	暗褐色10YR2/3	シルト	植生山椒の根出10YR2/3を少含む	

## 19T SK05

部位	上色	土色	土性	質	号
1	深褐色10YR2/2	シルト	深い黒褐色小ブロック少含		
2	茶褐色10YR2/2	シルト	深い茶褐色小ブロック多含		
3	暗褐色10YR2/2	シルト	深い黒褐色小ブロック多含		
4	暗褐色10YR2/2	砂質シルト	持続性土		

## 19T ピッターフ

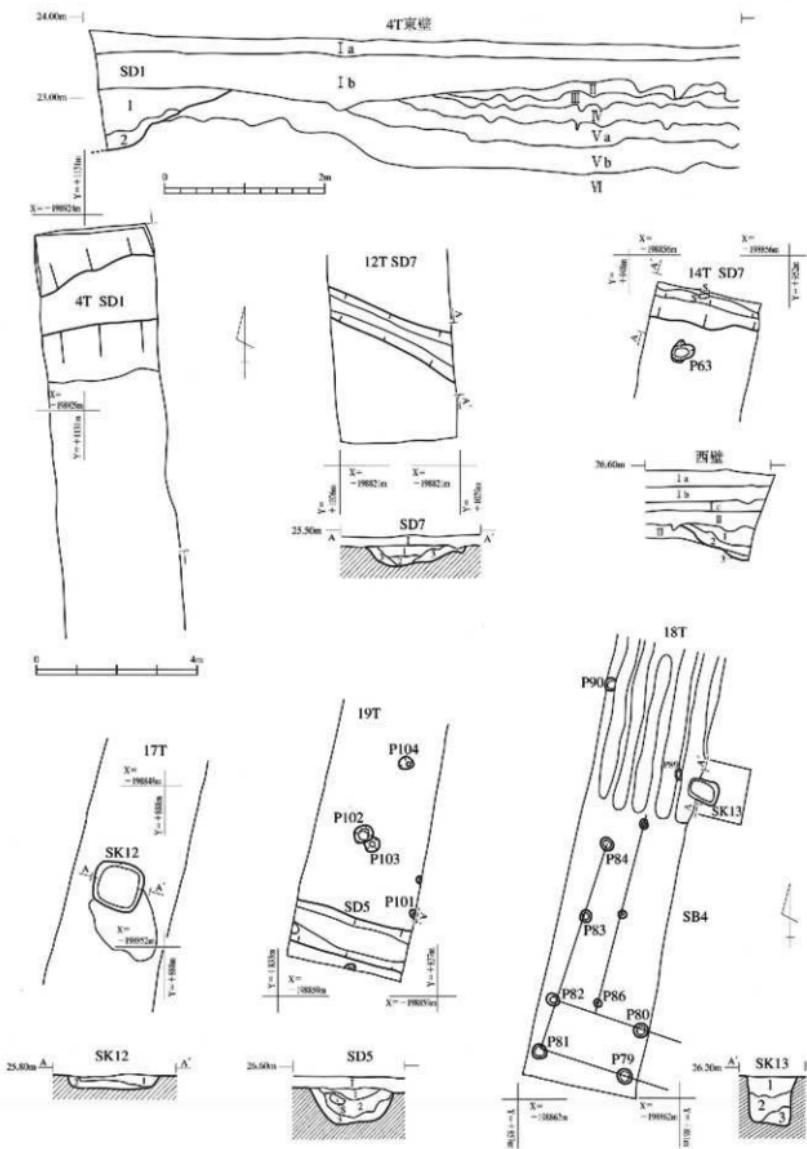
No	風 慢(cm)	風 各(c.)	風 度	上色	上色	土 性	質	号
80	50×42	33	1	黑褐色10YR2/2	シルト	柱頭外、深い黒褐色上ブロック多含		
			2	黑褐色10YR3/4	シルト	深い黒褐色上ブロック多		
103	待DE	31	1	深褐色10YR2/2	シルト	深い黒褐色上ブロック多含		
104	34×30	14	1	深褐色10YR2/2	シルト	柱頭外、深い黒褐色上ブロック多含		
			2	黑褐色10YR2/3	シルト	深い黒褐色上ブロック多		

## 19T SK13

部位	上色	土色	土性	質	号
1	赤褐色10YR2/2	シルト	暗褐色サブリック、氯化物含む		
2	深褐色10YR2/2	シルト	高色ニゴロカワ多含		
3	黑褐色10YR2/2	砂質シルト	暗褐色サブリック含む		

## 19T ピッターフ

No	風 慢(cm)	風 各(c.)	風 度	上色	土 性	風	号
79	16.35	15	1	茶 色10YR2/1	シルト	柱頭外、暗褐色サブリック少含	
			2	暗褐色10YR3/4	砂質シルト	灰色ブロック含む	
80	16.34	14	1	茶 色10YR2/1	シルト	柱頭外	
			2	暗褐色10YR3/4	砂質シルト	柱頭外	
81	15.34	13	1	茶 色10YR2/1	シルト	柱頭外	
			2	暗褐色10YR2/2	シルト	暗褐色ブロック含む	
82	32×28	20	1	茶 色10YR2/1	砂上質シルト	柱頭外	
			2	暗褐色10YR2/4	砂質シルト	塊状ブロック含む	
83	26×22	12	1	茶 色10YR2/1	シルト	柱頭外	
			2	暗褐色10YR2/4	砂質シルト	柱頭外	
84	30×26	19	1	茶 色10YR2/1	執士シルト	柱頭外	
			2	茶 色10YR2/1	砂質シルト	柱頭外	
85	17.15	12	1	茶 色10YR2/1	執士シルト	柱頭外	
87	17.15	9	1	茶 色10YR2/1	執士シルト	柱頭外	
88	18.16	9	1	茶 色10YR2/1	砂質シルト	柱頭外	
			2	暗褐色10YR3/4	砂質シルト	柱頭外	
89	28×18	9	1	不褐色10YR2/2	シルト	柱頭外	
90	32×7	23				柱頭外	



第7図 確認トレンチ造構図

## 27土壤

部位	上色	土性	備考
I-a	黄褐色10YR5/4	砂質シルト	開墾耕作土
I-b	黄褐色10YR5/4	砂質シルト	深耕耕作土
II	暗褐色10YR3/3	砂質シルト	トレシナ中央で集積あり、地上は微面食む
III	灰 10YR4/4	砂質土	地下で石灰有り。下で5cm
IV	黄褐色10YR5/6	砂質土	地下面を灰有り、一部で10cm小礫含む
V-a	暗褐色10YR3/3	シルト	炭化物、地下水浸透有り
V-b	暗褐色10YR4/4	砂質シルト	地下水位の位置との関係となる
VI	灰 10YR6/4	砂質土	地中に10cm内小礫含む有り
VII	灰 10YR6/4	砂質土	地中に20cm内小礫含む有り

## 27土壤

部位	上色	土性	備考
I-a		盛土と園芸作土	
I-b	褐褐色10YR3/4	砂質	1b层下部40cmの厚さまでグライ化
II-a	暗褐色10YR4/4	砂質シルト	
II-b	暗褐色10YR3/4	砂質	1b2-4cmの粒、表面は砂跡
III-c	暗褐色10YR4/4	砂土質シルト	
IV	暗褐色10YR3/3	砂質	10-40cmの粒、表面は砂跡
V	暗褐色10YR4/4	砂質	

## 11土壤

部位	上色	土性	備考
I-a	黄褐色2.5Y5/2	砂質シルト	泥炭耕作土
I-b	暗褐色10YR4/6	砂	炭化物有り、砾多量
II-a	基褐色10YR3/2	シルト	炭化物を含む有り、水耕耕作土
II-b	黑褐色2.5Y3/1	シルト	炭化物を含む有り、木炭耕作土
III-c	灰黃褐色10YR4/2	砂質シルト	泥炭耕作土有り
IV-d	暗褐色10YR3/2	砂質シルト	炭化物を含む有り、水耕耕作土
V-a	暗褐色10YR2/1	シルト	炭化物を含む有り
V-b	暗褐色10YR2/1	砂質シルト	炭化物を含む有り
V-c	暗褐色10YR4/3	砂質	10-20cmの粗粒

## 27土壤

部位	上色	土性	備考
I-a		深耕耕作土	
I-b		盛土	
II-c	黑褐色2.5Y3/1	砂土質シルト	1a水耕耕作土、下部に無化成堆積
II-d	基褐色10YR3/1	シルト	マンガニン、鈷紅色斑状
III-e	黑褐色10YR4/2	砂質シルト-耕作	
IV-f		砂質	10-30cmの粗粒

## 27土壤

部位	上色	土性	備考
I-a	黑褐色10YR2/1	砂土質シルト	深耕耕作土
I-b	黑褐色10YR2/1	粘土質シルト	深耕耕作土
II-c	黑褐色10YR2/1	シルト	1a水耕耕作土、下部に無化成堆積
II-d	黑褐色10YR2/1	シルト	マンガニン、鈷紅色斑状
III-e	黑褐色10YR4/2	砂質シルト-耕作	
IV-f	暗褐色10YR3/4	砂質	
V-g	暗褐色10YR4/4	砂質	
VI-h	暗褐色10YR4/4	砂質	10-20cmの粗粒

## 27土壤

部位	上色	土性	備考
I-a	暗褐色10YR4/5	砂質土	深耕耕作土
I-b	暗褐色10YR4/5	シルト	1a水土盛土
II-c	暗褐色10YR4/5	砂質シルト	10-20cmの粗粒多量有り
III-d	暗褐色10YR4/5	砂質	10cm内の粗粒多量有り

## 27土壤

部位	上色	土性	備考
I-a		深耕耕作土	
I-b		盛土	
I-c		1a水土盛土	
II-d	黑褐色2.5Y3/1	シルト	
II-e	2.5Y3/1	砂質シルト	
II-f	暗褐色2.5Y3/2	砂質	
III-g	黑褐色2.5Y3/1	シルト	
IV-h	基褐色10YR4/2	シルト	マンガニン銀葉
V-i	暗褐色10YR4/4	砂質シルト	マンガニン銀葉
VI-j	暗褐色10YR4/4	シルト	第10cmに無化成堆積
II-k	暗褐色10YR4/4	砂質シルト	第10cmの粗粒多量
III-l	暗褐色10YR4/4	砂質	10cmの粗粒多量

## 27土壤

部位	上色	土性	備考
I-a	暗褐色10YR4/4	砂質土	深耕耕作土
I-b	暗褐色10YR4/4	砂質シルト	1a層ノック入
II-c	暗褐色10YR4/6	砂質シルト	
II-d	暗褐色10YR4/6	砂質	
III-e		砂質	

## 7 T

3×35mのトレンチである。基本層序は6T同様で、約1mの深さまで搅乱を受けている。疊層の標高は24mである。遺構遺物は確認されていない。

## 8 T

3×20mのトレンチである。基本層序は6T同様で、遺構遺物は確認されていない。疊層の標高は北端が24.1m、南端が24.3mである。

## 9 T

7×30mの東西方向のトレンチである。地表下35cmまでが水田耕作土、耕地整理事時の盛土で以下は疊層である。遺構遺物は確認されていない。疊層の標高は24.4mである。

## 10 T

3×24mの東西方向のトレンチである。水田耕作土20cmの直下が疊層で、遺構遺物は確認されていない。疊層の標高は24.7mである。

## 11 T（第6図）

3×20mのトレンチである。地表下60cmまでが、水田耕作土、耕地整理事時の盛土、旧水田耕作土で、以下が疊層となる。遺構遺物は確認されていない。疊層の標高は24.9mである。

## 12 T（第7図）

3×20mのトレンチである。水田耕作土直下のⅡ層が黄褐色砂質層、以下が疊層となる。その標高は25mである。Ⅱ層上面で溝跡1条（S D7）を検出した。S D7は、検出長3.2m、方向E-23°-S、上端幅120cm、深さ25cmである。堆積上は3層で、出土遺物はない。

## 4 西地区

遺跡の西側であり、昭和51年の調査で弥生時代の遺物包含層が検出された場所の北西にあたる。標高は26~27mで前回調査地点よりもやや高くなり、包含層を形成した集落の遺構が期待された地区である。14~19Tを設定した。この地区の基本層序は共通している。Ⅰ層が現・旧耕作土、Ⅱ層が黒褐色砂質シルト、Ⅲ層がⅣ層への漸移層、Ⅳ層が黄褐色砂質シルト層、V層が疊層である。

## 14 T（第7図）

3×25mのトレンチである。北端のⅢ層上面で溝跡1条（S D6）を検出した。S D6は、検出長2.8m、方向E-11°-S、上端幅90cm以上、深さ40cmである。堆積上は3層で、そのうち第2層は人為堆積土と考えられる。出土遺物はない。

## 15 T

3×24mのトレンチである。Ⅳ層上面で並行する柱穴列を検出し、廂付の建物跡の存在が予想されたため本調査として西側を拡張した。本調査のⅣ区である。

## 16 T

3×24mのトレンチである。南半のⅣ層上面でやや細長いプランの柱穴を数基検出し、複数の建物跡の存在が予想されたため、本調査として東側を中心に拡張した。本調査のV区である。

## 17 T（第7図）

3×42mのトレンチである。中央のⅣ層上面で土坑1基（SK12）をピット5個を検出した。SK12は、平面形が1辺が120cmの隅丸方形である。堆積土は2層で、第2層は人為堆積土である。堆積土中から縄文土器片が2点出土している。ピットは径20~30cmで柱痕跡等はみられない。

#### 18 T (第7図)

3×40mのトレンチである。IV層上面で土坑1基（S K13）、ピット14個を検出した。ピット10個に柱痕跡があり、そのうちP79~84はその配置関係から廻付の建物跡と考えられ、S B4とした。S B4は、南北2間、東西2間以上の建物跡で南側に廻が付く。方向は南北がN-18°~Eである。建物総長は南北が5.3mで、柱間は母屋が190~240cm、廻が220cm、母屋と廻の間は130cmである。柱穴は径22~35cmの円形で、深さは12~20cmである。柱痕跡は10~15cmである。S K13は、IV層上面で検出されたが、掘り込み面はI c層中である。規模は長軸75cm、短軸54cm、深さ60cmである。堆積土は3層すべて人為堆積土である。

#### 19 T (第7図)

3×24cmのトレンチである。南端のIV層上面で溝跡1条（S D5）とピット9個を検出した。S D5は、検出長2.9m、上端幅110cm、深さ45cmである。堆積土は3層で土師器片が3点出土している。ピットは20~50cmのほぼ円形で柱痕跡のあるものが3個あったが、建物跡等は不明である。

### 5 隣接北区

遺跡範囲外の北側隣接地に20・21・24Tを設定した。北側に広がる段丘面（中町段丘）の段丘崖の麓にあたり、標高は26~29mである。

#### 20 T

3×31mのトレンチである。織層の直上で焼けた織の箇中部を検出したため、その箇所の東西を本調査として拡張した。本調査のVI区である。

#### 21 T (第6図)

3×31mの東西トレンチである。地表下1.5mが現畑耕作土と盛土でその下に旧水田耕作土があり、薄い砂層を介在させすぐに織層となる。その標高は26.4mである。遺構遺物は確認されていない。

#### 24 T (第6図)

3×29mの東西トレンチである地表下1mが現畑耕作土と盛土でその下に旧水田耕作土があり、黄褐色シルトを介在させすぐに織層となる。その標高は27.5~27.8mである。また旧水田耕作土直下で自然による凹地を検出している。凹地は上端幅約5mで浅い溝状を呈し、自然流路の可能性が考えられる。堆積土は5層で、堆積土中より赤燒土器片が出土している。遺構は確認されていない。

### 6 隣接西区

遺跡範囲外の西側隣接地ないに22・23Tを設定した。23Tは北側に広がる段丘面の南端部にあたり標高約30m、22Tはその段丘崖の麓にあたり標高約28mである。

#### 22 T (第6図)

3×29mの東西トレンチである。地表下約1~1.5mが現表土と盛土でその下にII層の旧畑耕作土がある。III層が黒褐色砂質シルト、IV~VI層が黄褐色シルト~砂で織層が織層である。その標高が25.7mである。IV層で小ピットと倒木根を検出した。ピットには柱痕跡等はみられない。I層中より土師器片、織文土器片が数点出土した。

#### 23 T (第6図)

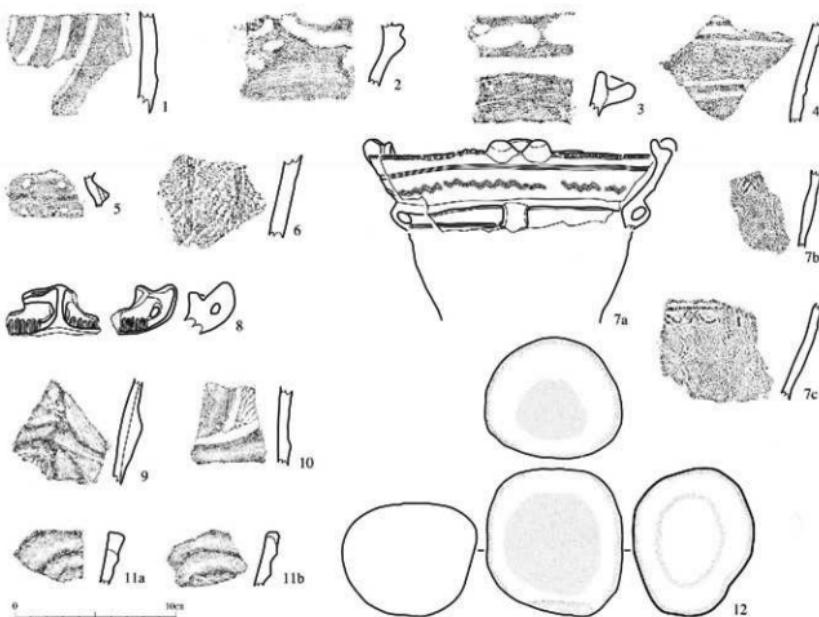
3×29mの東西トレンチである。地表下約70cmの現表土と盛土の下はすぐに織層である。その標高は29.6mである。遺構は確認されていない。遺物はI層中より陶器片が数点出土しているのみである。

## 7 確認トレンチ出土遺物 (第8図)

確認トレンチの各層から、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、剥片石器、礫石器等が出土している。縄文土器は3Tを中心に2~5Tに比較的多くみられ、土師器は堅穴住居跡が検出された25Tに多くみられる。2~5Tの縄文土器はⅢa~Vb層から出土し、特に3TのⅢa~Vb層に多い。3Tの遺物は本調査I区の項で図示し、ここでは2・4・5Tから出土した縄文土器11点、礫石器1点を図示した。

7は口縁部主体の深鉢である。器形は体部下半が円筒状で体部上半が膨らみながら立ち上がり、頸部で屈曲し、口縁部が内弯気味に外傾する。口唇部には刻目と、2個1対の貼り瘤状の突起と1個の扁平な突起とで1単位となる突起が4單位付けられる。口縁部の中央には粘土紐貼り付けによる山形文があり、同じ手法による幾何学文と横位置縦文が体部上端部にもみられる(7b、7c)。口縁部と体部との境には小さな橋状把手が4単位付く。地文は縦位のLR・RL結束羽状縦文である。この土器は文様の特徴から大木6式と考えられる。

7以外の縄文土器はおおむね大木8a~10式のものである。



番号	種類	走査-切位	器形				直径	口縁	底質	高さ	厚さ	参考番号
			長軸	短軸	側面	底面						
7a	縄文土器	2T 27b	口縁:突起、肩部:斜線、縁:1、粘土紐貼り山形文				19.5	近縁	砂質	—28a	A-10	
1	縄文土器	2T 4e	縦溝波文	14-1	A-8	7b	縄文土器	2T 37b	LR・RL・RR・RR	—28a	A-10	
2	縄文土器	2T 12	三連窓孔、直邊波文	14-2	A-7	8	縄文土器	4T Vb	直縁	—22	A-22	
3	縄文土器	2T 12	三連窓孔、波文	14-3	A-7	9	縄文土器	4T Vb	波文	—21	A-21	
4	縄文土器	2T 27	縦溝波文	14-4	A-12	10	縄文土器	4T Vb	波文	—24	A-24	
5	縄文土器	2T 27	縦溝、穿孔	14-5	A-11	11a	縄文土器	3T Vb	波文	—25	A-25	
6	縄文土器	2T Vb	波文波文	14-7	A-13	12	縄文土器	2T Vb	波文	—27a	K-32	

第8図 各トレンチ出土遺物

## 第3章 本 調 査

### 第1節 I区

3Tでの確認調査でS51年住居を再検出し、周辺に古代の遺構の存在が予想されたため、S51年住居を中心に捲乱部をさけ拡張し、東西23m、南北20mの調査区を設定し、東側をIA区、西側をIB区とした。IA区は、大半が畑作や農地改良工事などで大きく搅乱を受けていた。IB区では、土坑2基を検出した。3Tの調査結果からIV層以下では遺構が確認されないため、III層上面で調査を終了している。

#### 1 基本層序

5T北半部で確認された層を中心に記述する。確認された層は、大別で7層、細別で10層（3T南端部の小崖堆積土を除く）である。大まかにみると、I層は現・旧畑耕作上、II層はより古いと考えられる畑耕作上、III～V層は2～5T・II区とはほぼ共通で、黒褐色、暗褐色、黄褐色の土層が繰り返し堆積する層、VI層が礫層である。その標高は21.7～22.1mである。

I層：a～c層に細分される。Ia層は現畑耕作上で上面は緩やかに南へ傾斜する。Ib層は昭和51年頃の農地改良工事の搅乱で南半が著しくVb層まで達し、各層の大きなブロックがみられる。Ic層はそれ以前の畑耕作土である。

II層：a・b層に細分される。3T南端のIIIa層上位にのみ観察される。IIa層は純い黄褐色シルトでIIIa層起源のブロックと灰白色火山灰の小ブロックを含み搅拌されている様相から、Ic層以前の畑耕作上の可能性を考えられる。Iib層は褐色シルトで、IIa層と同様の成因が考えられるが、灰白色火山灰は含まない。

III層：a・b層に細分される。IIIa層は黒褐色シルト、層厚10～20cmで、本来は広く分布していたと考えられる。北半では北へ傾斜するが3T南端部では南へ傾斜し小崖へ落ち込む。このことからS51年住居付近が微高地になっていたことが推定される。S51年住居の再検出から古代の遺構確認面と考えられる。IIIb層は暗褐色シルト、層厚20～30cmでIV層への漸移層である。分布や起伏はIIIa層と同様である。

IV層：褐色細砂、層厚10～50cmで下部がやや粗い砂粒になる。3T南端部にもみられる。Va層上面の緩やかな凹みに厚く堆積し、わずかに北へ傾斜する。

V層：a・b層細分される。Va層は暗褐色粘土質シルト、層厚10～60cmで遺物を若干含む。上面はやや南へ傾斜する。北側に厚く堆積するが、Vb層の北への急な立ち上がりに起因する。Vb層は褐色シルト、層厚10～40cmでVI層への漸移層である。遺物を若干含む。上面は北へわずかに傾斜し北端部で急に立ち上がるが、これはVI層の起伏に起因する。

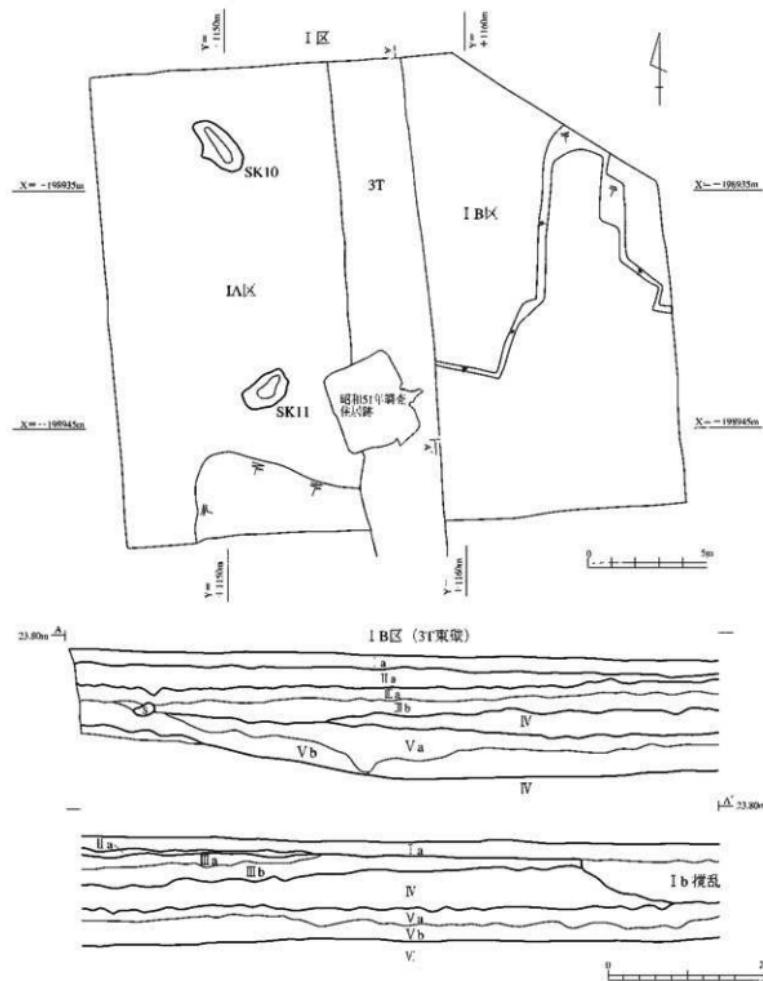
VI層：黄褐色粘土質シルトで南へ行くほど砂質化する。小崖から北へわずかに傾斜するが、北端部で急に立ち上がる。このようなくぼむ地形は3～5Tでも確認されている。

VII層：礫層である。

#### 2 遺構

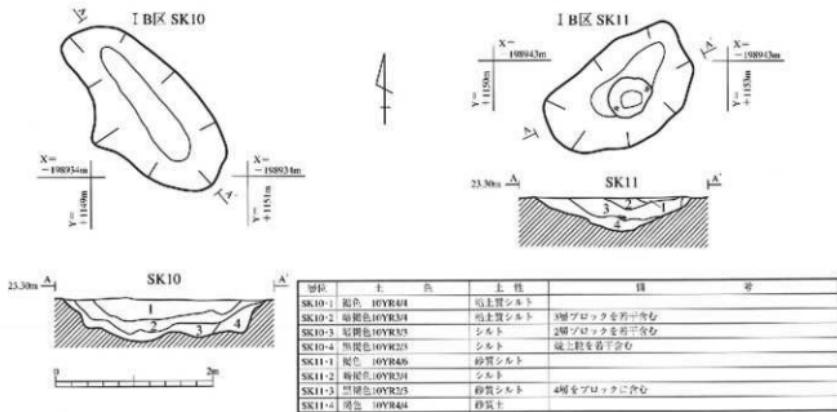
##### S K 10

IA区北端部、IIIa層上面で検出された。規模は上端2.6×1.4m、下端1.2×0.55m、深さ約50cmで、平面形は梢円形である。長軸の方向はほぼ北西である。堆積土は4層、レンズ状堆積で自然堆積である。出土遺物はない。



岩性 I	上	中	下	特
Ia	透明白色 10YR1/5	シルト	瓦礫鉄作土	
Ib			磚瓦鉄作土の塊及	
IIa	透明白色 10YR1/4	粘土質シルト	瓦礫鉄作土下部	
IIb	透明白色 10YR2/3	シルト	瓦礫鉄作土全層	
IIIa	透明白色 10YR3/4	シルト	白土とやや青あるいは	
IIIb	褐色 10YR3/6	細砂	下部やや灰色くらむ	
IV	褐色 10YR4/6	砂質シルト	瓦礫鉄作土全層	
Va	褐色 10YR3/5	砂質シルト	瓦礫鉄作土全層	
Vb	褐色 10YR4/6	シルト	南に行く程砂質化する	

第9図 I区遺構配置図・基本層序



第10図 SK10・11平面・断面図

### SK11

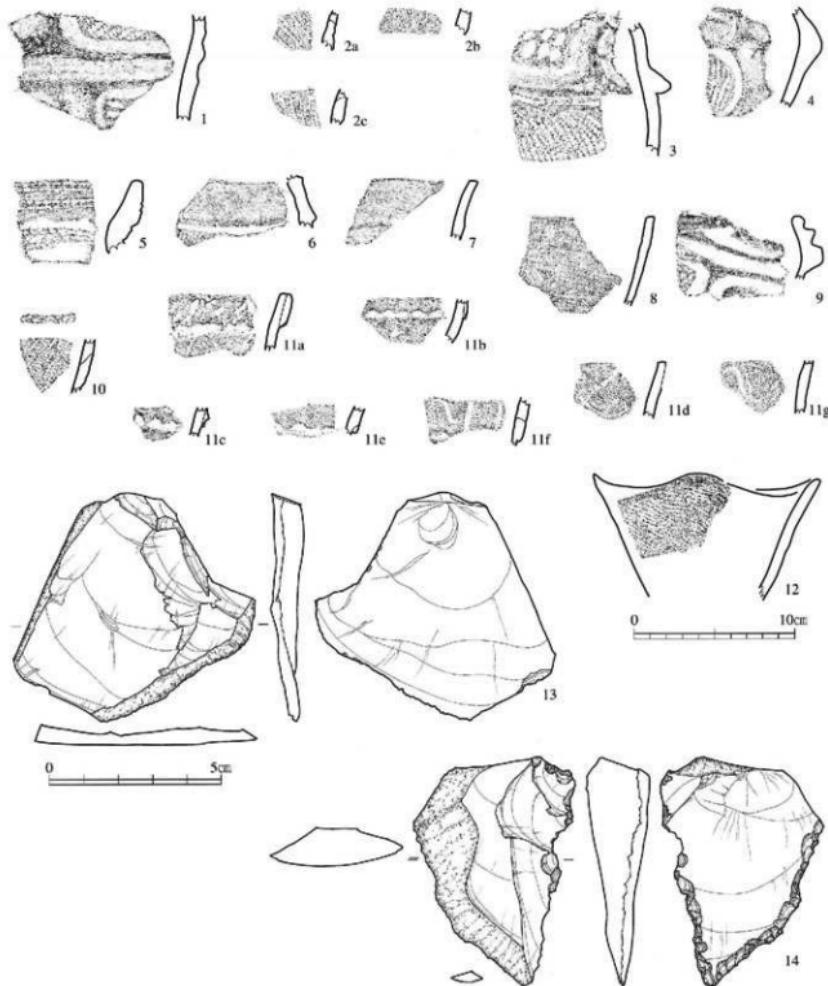
I A区南端部、IV層上面で検出された。S51年住居のすぐ西側に位置する。規模は上端2×1.35m、下端1.22×0.55m、深さ約40cmで、平面形は不整楕円形である。長軸の方向はほぼ北東である。堆積土は4層、レンズ状堆積で自然堆積である。出土遺物は縄文土器片3点で、1点図示している。1は大木8a式の破片である。

### 3 基本層出土遺物

基本層から縄文土器、土顎器、須恵器、土偶、剥片石器などが出土しているが少量である。また土顎器、須恵器はI層出土がほとんどである。なかでも縄文土器が比較的多く、特にⅢa・Vb層からの出土が多い。縄文土器12点、土偶1点、剥片石器2点、砾石器4点を図示した。

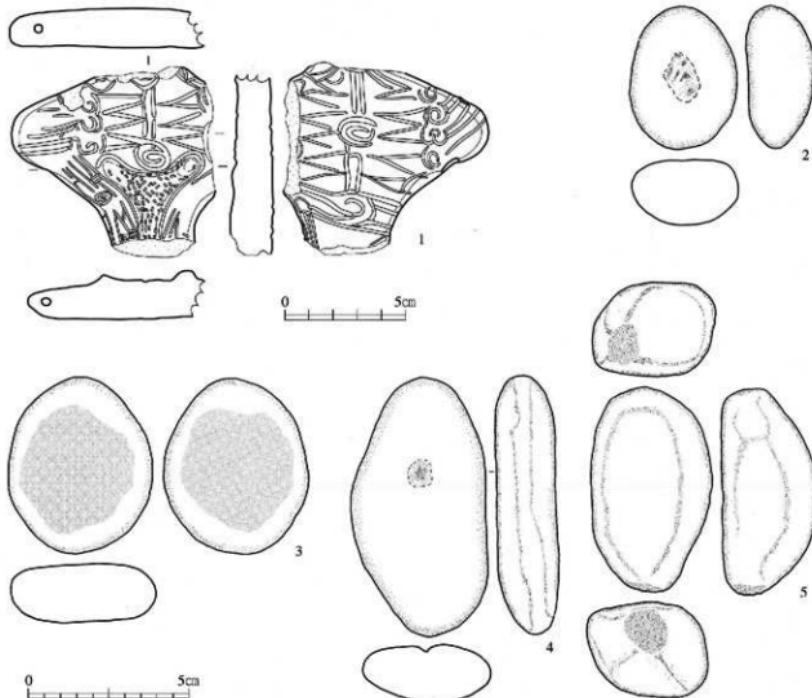
2は先端の鋭利な工具による沈線文が施されたものだが、土偶の破片の可能性もある。5は肥厚する口縁部に半截竹管による押引文が施されている。IIa～gは同一個体で、複合口縁の下端に刺突がなされ、口頭部には波状の沈線となるものである。これらは大木5～6式のものと考えられる。そのほかは、おおむね中期大木8b式から後期にかけてのものである。

第12図1は中実の土偶の胸部資料で、左腕部を欠く。正面には刺突のあるY字状隆帯があり、貼り付けによりに乳房が表現されている。正面・背面には横位、縱位、斜位の沈線文や渦巻文が施文される。腕部には径3mmの貫通孔が穿たれている。



番号	種類	留置位置	特徴	写真図版	登録番号	番号	種類	留置位置	特徴	写真図版	登録番号
1	縞文土器	SK11-1-3号	陰沈模文 LK模文	14-12	A-28	7	縞文土器	裏冠	縞文	14-18	A-16
2	縞文土器	前a面	右側する沈模文	14-13abN	A-1	8	縞文土器	裏端	縞文	14-19	A-18
3	縞文土器	目端	右側斜彎模文 RL模文	14-14	A-2	9	縞文土器	裏端	縞文	14-20	A-19
4	縞文土器	裏a面	陰沈模文 RL模文	14-15	A-4	10	縞文土器	V型	RL模文 14-11-2模文	14-22	A-20
5	縞文土器	目端	半成形部に左る押引文	14-16	A-14	11	縞文土器	裏端	複合V字下端に斜文 沈法模文	14-26erg	A-29
6	縞文土器	目端	陰沈模文 空筒模文	14-17	A-15	12	縞文土器	裏端	14-4cm 沈法口線 LK模文	14-27	A-3
参考											
番号											
種類											
13	圓錐形鉗痕ある石器	V字型	未満右側に圓錐形鉗痕	14-17	石材	重量(g)	長大径(cm)	最大幅(cm)	高さ(cm)	写真図版	登録番号
14	小形形石器	直端	未満尖頭部状	14-18	石質	32.1	76.85	71.50	8.30	18-1	K-19
						48.8	72.80	57.00	17.15	18-2	K-14

第11図 I区 出土遺物(1)



番号	種類	遺物・部位	特徴			石材	重量(g)	測定上半			実測面積	実測面積
			直徑	縦幅	横幅			(L×W×H)cm	(L×W)cm			
1	三脚	立脚	中高 直縫孔	圓筒形 圓筒文	直筒文 Y字形溝槽	安山岩	350	8.9	6.7	4.2	19-2	K-37
2	円石	立場	(浅い)凹み	-	-	安山岩	480	10.9	9.0	3.6	19-3	K-35
3	礫石	立場	圓筒形	-	-	岩	620	16.0	8.5	3.8	19-5	K-36
4	円石	立脚	折入溝槽	-	-	安山岩	780	12.8	7.6	5.9	19-4	K-33
5	鉄石	立脚	圓筒形打痕	-	-	-	-	-	-	-	-	-

第12図 I区出土遺物(2)

## 第2節 II区

5・13Tで東西に延びる堤跡を検出したため、5・13Tを中心にして東西46m、南北14mの台形の調査区を設定した。検出された遺構は、溝跡(SD)3条、井戸跡(SE)1基、河川跡(SR)1条、性格不明遺構(SX)3基である。

### 1 基本層序

大別して7層、細別して14層に分けられる。大まかにみるとI層は現・旧耕作土である。II層は暗褐色のシルト～粘土質シルトの層である。III～VII層にかけては、2～5T・I区とほぼ共通する。縦層はSD1の南端では標高約21.5mで、5T南端では22.2mと南が高くなる。

I層：a・b層に細分される。Ia層は現耕作土上で上面は南へ傾斜する。Ib層は旧耕作土で、層厚が10～50cmでSD1の上部である北へ厚くなる。下面が北への傾斜になり、旧地形が北傾斜であったことを窺わせる。

II層：a～d層に細分される。IIa・b層はともに暗褐色シルトである。IIc層は黒褐色粘土質シルトでSD1の上部に厚く堆積し、堆積土1層に相当する。IId層は暗褐色粘土質シルトで、IIIa層のブロックを含むことから時期は不明だが耕作土の可能性がある。SD1の掘り込み面の可能性がある。

III層：a・b層に細分される。IIIa層は黒褐色粘土で、層厚10～20で北へ傾斜する。IIIb層は黒褐色で砂質の底合でb1岩とb2岩に細分される。IIIb層も北へ傾斜する。

IV層：暗褐色砂質シルト。層厚10～30cmで、北へ傾斜する。

V層：a・b層に細分される。Va層は黒褐色粘土で層厚20～40cmで北へやや傾斜する。Vb層は暗褐色粘土。

VI層：暗褐色砂質シルト。縦層上に厚く堆積する。

VII層：縦層。前述したように縦層面には北への傾斜が推定され、それが上位の層の北への傾斜となって現れている。

### 2 遺構

#### SD1

II区の北半部全体に検出された。検出長は45m以上で、東隣の4T北端部でも検出されていることから、東へ60m以上のびている。II区内での南端の検出長は36mである。北岸は調査区外である。掘り込みは調査期間とのかね合いから、東の5Tを挟んだ11mをIIA区、西の18mをIIB区としてその箇所のみ行った。IIB区での北壁の立ち上がり状況から北岸上端が間近であることがわかり、上端幅は9.5m、推定約10mと考えられる。底面はIIA区では幅20～50cm、IIB区では40～50cm、深さは2.6～2.8mである。壁は底面より高さ約160cmまでは急角度で立ち上がり、それ以上は緩く立ち上がる。底面はほぼ平坦で、その標高はIIA・B区とともに約20.3mである。堆積土はIIA区では大別6層、IIB区では14層に分けられるが、大別すると上位が暗褐色系の砂質シルトの自然堆積層、中位が下位に存在するSR1堆積土を起源とする黒褐色、灰白色、黄褐色などのブロックを多量に含む人為堆積層、下位が緑褐色の砂質シルト・砂で小枝などを含む自然堆積層である。中位の人為堆積層はSR1が起源であることから、SD1を掘り込んだ際の土がSD1の脇に盛上されたものが、埋め戻されたと推察される。出土遺物は、須恵器片、土師器片、縄文土器片、刺片、石皿などが出土しているが、これらはSD1の時期決定資料ではない。縄文土器片3点、刺片3点、石皿1点を図示した。

#### SD2

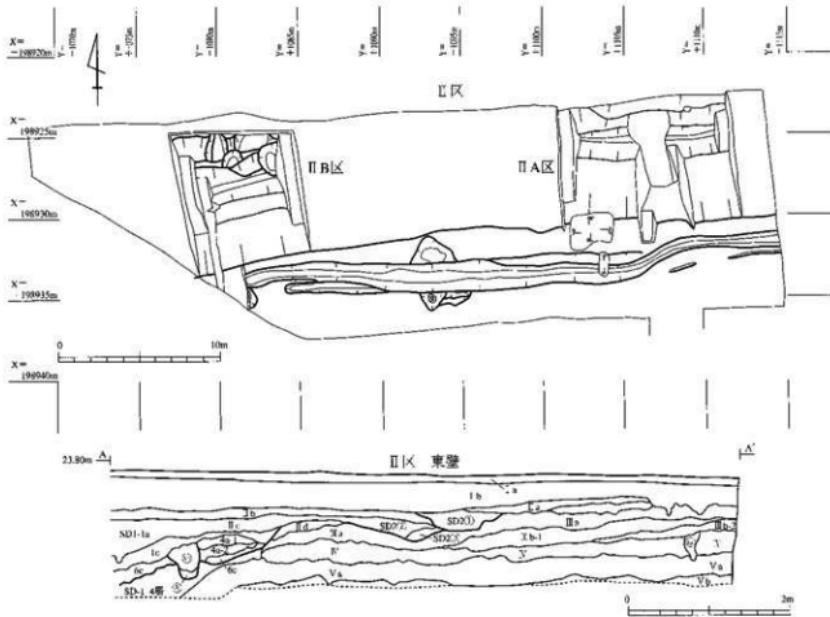
III層上面で検出した。SD1の南に並行している。断面観察より2条であることが判明し、IIb層上面をSD2A、IId層をSD2Bとした。

## SD2A

II区西半部で約6m、東半部でその残存部を一部検出している。規模は東壁から上端幅120cm、下端幅40cm、深さ20cmである。方向はほぼ東西方向である。断面形はやや開いた舟底形である。堆積土は1層で、出土遺物はない。

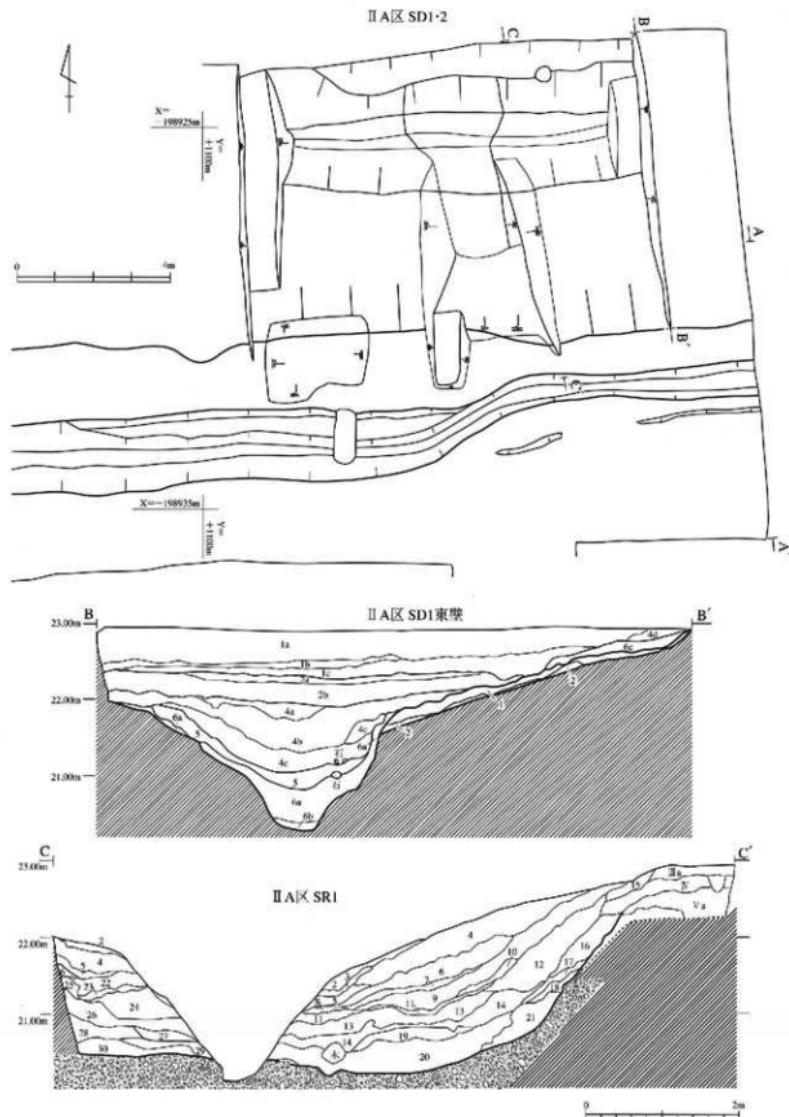
## SD2B

S D1の南側に並行し、S D1との間隔は0.5~2mである。ほぼ東西方向に伸びるが、東でやや強く、西で緩く屈曲している。検出長は33mで、東西とも調査区外へ伸びているが、東の4Tでは確認されていない。上端幅60~180

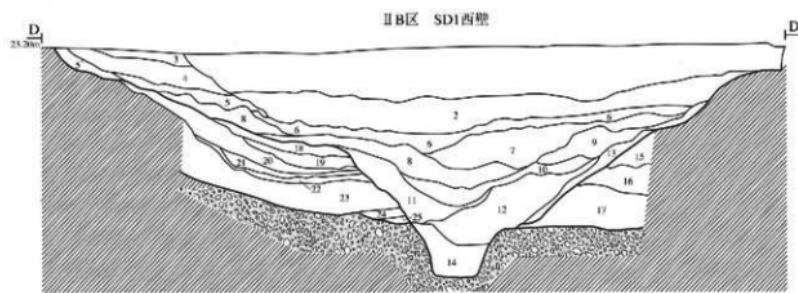
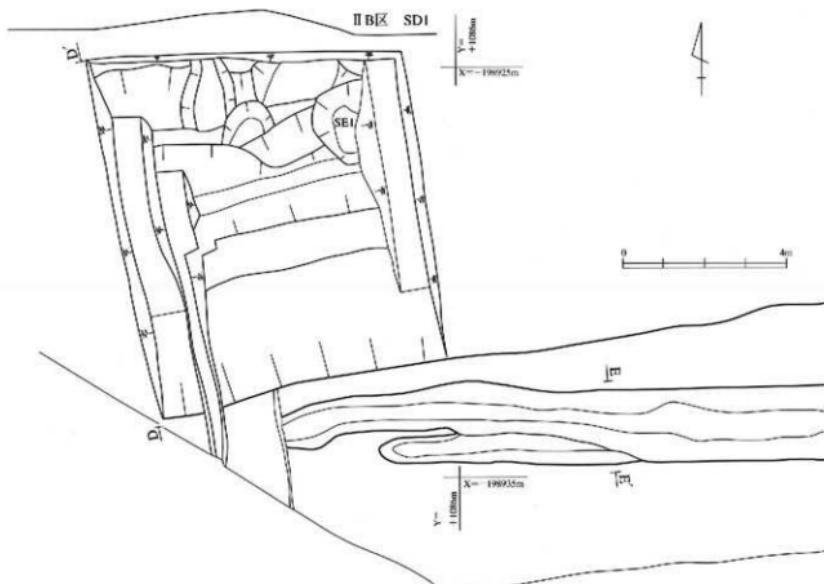


地質	生色	上位	特 考
Ia	褐色色10YR3/3	シルト	泥炭質土
Ib	褐色色10YR3/4	シルト	泥炭質土上部
IIa	褐色色10YR3/2	シルト	成層色土、底部より上にむかひ、1段よりしまる
IIb	褐色色10YR3/3	シルト	マンガン斑点あり
IIc	赤褐色10YR2/2	粘土質シルト	マンガン斑点あり、鉄化合物を含む
IID-1	赤褐色10YR3/5	粘土質シルト	鉄化合物とマンガン斑点をブロックに含む
IIc-2	赤褐色10YR2/2	粘土質シルト	鉄化合物とマンガン斑点をブロックに含む、鉄化合物を含む
R	赤褐色10YR2/3	粘土質シルト	ヨード層より鉄化合物
Vg	深褐色10YR2/3	粘土	より鉄化合物、鉄化合物で暗くなる
Vb	褐色色10YR3/2	粘土	
Vc	褐色色10YR3/4	砂質シルト	
III-1C	黒褐色10YR2/1	シルト	マンガン斑点を含む
III-4&5	灰褐色10YR4/2	砂質シルト	黒褐色斑点シルトをブロックに含む
III-6	灰褐色10YR4/1	粘土質シルト	灰白色粘土ブロック、灰色土、黒褐色粘土ブロックを含む
III-8	黒褐色10YR3/1	粘土質シルト	
SD2-1	黒褐色10YR3/3	シルト	マンガン斑点、灰褐色土を含む
SD2-2	黒褐色10YR3/3	粘土質シルト	マンガン斑点あり、灰褐色土を含む
SD2-3	黒褐色10YR3/3	シルト	直壁をブロックに含む
SD2-4	黒褐色10YR3/3	シルト	マンガン斑点を含む
◎			
◎ T.弱色10YR2/3	砂質シルト	輪層合砂質シルトをブロックに含む	

第13図 II区遺構配図・基本層序



第14図 II A区 SD1・2平面・断面図

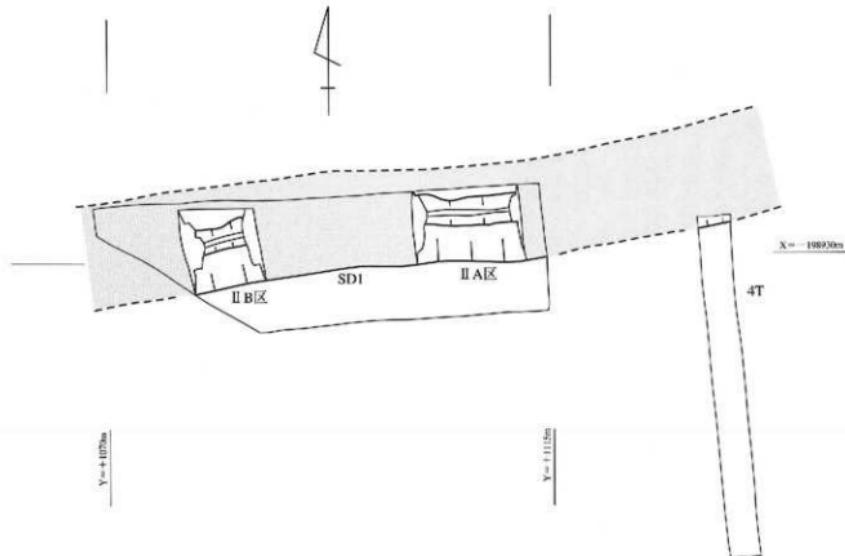


層位	土色	土性	面	号
SD2-1	暗褐色10YR3/4	シルト	マシガン段、酸化鉄沈含む	
SD2-2	暗褐色10YR3/0	シルト	マシガン段、酸化鉄沈含む	

第15図 II B区SD1・2平面・断面図

## III. SD1-SD1 土壌調査

初 定	上 色	上 植	中	下
1-A-Z SD1 1a	暗褐色 10YR5/4	シルト	灰化鉄化物、マンガン、酸化鉄鐵合むを含む	4cm
1b	褐褐色 10YR5/2	シルト	酸化鉄物、マンガン、酸化鉄鐵合む	
1c	褐褐色 10YR5/4	粘土質シルト	酸化鉄物、マンガン、酸化鉄鐵合む	
2a	褐褐色 10YR5/4	粘土質シルト	酸化鉄物、マンガン、酸化鉄鐵合む	
2b	にほい褐色 10YR4/4	シルト	酸化鉄物、マンガン、酸化鉄鐵合む	
4a	にほい褐色 10YR4/3	シルト	SRI地盤上に現れる高褐色、暗褐色、灰褐色などの小アロッカからなる	
4b	褐褐色 10YR2/3	粘土質シルト	SRI地盤上に現れる大アロッカからなる、人為堆積二、灰褐色土層を含む	
4c	黄褐色 10YR5/3	沙質シルト	SRI地盤上に現れるアロッカからなる、灰褐色火山灰を含む、人為堆積三	
4d	褐褐色 10YR4/4	シルト	SRI地盤上に現れるアロッカからなる、人為堆積土、灰褐色火山灰を含む	
5	灰褐色 2.5YR3/1 - 黄褐色 10YR4/1 - 新土、草	泥質粘土	泥質粘土2.5YR2 - 細砂の層	
6a	セリーフ系色3YV2/2	泥質シルト	天気、灰褐色シルトをアロッカに含む、植物、小枝などを含む	
6b	灰褐色 3YV4/1	粘土	粘土灰、表面をマッシュに含む	
6c	灰褐色 10YR3/4	粘土質シルト	粘土質シルト、酸化鉄鐵合む	
II-B(SD1) 1.2	黄褐色 10YR5/3	泥土	土壌形成	
1-F	出褐色 10YR2/2			
2	灰褐色 10YR5/3	シルト	暗褐色シルトのアロッカ、灰色の細小アロッカを含む	
3	灰褐色 10YR5/4	シルト	灰褐色火山灰を褐色に含む	
4	灰褐色 10YR2/3	沙質シルト	マンガン、酸化鉄鐵合む、炭化物鉱物を含む、灰褐色植物	
5	灰褐色 10YR4/3	粘土質シルト	マンガン、酸化鉄鐵合む、うすい樹皮層を含む	
6	褐褐色 10YR4/4	細砂	マンガン、酸化鉄鐵合む、灰褐色植物	
7	灰褐色 10YR5/3	泥質シルト	マンガン、酸化鉄鐵合む	
8	灰褐色 10YR4/5	小砂砾	粗粒層	
9	灰褐色 10YR5/3	細砂	マンガン、酸化鉄鐵合む	
10	灰褐色 10YR5/4	粘土質シルト	マンガン、酸化鉄鐵合む	
11	暗褐色 10YR2/2	粘土	古く砂層、透水性低層を含む	
12	暗褐色 10YR4/4	粘土質シルト	マンガン斑点を含む	
13	紫褐色 2.5Y5/2	砂、砂砾	細粒、粘土、褐色、灰褐色植物	
14	褐褐色 10YR2/2	粘土	半砂、半砂岩、小砂砾を含む	
15	紫褐色 10YR2/5	粘土質シルト	半砂、半砂岩、小砂砾を含む	
16	紫褐色 10YR3/3	粘土	半砂、半砂岩の青褐色土、紫褐色土をアロッカに含む	
17	褐褐色 10YR4/4	泥質	半砂、半砂岩の青褐色土を含む	
18	紫褐色 10YR2/3	粘土	半砂、半砂岩の青褐色土を含む	
19	紫褐色 2.5Y5/3	半砂		
20	オリーブグリーン7.5Y3/2 - 高温土	セリーフ系色2.5GY2/4 - 新土、草	セリーフ系色2.5GY2/4 - 新土、草、高温土10YR3/4 - 新土、草、温度2.5YS/3 - 脱離力可弱解本あり	
21	泥質灰土10GY3/1	細砂		
22	灰褐色 10YR5/3	細砂	酸化鉄鉄	
23	灰褐色 10YR4/3	細砂		
24	褐褐色 10YR4/4	細砂		
25	灰褐色 10YR5/3	細砂	酸化鉄鉄、マンガン斑点を含む	
26	灰褐色 10YR6/2	粘土質シルト	玉砂、無鉄鉱状に含む	
	紫褐色 2.5Y5/2	細砂		
27	灰褐色 2.5Y5/3	シルト	難透水	
28	紫褐色 2.5Y5/3	シルト		
29	青褐色 2.5Y5/3	シルト		
30	粉紅色 10YR7/4	泥質シルト	可透、前水あり	
III-B(SD1) 1	灰褐色 10YR2/3	粘土質シルト	マンガン斑点、酸化鉄鉄合む	
2	褐褐色 10YR2/2	粘土質シルト	マンガン斑点、酸化鉄鉄合む、付5-10cmの円錐形を含む	
3	暗褐色 10YR3/3	シルト		
4	灰褐色 10YR2/2	シルト	SRI地盤上に現れる「灰褐色」の泥質シルトをアロッカに含む	
5	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト		
6	暗褐色 10YR3/4	シルト	風化巣の「灰褐色」	
7	玉砂 10YR2/2	シルト	玉砂、半砂、半砂岩の「灰褐色」を含む、人為削壁十	
8	暗褐色 10YR3/3	泥質シルト	玉砂上に「灰褐色」の泥質シルト、洞門、人為削壁十	
9	暗褐色 10YR3/4	粘土質シルト	玉砂上に「灰褐色」の泥質シルトを含む、人為削壁十一	
10	玉砂 10YR2/2	粘土	玉砂上に「灰褐色」の泥質シルトを含む、人為削壁十一	
11	暗褐色 10YR3/2	粘土質シルト	玉砂上に「灰褐色」の泥質シルトを含む	
12	次雲母色 10YR4/2	新セリーフ系色	泥質シルトを含む	
	灰褐色 10YR3/4	粘土質シルト		
	紫褐色 10YR3/2	粘土質シルト		
13	黑褐色 10YR3/2	粘土	難透水、異鉄鉄をアロッカに含む	
14	オリーブグリーン7.5Y3/1	沙質シルト	灰褐色、黑色粘土アロッカを含む	
III-B(SD1) 1.5	灰褐色 10YR4/3	泥質シルト	泥質シルトを含む	
16	灰褐色 10YR5/3	粘土質シルト	マンガン斑点を含む、下部は粘土	
17	灰褐色 10YR5/3	泥、粘土、粘土	泥、	
18	暗褐色 10YR3/1	粘土	難透水	
	灰褐色 10YR2/3	細砂		
	紫褐色 10YR2/1	粘土		
19	白色 10YR2/1	粘土	難透水	
	灰褐色 10YR4/3	粘土		
20	深灰色 10YR4/1	粘土	難透水	
21	灰褐色 10YR5/2	シルト		
22	灰褐色 10YR5/3	粘土	灰褐色火山灰を3-4cmの厚さで下部に含む	
23	褐褐色 10YR4/1	粘土	玉砂	
	灰褐色 10YR5/2	粘土		
	灰褐色 10YR4/3	細砂		
24	褐褐色 10YR3/4	細砂	付3-10cmの円錐	
25	紫褐色 10YR3/1	粘土	浮遊物、山砂、滑石層などを含む	
26	紫褐色 10YR3/1	粘土		



第16図 SD1全体図 (1/500)

cm、下端幅20~70cm、深さ30cmである。底面はほぼ平坦だが、西半が高くなり、深さもやや浅くなる。堆積土は1層で、断面形は開いた舟底形である。出土遺物は、縄文土器片、磁器片（染付粗細片）が出土している。

#### S E 1

II B区北西隅、SD1の北壁で検出され、SD1に切られている。径は2.2m、深さは2.4mで礫層を掘り込んでいる。堆積土は崩落によりないが、砂層主体であった。底面で径約20cmの樹木片が出土したほか遺物はない。

#### S X 1

II区西南隅で検出された。SD1に切られる。平面形は不整規円形ともいべきもので、長軸4.8m、短軸1.25mである。底面が確認されたのは、北端のみで、深さ1.7m、中央から南は深さ2.4mまで確認したが、底面は不明である。中央部、南端部の壁がそれぞれ円形になることなどから、円形の深い造構、井戸が3基切り合ったものである可能性が考えられる。堆積土は5層に分けられるが、いずれもしまりがない。また上位の層はブロック混じりで人為堆積土と考えられる。出土遺物はない。

#### S X 2

SD2B中央の南側でSD2Bに切られる。平面形は不整形で、規模は長軸3.15m、短軸2.07mである。底面は東側が平坦で、西側が凸である。堆積土は4層に分けられ、最下層4層はややグライ化した層で底面直上に酸化鉄の集積がみられる。出土遺物は縄文土器片が出土している。

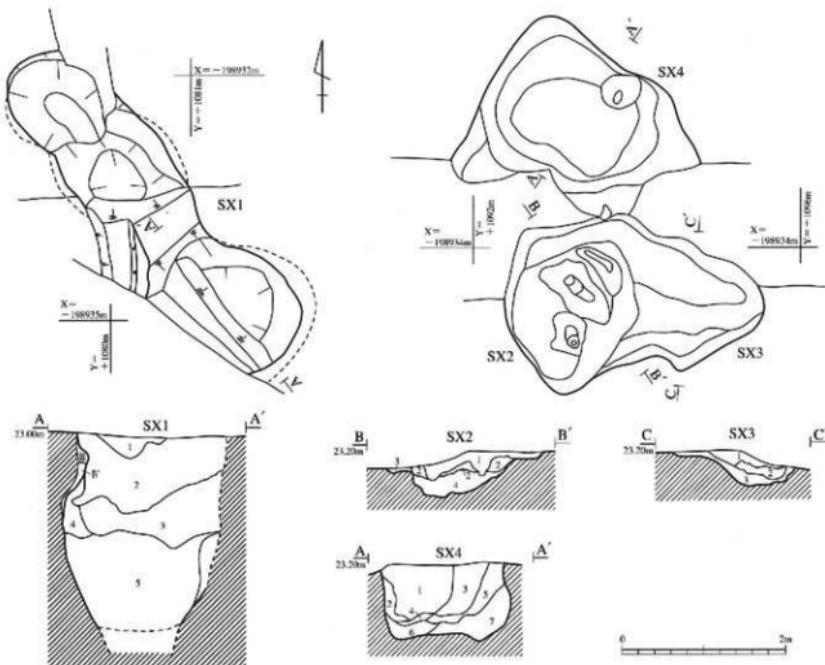
#### S X 4

SD2を挟んでS X 2の北側にあり、SD2Bに切られる。平面形は方形と推定される。規模は上端が長軸2.7m、短軸2.3m、底面長軸1.4m、短軸1m、深さ92cmである。堆積土は7層に分けられる。底面直上の6層はややグライ化

した層で下部に酸化鉄の集積がみられる。出土遺物としては、縄文土器片が出上している。

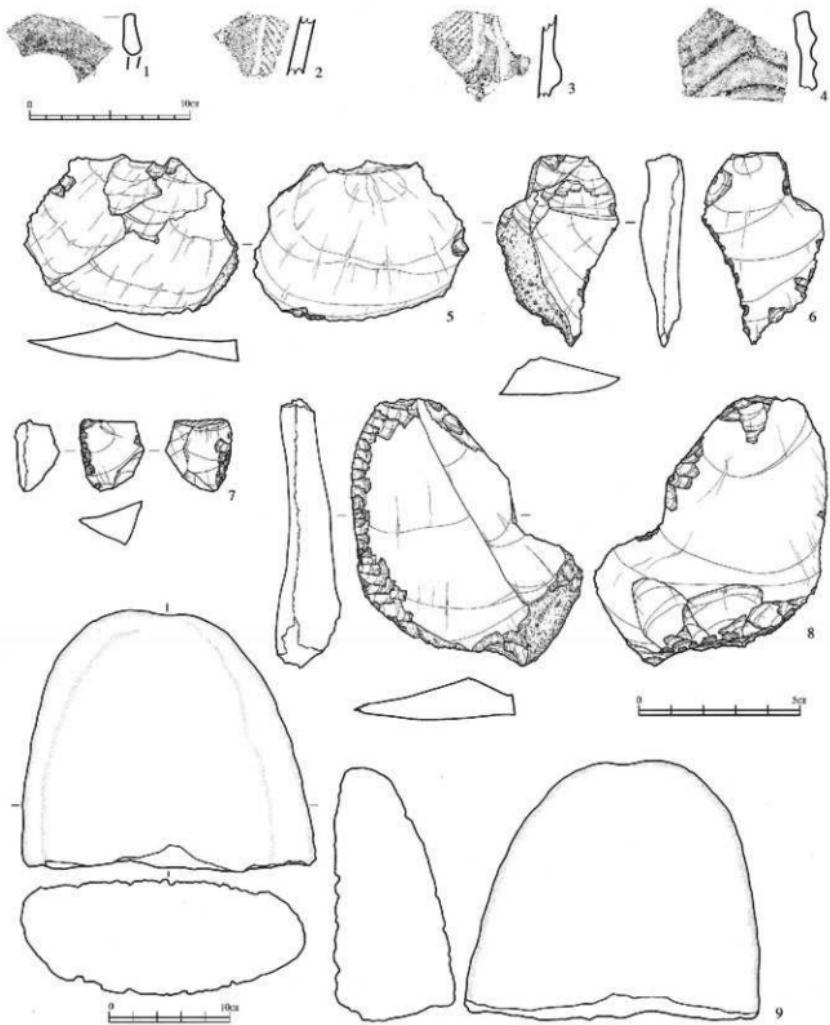
### S R1

S D1の下位で検出されている。II A区で南岸の立ち上がりを検出しているのみで全体の状況は不明であるが、上塗幅約10m以上、深さ約2.5mで底面は砂礫層である。堆積土は砂、シルト、粘土などの互層となる。なかに基本層V層の流入土や灰白色火山灰が観察され、基本層VI層形成以降しばらく開口していたと考えられる。



剖面	土色	土性	層
SX1-1	黒褐色10YR8/2	砂土	暗褐色、粘土質シルトのブロックを含む、板状化物を少収含む。しまりなし
SX1-2	浅い黄褐色10YR4/5	砂土質シルト	下部に暗緑色シルト、基本層底、板状化物を含む。しまりなし
SX1-3	黒褐色10YR8/1	砂土	2層を大ブロックに含む。しまりなし
SX1-4	黒褐色10YR8/2	砂質シルト	基本層底層の崩壊土。しまりなし
SX1-5	黒褐色10YR8/2	砂土質シルト	しまりなし
SX2-1	浅い黄褐色10YR4/5	砂土質シルト	砂土質シルト
SX2-2	黒褐色10YR8/2	砂土	植物塊あり、炭化魚少量
SX2-3	黒褐色10YR8/2	砂土質シルト	暗褐色シルトブロック含む
SX2-4	黒褐色10YR8/2	砂質シルト	下部に酸化鉄地帯
SX3-1	褐色	10YR6/4	砂土質シルト
SX3-2	浅い黄褐色10YR4/3	シルト	腐物少、板状化物
SX3-3	褐色	10YR6/2	腐物少、板状化物
SX4-1	褐色	10YR6/4	砂土質シルト マンガニ鉄、酸化鉄斑を含む
SX4-2	褐色	10YR6/3	シルト
SX4-3	褐色	10YR6/3	褐色土のブロックを含む
SX4-4	浅い黄褐色10YR4/3	シルト	
SX4-5	褐色	10YR6/3	暗褐色土、炭化魚骨を若干含む
SX4-6	浅い黄褐色10YR4/3	砂土	酸化鉄斑結晶あり
SX4-7	褐色	10YR6/4	砂土質シルト 下部、褐色土ブロックを含む

第17図 SX1~4平面・断面図



番号	種類	型・形	特徴	写真場所	坐標番号	番号	種類	特徴	写真場所	坐標番号	
1	縫合十層	SDI	口縫突出 内孔	-17	A-5	3	縫合十層	SDI+5端	施式切文 RI 異文	-25	A-27
2	縫合十層	SDI+5端	正規文 斧形縫文	-24	A-26	4	縫合十層	I端	施式文	-26	A-5
5	複数	複数・溶洞									
6	二次加工ある剥片	SDI		沈底岩	38.2	67.40	49.10	12.30	18-3	K-3	
7	二次加工ある剥片	SDI		柱状岩	18.8	60.45	38.70	11.35	18-4	K-4	
8	不定形石器	SDI	右側面突出 稽留次 受熱	柱状岩	4.7	24.80	22.85	11.20	18-5	K-5	
9	不定形石器	SDI	基部上面 サイドスクレーパー	柱状岩	76.2	93.50	67.50	18.30	18-6	K-9	
	石器	SDI	約10欠損 月11状	溶洞	6230.0	220.0	216.0	98.0	18-6	K-39	

第18図 II区出土遺物

### 第3節 III区

25Tで豊穴遺構の一部を検出し、住居跡の可能性が考えられたため、その遺構を中心に拡張し、南北25m、東西13mの台形の調査区を設定した。検出された遺構は、住居跡1軒、溝跡2条、土坑7基である。

#### 1 基本層序

基本層序は大別で10層、細別で14層確認された。おおまかにみると、I層が耕作土、II、III層が黒褐色～暗褐色砂質シルト層、IV～IX層が黄褐色系統の砂質シルト～細砂層で、X層が礫層となる。礫層の標高は20.3mである。I層：a～e層に細分される。Ia層は現畑耕作土、Ib層は旧畑耕作土、Ic～d層は旧耕作土の下部で基本層がブロック状に含まれる層で北半にのみ分布する。Ie層は細砂層である。

II層：黒褐色砂質シルト。本来は全体に分布していたと推定されるが耕作により攪拌され、断面においても部分的に確認されるのみである。住居跡内には堆積土1層として厚く堆積している。

III層：暗褐色砂質シルト。IV層への漸移層である。層厚10～20cm。ほぼ全域に分布する。

IV層：純い黄褐色砂質シルト。遺構検出面である。

V層：黄褐色細砂。層厚15～30cmで、ほぼ全域に分布する。

VI層：褐色粘土質シルト。層厚5～15cmで、ほぼ全域に分布する。他に比べしまりがある。

VII層：褐色砂質シルト。層厚15～20cmで、ほぼ全域に分布する。

VIII層：黄褐色粘土質シルト。層厚30～50cmである。他に比べしまりがあり、下部がやや砂質化する。

IX層：純い黄褐色細砂。層厚10～20cmである。

X層：礫層。疊間は粗砂。径10～30cmの円礫。

#### 2 遺構

##### S 1 1

【位置・確認面】 調査区中央東寄りのIV層上面で検出した。

【重複】 SD3、SK7と北辺で重複し、それより古い。

【平面形・規模】 北辺がSD3などと切り合い、全貌は不明だが、東西5.2m、南北5m以上の方形で、南北軸の方向はE 30° Sである。

【堆積土】 10層に分けられる。1～5層は住居内堆積土、6・7層はカマド内堆積土、8～10層はカマド掘り方堆積土である。1層は黒褐色シルトで基本層II層に対応する。この層は住居のプラン外まで大きく分布しており、住居廃絶後、周囲の土層が自然流入しながらや大きな凹地状になっていたと考えられる。4層には灰白色火山灰がブロック状に含まれる。1～5層は自然堆積層である。6・7層は自然流入の他カマド崩落土も含まれる。

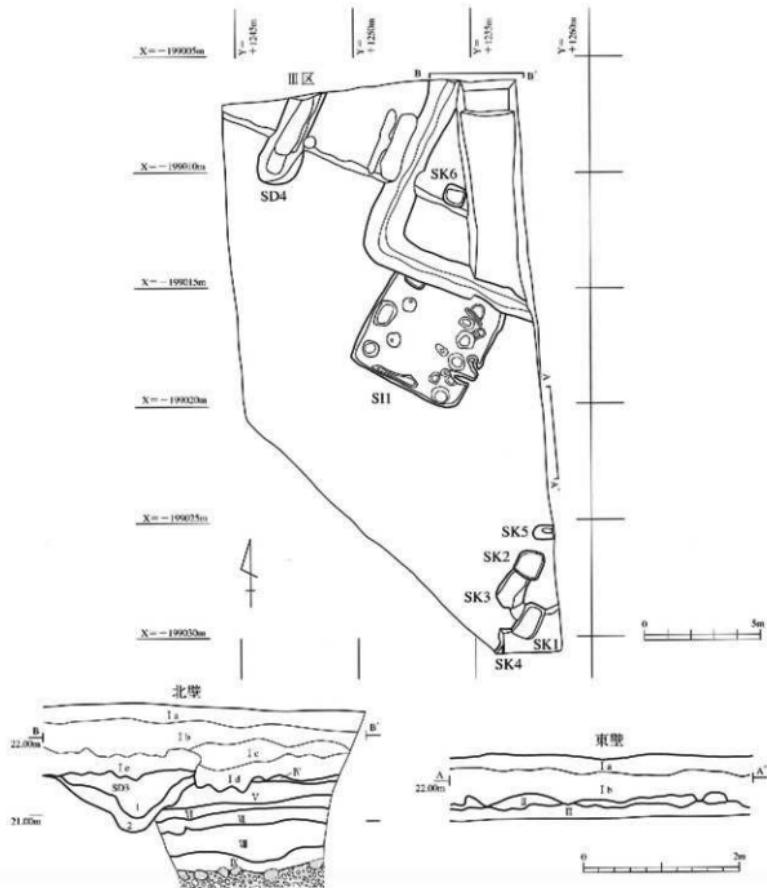
【床面】 基本層V層を床面とする。ほぼ平坦である。特に堅くしまった部分はない。

【壁】 基本層IV・V層を壁とし、急角度で立ち上がる。南辺、西辺の残存が良好で25～30cmほどの高さである。

【柱穴】 床面でビットを14個検出した。径は20～70cm、深さは7～66cmと様々である。そのうちP3が65×38cm深さ36cm、P5・6が径約65cm深さ60～66cm、P13が径50cm深さ53cmでほかよりも深く、その位置関係からも主柱穴と考えられる。P5には柱痕跡がみられる。

【周溝】 南辺に一部検出され、長さ2.1m、幅20～40cm、深さ20cm前後である。

【カマド】 東辺中央やや南よりにある。両袖が25～30cmの高さで残存する。煙道部はない。規模は幅1.35m、奥行き1.1mで、焼け面は45×50cmである。袖の構築土は砂質シルト及び砂で基本層IV・V層に類似する。左袖には礫2



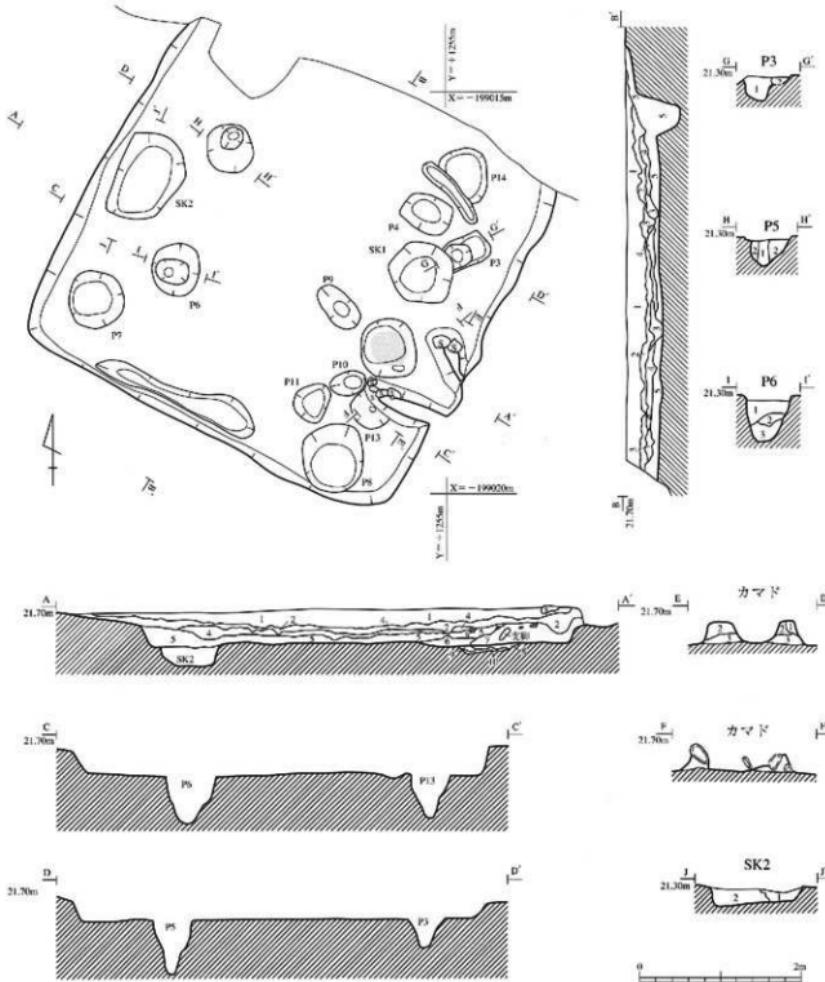
III区地質基本層序

層位	土色	土性	目 次
Ia	暗褐色10YR5/5	砂質シルト	粗粒作土
Ib	暗褐色10YR5/5	砂質シルト	粗粒作土
II	黒褐色10YR2/2	砂質シルト	
III	暗褐色10YR3/4	砂質シルト	巨粒ブロックを含む

III区北壁基本層序

層位	土色	土性	目 次
Ic	暗褐色10YR5/3	砂質シルト	粗粒作土、下部・北半にのみ分厚
Id	褐色10YR6/4	砂質シルト	粗粒作土、下部・北半にのみ分厚
Ie	褐色10YR6/4	砂質	粗砂のブロックを含む
K	[2.5-3.5] 黄褐色10YR5/4	砂質シルト	
V	高須色10YR5/6	粗砂	
M	褐色10YR4/6	粗粒シルト	しまりあり、南化帯部分特に多い
N	褐色10YR4/6	砂質シルト	
Q	黄褐色10YR5/6	粘土質シルト	しまりあり、下部や砂質化
R	[2.5-3.5] 黄褐色10YR5/4	砂質	
X	褐色10YR4/4	砂質	粗粒は粗砂径、10-30mmの円塊

第19図 III区構造配置図・基本層序



層位	土 色	土 物	備 考
1	黒褐色10YR2/3	シルト	基本層Ⅲ易。薄い黒褐色のブロックを含む
2	褐色 10YR4/4	シルト	1層層のブロックを含む
3	黄褐色10YR5/6	粘土質シルト	こまちやや盛り
4	封土 黄褐色10YR5/4	砂質シルト	灰白色火成岩のブロックを含む
5	褐色 10YR4/4	砂質シルト	
6	暗褐色10YR4/4	砂質シルト	礁土、貝殻+ブロックを含む
7	褐色 7.5YR4/4	シルト	礁土の小ブロックを含む。カマド焼成土
8	褐色 7.5YR4/5	砂質シルト	礁土ブロックを含む。カマド焼成土
9	黒褐色7.5YR3/2	砂質シルト	礁土層、底地物を含む。カマド焼成土
10	褐褐色10YR3/4	砂質シルト	6号をブロックに含む。カマド焼成土

第20図 III区SI1平面・断面図



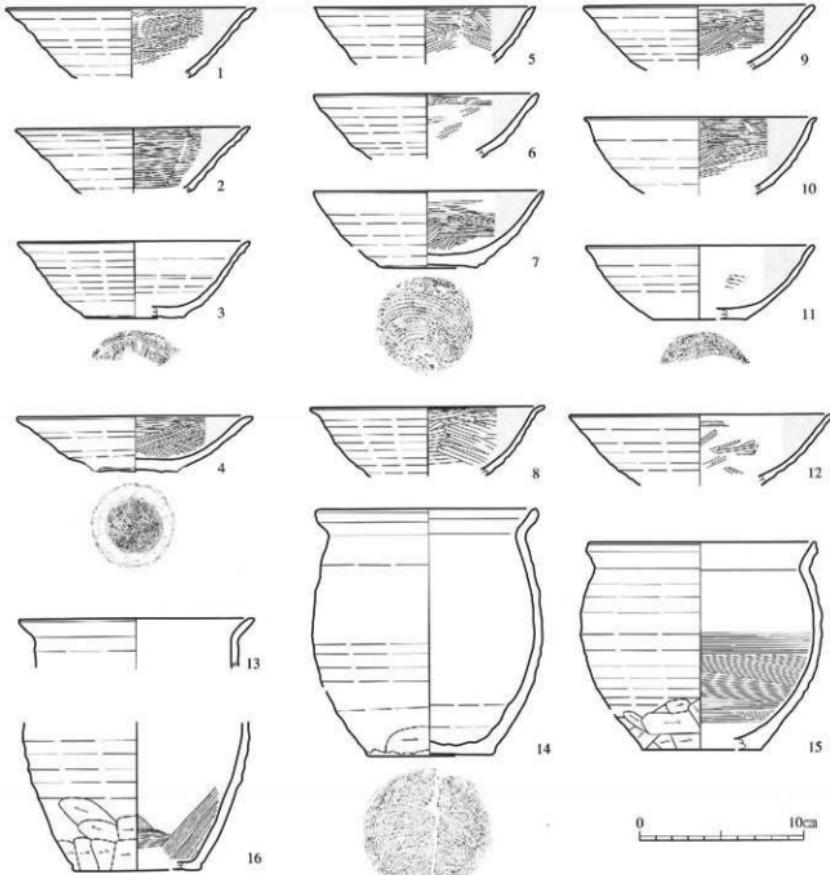
SI1カマド

層位	土	火	上	性	備考
1	褐色10YR4/5	砂質シルト	褐褐色+ブロックを含む、カマド壁上		
2	褐色10YR4/5	砂質シルト	褐褐色の薄い層を含む		
3	褐色10YR4/5	砂灰土			

SI1土塗・漆器一覧

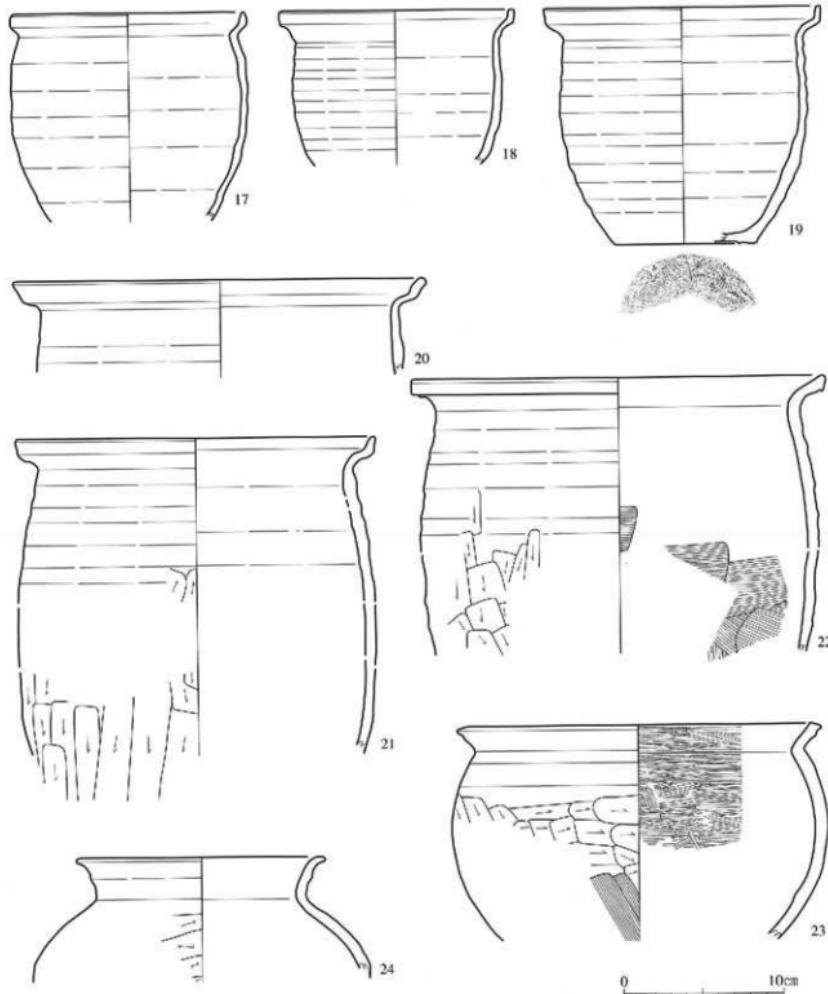
遺構	層	深さ(cm)	層位	色	性	備考
SK1	85×75	19	1	褐褐色10YR3/4	砂質シルト	成土、炭化物を若干含む
2	125×90	22	1	褐褐色10YR3/4	砂質シルト	
			2	褐褐色10YR3/4	砂質シルト	黒褐色ブロックを含む
2-1/3	65×40	36	1	褐褐色10YR4/4	砂質シルト	褐褐色ブロックを含む炭化物を若干含む
			2	褐褐色10YR3/4	砂質シルト	
4	80×17	17	1	褐褐色10YR4/4	砂質シルト	褐褐色のブロックを含む
5	80×55	66	1	褐褐色10YR3/4	砂質シルト	柱痕跡
			2	褐褐色10YR4/4	砂土質シルト	緑褐色のブロックを含む
6	85×60	59	1	褐褐色10YR4/4	砂質シルト	
			2	褐褐色10YR3/4	砂質シルト	
			3	褐褐色10YR3/4	粘土質シルト	
7	1273	25	1	褐褐色10YR3/4	砂質シルト	炭化物若干含む
8	85×74	30	1	褐褐色10YR3/4	砂質シルト	砂灰褐色ブロック、炭化物、成土を含む
9	64×35	25	1	褐褐色10YR3/4	砂質シルト	地土色、炭化物を含む
10	45×30	7	1	褐褐色10YR3/4	砂質シルト	地土色炭化物を含む、遺物多量
11	50×40	14	1	褐褐色10YR3/4	砂質シルト	地土色、炭化物を含む、頭骨のブロックを含む
12	55×50	53				注記なし
14	68×58	15	1	褐褐色10YR3/4	砂質シルト	

第21図 SI1遺物出土状況図



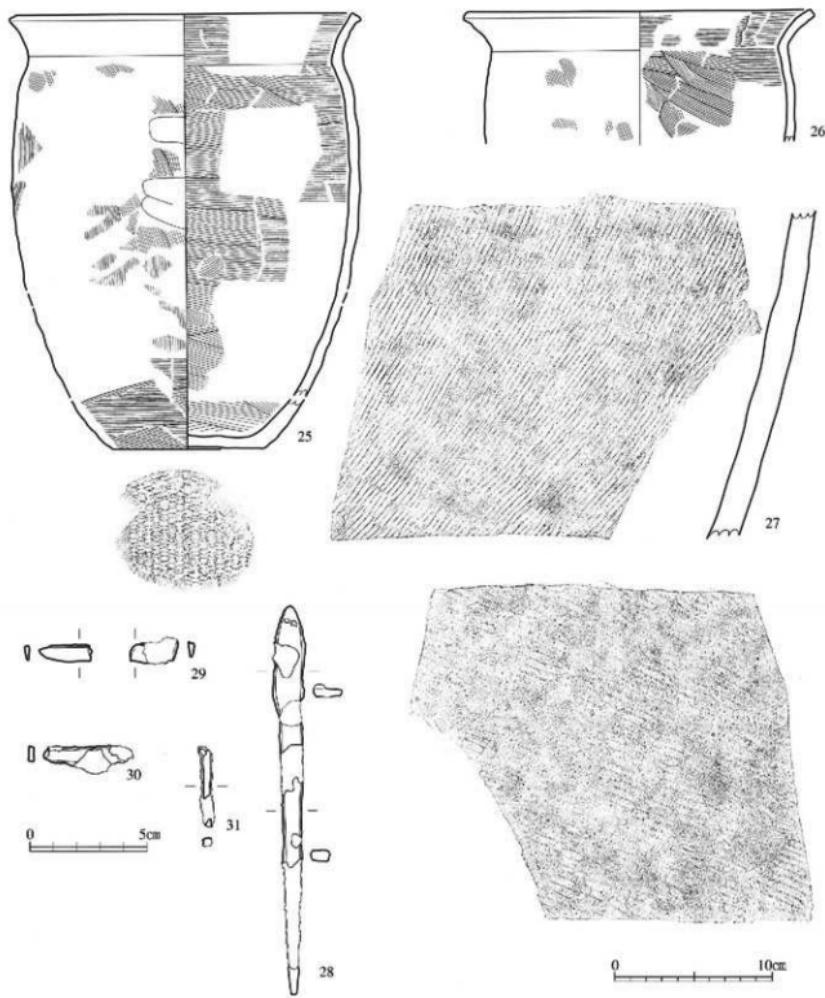
番号	種類	施釉・焼付	特徴	残存	D径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	等級	備考
1	三絆器	P13 塗装土	外:コクロナデ 内:ハラミガキ 黒色地滑	口~体16	15.4			15-1	D7
2	三絆器	カマツレ	外:コクロナデ 内:ハラミガキ 黒色地滑	口~体16	14.4			15-2	D9
3	三絆器	灰釉	外:コクロナデ 底:四輪足跡 内:ロクロナデ	口~底13	14.2	6.0	4.8	15-3	D8
4	土師器	塗装土	外:コクロナデ 底:四輪足跡 内:ハラミガキ 黑色地滑	口~底16	14.5			15-4	D3
5	土師器	漆釉土	外:コクロナデ 底:四輪足跡 内:ハラミガキ 黑色地滑	口~体15	13.4			15-5	D10
6	土師器	4切	外:コクロナデ 底:ハラミガキ 黑色地滑	口~底15	13.8			15-6	D11
7	土師器	P13 塗装土	外:コクロナデ 成:割れ痕あり 内:ハラミガキ 黑色地滑	口~底18	14.0	6.0	4.8	15-7	D6
8	土師器	SG	外:コクロナデ 底:ハラミガキ 黑色地滑	口~底18	14.4			15-8	D16
9	土師器	24	外:コクロナデ 底:ハラミガキ 黑色地滑	口~底18	14.2			15-9	D15
10	土師器	SK 1面	外:コクロナデ 底:ハラミガキ 黑色地滑	口~底17	14.2			15-10	D13
11	土師器	4切	外:コクロナデ 底:ハラミガキ(剥落) 黑色地滑	口~底17	14.0	5.6	4.6	15-11	D14
12	土師器	P13 塗装土	外:コクロナデ 内:ハラミガキ(剥落) 黑色地滑	口~底16	16.2			15-12	D12
13	土師器	塗装土	外:コクロナデ	口~底18	14.4			15-13	D24
14	土師器	漆釉土	外:コクロナデ 底:四輪足跡 内:四輪足跡	口~底17	13.6	8.0	5.3	15-14	D17
15	土師器	カマツレ	外:ロクロナデ 下部:ハラミガキ 底:ハラミガキ 内:四輪足跡	口~底18	13.8	7.5	12.9	15-15	D19
16	土師器	5選	外:ロクロナデ 下部:ハラミガキ 底:着色無し不規・手跡ちハラミガキ 内:ロクロナデ 下部:ハラミガキ	体~底			7.8	15-16	D30

第22図 SI1出土遺物(1)



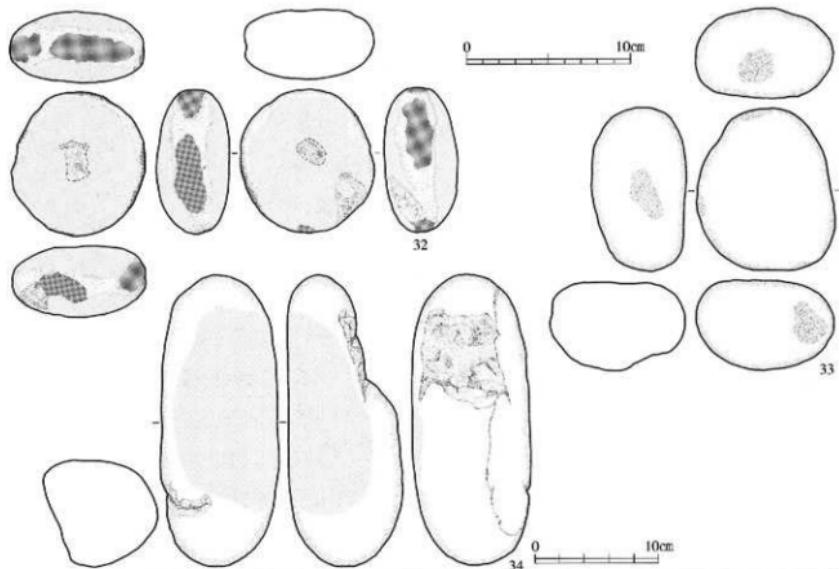
番号	地 点	直 径	特 訴	残 存	二 次 (cm)	底径 (cm)	高 度 (cm)	写 真 (X版)	登録番号
17	土師器	直筒土	周末ロクシナゲ	口～体1/2	14.6			16-1	D31
18	土師器	木片	底面リカヌドア	口～体1/2	14.8			16-2	D32
19	土師器	厚筒土	底面リカヌドア 瓶：同様赤泥リ	口～体1/2	17.4	9.0	15.0	16-3	D33
20	土師器	直筒土	底面リカヌドア	口～体1/5	23.0			16-4	D34
21	P1-2マメ内	外：コクロナゲテ・内：ハラケヌリ 内：コクロナゲ		口～体1/4	22.6			16-5	D35
22	土師器	カマド内	外：コクロナゲテ・内：ハラケヌリ 内：コクロナゲ・下部ヘラケテ	口～体1/4	26.0			16-6	D36
23	土師器	厚筒土	外：コクロナゲ・ヘタキヌリ・下部ハラケテ 有：ヘタキヌリ	口～体1/3	27.6			16-7	D37
24	陶器各處	砂岩	外：コクロナゲ・体：ハラケヌリ 有：コクロナ	口縁部1/4	15.6			17-2	E8

第23図 SI1遺物(2)



番号	種類	遺物・施設	特徴	残存	口径(cm)	支柱(cm)	脚踏(cm)	可燃性	非可燃性	
25	土器	4号	外：ヘタナギアマ内：ヘタナギ底：ミクロ透近底	口～底	15	21.6	9.6	27.7	C-29	
26	土器	漆器	外：ヘタナギアマ内：ヘタナギ	口～底	15	21.8	-	16-7	C-31	
27	土器	漆器	外：平行クダ目内：あめ目	口～底	15	21.8	-	17-3b	P-9	
番号	種類	遺物・施設	特徴	残存	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	可燃性	
28	鉄製品	鉈頭	尖錐式	刃長4.3、刃幅1.2、刃厚0.3	口付近形	16.5	0.8	0.4	22.3	N-1
29	鉄製品	刀子	尖錐式		足底残	4.2	0.7	0.35	1.8	N-3
30	鉄製品	刀子	尖錐式		差爪残	3.8	0.7	0.3	3.0	N-4
31	鉄製品	刀子	尖錐式		先端欠	3.5	0.4	0.4	1.5	N-2

第24図 SI1出土遺物(3)



第25図 SII出土遺物(4)

個、右袖内には縫4個が埋め込まれている。そのうち左右の1点は同一個体を半剖したものである。また、右袖前方には長さ90cm、幅40cmほどの焼けた大きなギョウカイ岩が出土しており、カマドの天井石と考えられる。また、焼け面の下部に80×75cmの掘り込みがある。さらにカマド内やや右寄りに長さ20cmのやけた縫が竪位で検出され支脚と考えられる。

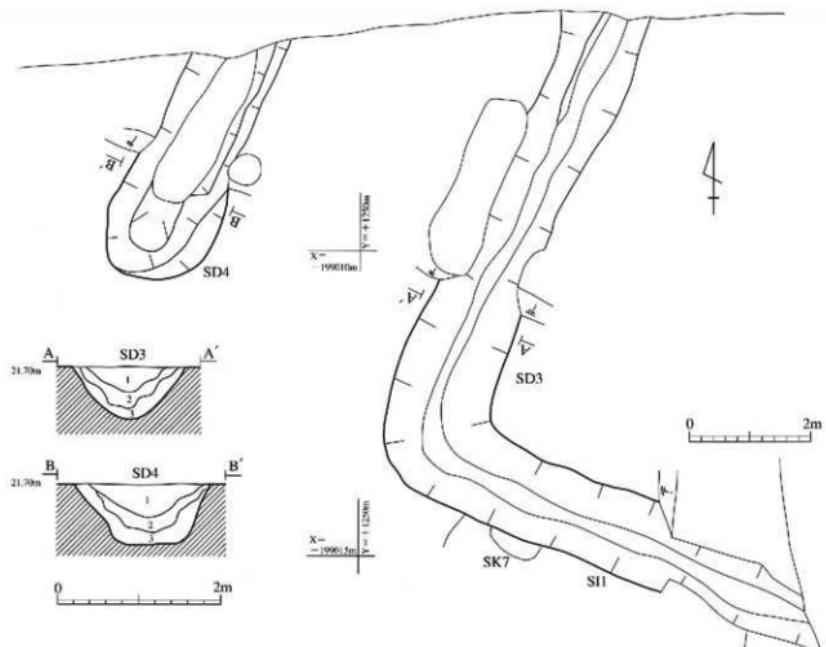
【その他】カマド北側の第1土坑、西辺壁際の第2土坑、西南隅のP7、カマド南のP8はその規模などから貯蔵穴の可能性がある。

【出土遺物】堆積土出土遺物 ロクロ土器器坏(6・8・9・11)・高台坏(4)・甕(13・14・19・20・25・26)、須恵器甕(24)、鉄製品(30)、陶石器(32~34)が出土している。11の底部は回転糸切り後無調整である。4は高台部分が剥落している。13・14・19は小形の甕である。19は口縁部が最大径になるもので、底部は回転糸切り後無調整である。25は外面にヘラナデ後、ナデが施されている。また底部にはムシロ状圧痕があり、棒状の工具を繰り返しごろりつけ十字状に線刻している。30は刀子の茎部分である。32は凹痕・磨痕・平坦面になるタタキ痕、33はタタキ痕、34は磨痕のある瓈石器である。カマド内および周辺出土遺物 カマド内およびその周辺の床直や堆積土最下層の5層から遺物がまとまって出土している(第21図)。ロクロ土器器坏(2)・甕(15・16・18・22・23)、赤焼土器坏(3)である。15・16・18は小形の甕で、15・16は体部下端にヘラケズリが施され、15は内面に回転ヘラナデが施されている。18は口縁部が最大径になる。22・23は大形の甕で、23は胴部が丸味をもち、外面にはヘラケズ

リ後ヘラナデ、内面にはヘラミガキが施されている。床直出土遺物 ロクロ土師器壺(17)、須恵器壺(27)、鉄製品(28・29・31)が出土している。17は小形の壺である。27は大形壺の大破片で、外側は平行タタキ、内面は平行タタキ状のあて目で凹凸が顕著である。28は細根式の鉄鏃ではば完形である。輪笠被はない。鏃など別の鉄製品の可能性もある。29は刀子の切っ先部分である。31は釘で先端が欠けている。ビット土坑出土遺物 SK1 ロクロ土師壺(10)が出土している。P7 ロクロ土師器壺(21)が出土している。P13 ロクロ土師器壺(1・7・12)が出土している。7の底部は回転糸切り後無調整である。P15 ロクロ土師器壺(5)が出土している。

### SD3

Ⅲ区北東に位置する。北東から南東へ屈曲する溝で、北側が耕作の搅乱、東端が確認トレントによりやや削平されている。溝の東半部がS I 1の北辺とSK7の大部分を切っている。検出長は約15mで、北端から8mの所で東へ直角に曲がり、方向は北側がN-25°-E、東側がE-23°-Sである。規模は上端幅60~90cm、下端幅20~40cm、深さ65cmで、底面はほぼ平坦である。堆積土は3層で、断面形は開いたU字形である。堆積土中より、陶器、中世陶器、土師器、須恵器の繊片が少量出土している。



層位	上	中	下	解
SD3-1	褐色	IYTR6/4	砂	
SD3-2	褐色	IYTR6/4	砂	上層に均一な褐色。基本層面へ傾きをもつブロック状に細量
SD3-3	にぶい褐色	IYRS6/4	砂	基本層面へ傾きをもつブロック状に多量
SD4-1	褐色	IYTR6/4	砂	明瞭な褐色とブロック状
SD4-2	にぶい褐色	IYTR6/5	砂	同じ地色で少量
SD4-3	にぶい褐色	IYRS6/4	砂	基本層面へ傾きをもつブロック状に多量

第26図 SD3・4平面・断面図

## SD4

III区北西部に位置する。SD3の北半と並行し、その間隔は約3.5mである。北半は耕作により上半が削平を受けている。検出長は4.6mで、方向はN-26°-Eである。規模は上端幅140~168cm、下端幅60~80cm、深さ75cmで、底面は平坦である。堆積土は3層で、断面形は舟底形である。堆積土中より土師器細片が数点出土している。

## SK1

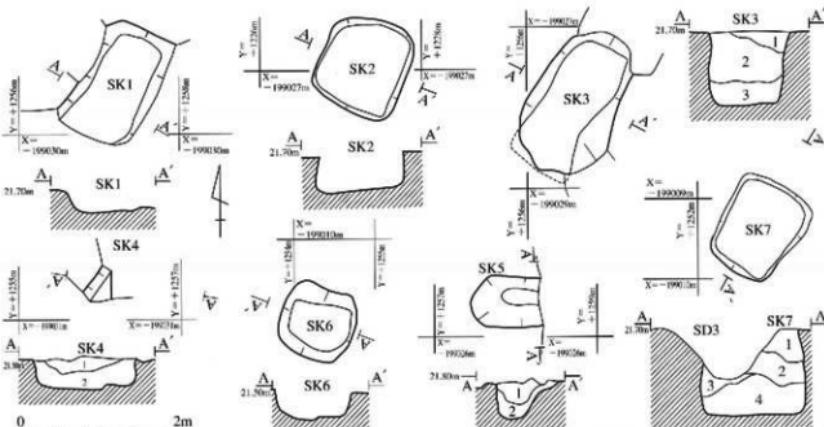
III区の南東端に位置し、IV層上面で検出された。擾乱により、東・南辺、西辺の一部が壊されている。規模は長軸150cm以上、短軸95cm以上で深さは30cmである。平面形は底面の状態から隅丸長方形と考えられる。方向はN-30°-Eである。堆積土については、土層注記はないが、調査時所見から人為堆積で、断面形は舟底形である。堆積土中から土師器片が1点出土している。

## SK2

III区の南東端に位置し、IV層上面で検出された。SK3より新しい。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸120cm、短軸105cmで、深さ45cm、方向はN-23°-Eである。堆積土は注記がないが、調査時所見から人為堆積である。断面形はややオーバーハング気味の長方形である。出土遺物はない。

## SK3

III区の南東端のIV層上面で検出された。SK2より古い。上面の平面形は不整規円形だが、底面は隅丸長方形を呈している。上面の規模は、長軸190cm、短軸115cm、底面は長軸173cm、短軸76cmで、深さ90cmである。方向はN-30°-Eである。堆積土は3層に分けられるが、いずれも多量のブロック状を呈し、かなりしまりのある人為堆積土である。断面形はほぼ方形で、壁は垂直に立ち上がり、南辺ではオーバーハングしている。堆積土中より陶器



構造物	上色	地	備考
SK3-1 黄褐色10YR5/5	赤	延3cm内のより明るい黄褐色砂質。シルトブロック多量	
SK3-2 淡黄褐色10YR5/4	赤	延10cm内の黄褐色砂質シルトブロック多量、底面黄色砂質シルトブロック少量	
SK3-3 黄褐色10YR5/6	赤	延10cm内のブロック状を呈する、底面黄色砂質シルトブロック少量	
SK4-1 淡黄褐色10YR5/5	赤	延2cm内の黄褐色砂質上にブロック多量	
SK4-2 淡黄褐色10YR5/5	赤	延3cm内の黄褐色砂質上にブロック多量	
SK5-1 淡黄褐色10YR4/5	赤		
SK5-2 淡黄褐色10YR4/5	赤	黄褐色(油性)シルトブロック多量	
SK7-1 茶色 10YR4/4	赤		
SK7-2 茶褐色10YR4/4	赤	延2cm内の底面茶褐色(油性)シルトブロック少量	
SK7-3 茶色10YR4/4	赤	延5cm内の底面茶褐色(油性)シルトブロック少量	
SK7-4 黄褐色10YR5/6	赤	延10cm内のブロックにより造成される、底面(油性)シルトブロックを一層に少量含む	

第27図 SK1~7平面図・断面図

片、土師器片が出土している。

#### S K 4

III区の南東端の壁際に西邊の一部を検出したのみである。東側は、耕作により堆されている。検出面はIV層であるが、調査区南壁の断面で立ち上がりが、耕作上・下部の途中まで確認され、掘り込み面はより上位と考えられる。規模は断面より、120cm以上、深さ40cmで、西邊より方向はN-37°-Eである。堆積土は2層に分けられ、黄褐色のブロックを含み、人為堆積土であるが、SK3のような多量のブロック状を呈した、しまりのあるものとは異なる。出土遺物はない。

#### S K 5

III区の南東部の東壁際のIV層上面で検出した。東側は調査区外で全体は不明である。平面形は梢円形で、規模は長軸85cm以上、短軸20cmで深さは45cmである。方向はほぼ東西方向である。堆積土は2層で、1層はSD3・4の堆積土に類似している。出土遺物はない。

#### S K 6

調査区北東部のV層で検出したが、周辺は耕作深度が深いため、本来の検出面は、他と同様にIV層と考えられる。平面形は梢円形で、規模は長軸92m、短軸87m、深さ38cmで、方向はN-67°-Wである。堆積土の注記はないが、調査所見から人為堆積である。断面形は舟底形である。出土遺物はない。

#### S K 7

調査区のはば中央、IV層で検出された。SI1より新しく、SD3より古い。平面形は梢円長方形で、規模は長軸124m、短軸100m、深さ105cmである。方向はN-30°-Eである。堆積土は4層に分けられ、ブロックを含む層、ブロックで構成される層からなり、人為堆積で、下部は完全な地山土の堆積土である。断面形はほぼ方形で、壁は直立ないし、オーバーハング気味である。出土遺物はない。

## 第4節 IV・V区

15・16Tで建物跡の存在が予想されたため、15Tの北半を拡張し、南北12m、東西9mの調査区を設定しIV区とした。また16Tの南半を拡張し、南北16m、東西16mの調査区を設定しV区とした。検出した遺構は、柱立柱建物跡(SB)3棟、土坑(SK)2基、小溝状遺構群、ピットが検出された。

### 1 基本層序

IV・V区および14~19Tは、基本的に同一の層序である。基本層序は大別して5層に分けられる。I層は現耕作土や盛土、旧耕作土である。盛土は地権者によれば、S51年宮城県教育委員会発掘時に生じた残土を利用したもので、旧耕作土はそれ以前のものである。

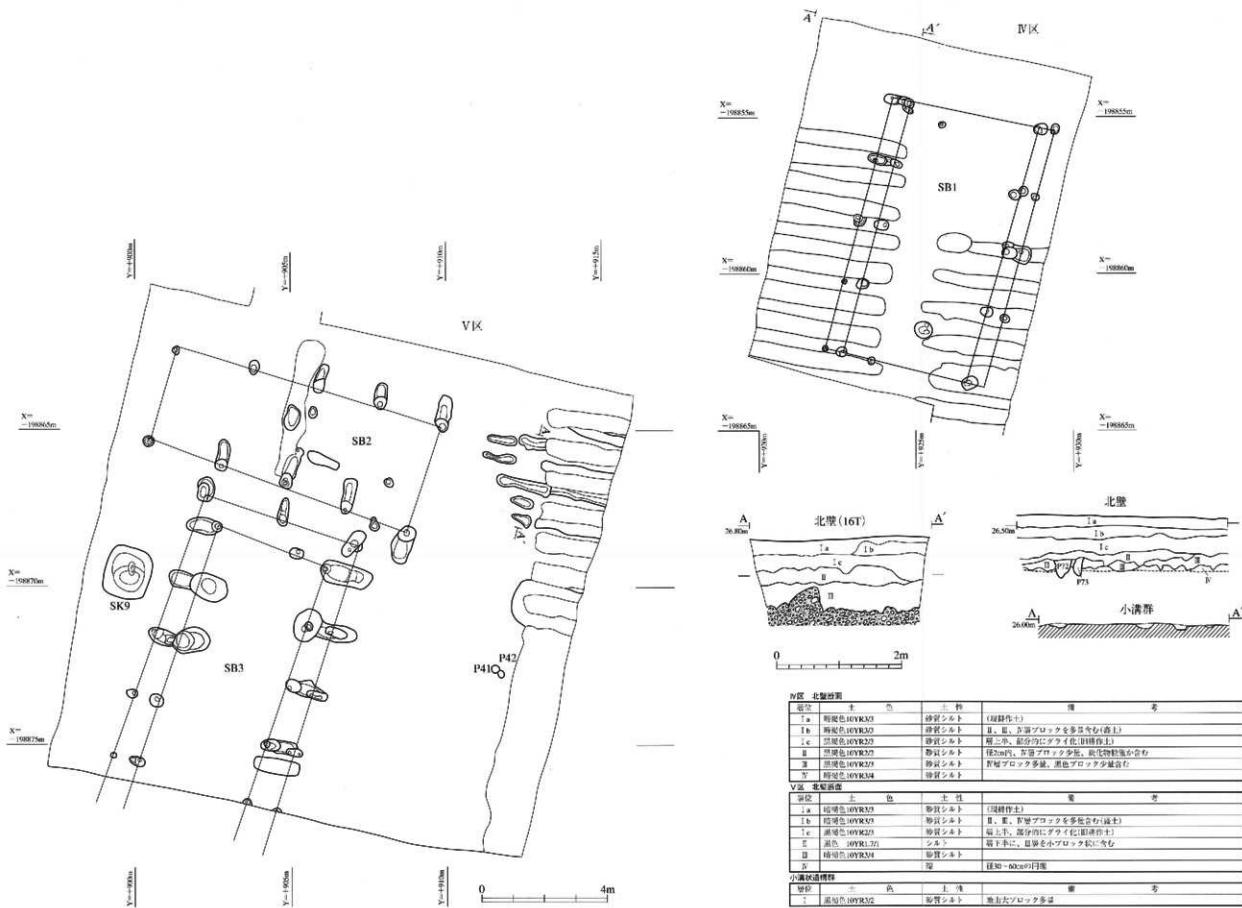
I層：a～c層に細分される。I a層は現耕作土、I b層はS51年度に発掘調査が行われた際の排土を盛土したもの（地権者による）、I c層はそれ以前の旧耕作土である。

II層：黒褐色砂質シルトである。14Tから17Tまで広く分布し、上面の標高は26~26.2mである。層厚は10~40cmで、17Tの北部に厚く堆積し、V区、17Tの西側が黒味を増している。遺物は出土していない。

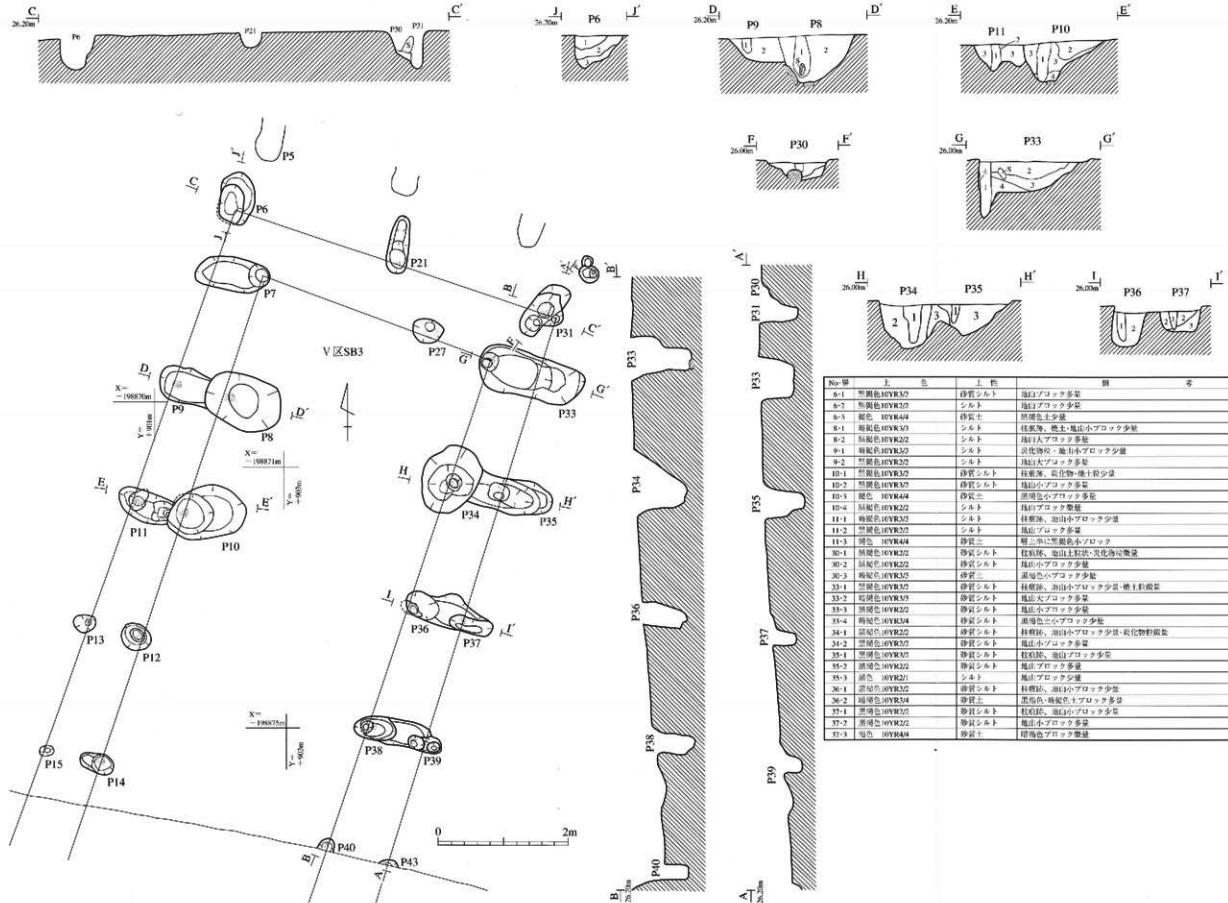
III層：黒褐色砂質シルト層である。IV層への漸移層である。層厚は10~20cmである。

IV層：暗褐色砂質シルト層である。遺構の検出面で、標高は25.8~25.5mで南へ緩く傾斜している。疊層の直上層で層厚は40~50cmである。

V層：疊層。V区の北壁では標高25.4mである。



第28図 IV・V区構造配置図・基本層序



第29図 SB3平面・断面図

S51年調査の層序との対応であるが、前回確認された弥生時代の包含層は確認されず、対応可能であったのは、今回のⅡ層が前回の4層、Ⅲ層が5層、Ⅳ層が6層に相当するという関係である。

前回の調査で包含層の供給集落が周囲の微高地に求められた。今回の調査地点は標高mで、包含層よりも高い地点であるが弥生時代の遺構は検出されていない。集落等については今後の課題となろう。

## 2 遺構

### S B1

母屋は桁行4間、梁行1間で、東西に廟が付く南北棟である。方向はN-15°-Eでやや東に振れている。建物総長は桁行8.44m、梁行5.25mである。柱間寸法は母屋が桁行195~235cm、梁行405~425cm、廟が178~225cmで、母屋と廟の間は約60cmである。柱穴は母屋と廟が同じ掘り方となるものとならないものとがあるが、後者は検出レベルが低いことなどから、本来は前者の掘り方と考えられる。掘り方の規模は、長軸95~110cm、短軸30~50cmの長楕円形、隅丸方形で、さらに母屋の柱穴として45×30cmほど、深さ40~60cm（平均46cm）の楕円形の柱穴、廟部分は35×25cmほど、深さ5~35cm（平均18cm）の柱穴となる。柱痕跡は、母屋が10~16cm（平均13cm）、廟が7~12cm（平均10cm）となり、廟の掘り方、柱痕跡ともに小規模である。

### S B2

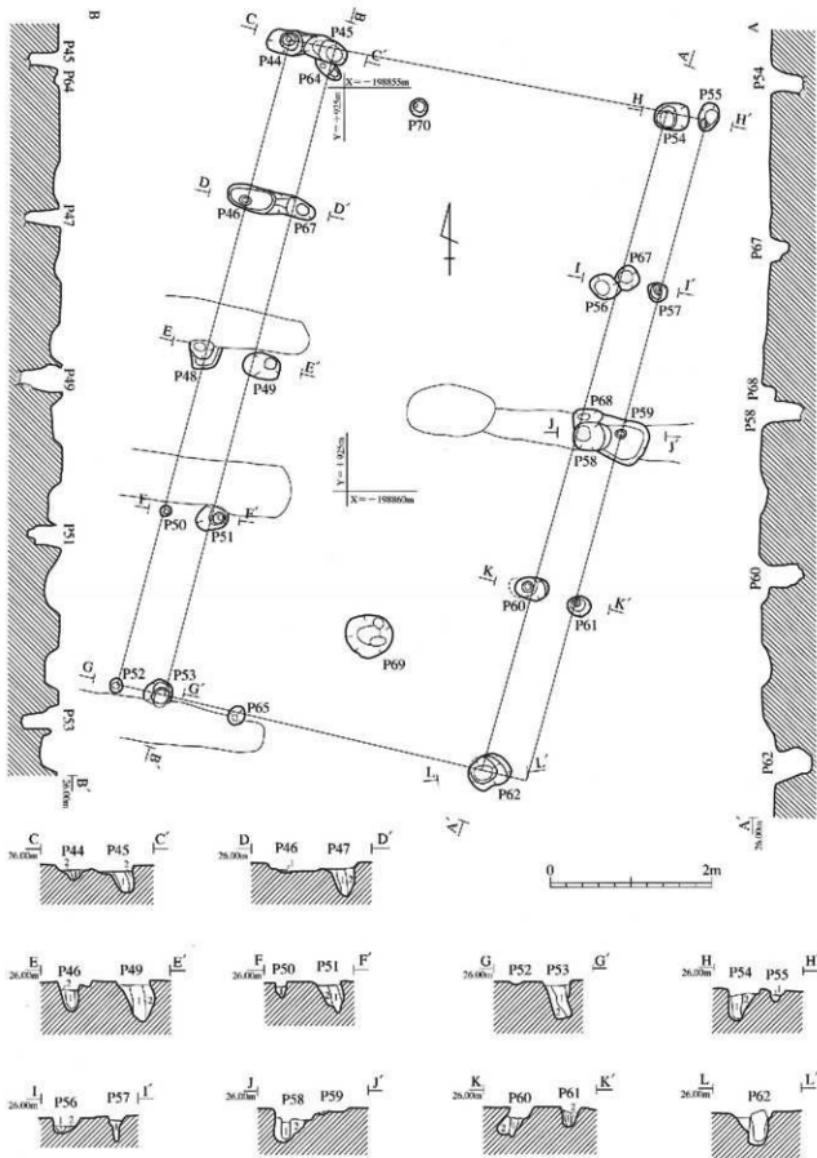
桁行4間、梁行1間の東西棟である。方向はE-20°-Sでやや南に振れている。中央に南北3間の間仕切り、東西2間の間仕切りがある。建物総長は桁行8.83m、梁行3.5mで、柱間寸法は205~255cmである。柱穴は長軸が125~83cm、短軸が64~42cmの長楕円形と、40~25cmほどの円・楕円形とがある。前者は10~20cmの掘り方のどちらか一端をさらに柱穴部分として深さ50~75cmほどに掘り下げている。北側にはこの掘り方が外側に張り出す形で並ぶが、S B1のように廟になるかどうかは不明である。柱痕跡は7~18cmである。

### S B3

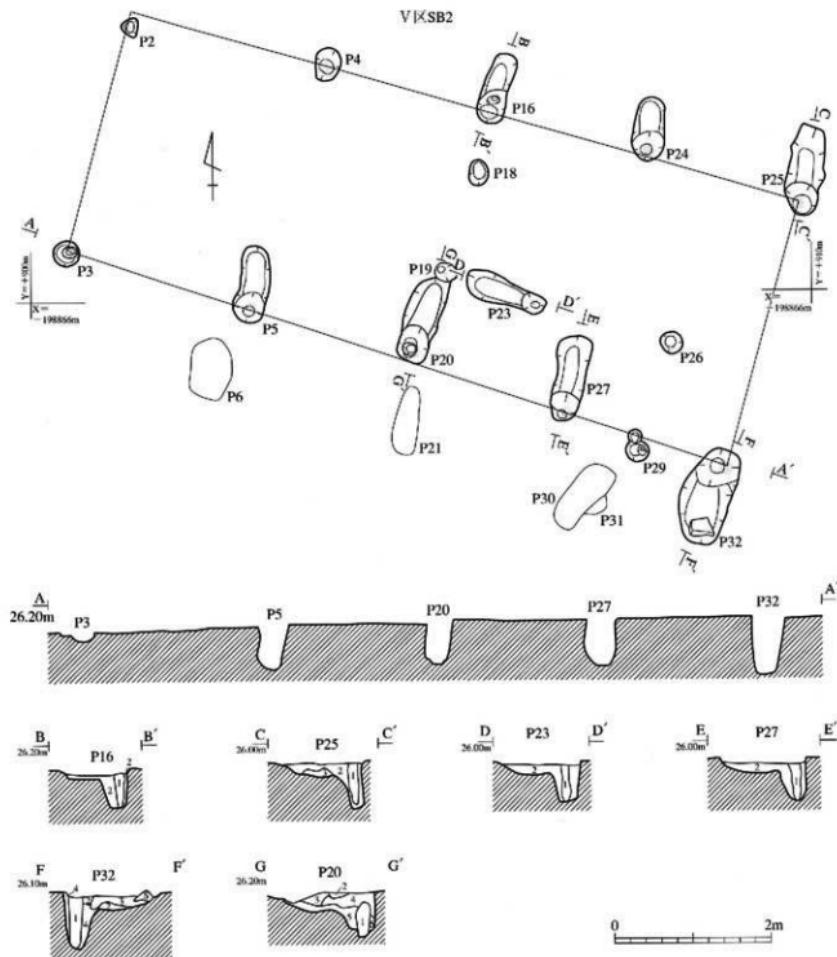
母屋が桁行4間以上、梁行2間で、東、北、西に廟が付く南北棟である。方向はN-19°-Eで東に振れている。建物総長は桁行8.77m、梁行5.15mで、柱間寸法は、母屋の桁行189~205cm、梁行が270~100cm、廟の桁行が190~207cm、梁行が255~265cm、母屋と廟の間が70~100cmである。柱痕跡は母屋が10~20cm（平均16.2cm）、廟が10~14cm（平均12.6cm）である。柱穴はP 8・10・34のように長軸120cm、短軸80cmとやや規模の大きい楕円形となるも

N区分別一覧

No-番	十 代	十 件	層 号	No-番	上 色	下 丸	案 号
44-1	近畿色10YR2/2	シルト	毛利原、塩山粘土層	58-1	朱褐色10YR2/2	シルト	粘土層、塩山小ブロック多量
2	半褐色10YR2/2	シルト	塩山小ブロック多量	2	墨褐色10YR2/2	シルト	塩山小ブロック少量
45-1	赤 10YR2/1	シルト	粘土層、塩山粘土層	59-1	朱褐色10YR2/3	シルト	塩山小ロメ少量
2	墨褐色10YR2/2	シルト	砂利層	60-1	半褐色10YR2/1	シルト	粘土層、塩山小ブロック少量
46-1	赤 10YR2/2	シルト	砂質シルト	2	墨褐色10YR2/2	シルト	塩山小ブロック少量
47-1	墨褐色10YR2/2	シルト	粘土層	61-1	朱褐色10YR2/2	シルト	粘土層、塩山小ブロック少量
2	赤 10YR2/2	シルト	砂質シルト	2	墨褐色10YR2/1	シルト	粘土層少量
48-1	墨褐色10YR2/2	シルト	白糞層、塩山小ブロック複数	62-1	朱褐色10YR2/3	シルト	粘土層、塩山小ブロック少量
2	墨褐色10YR2/2	シルト	塩山小ブロック複数	2	墨褐色10YR2/2	シルト	塩山小ブロック多量
49-1	半褐色10YR2/2	シルト	川削跡、塩山小ブロック	63-1	朱褐色10YR2/2	シルト	塩山ブロック多量
2	赤 10YR2/2	シルト	砂質シルト	65-1	朱 10YR4/2	シルト	泥炭色二ブロック土+粘土少量
50-1	墨褐色10YR2/2	砂質シルト	塩山小ブロック多量	66-1	墨褐色10YR2/2	シルト	塩山小ブロック少量
51-1	墨褐色10YR2/2	シルト	粘土層、塩山小ブロック少量	67-1	朱 10YR2/1	シルト	土表層
52-1	赤 10YR2/2	シルト	泥炭なし	2	墨褐色10YR2/2	シルト	海山ブロック多量
53-1	墨褐色10YR2/2	シルト	粘土層	68-1	朱褐色10YR2/3	砂質シルト	海山ブロック少量
2	墨褐色10YR2/2	シルト	粘土層	69-1	朱 10YR2/1	砂質シルト	鶴ヶ島層、土表層
44-1	半褐色10YR2/2	砂性シルト	粘土層、塩山小ブロック複数	2	赤 10YR4/2	シルト	鶴ヶ島層、土表層
2	赤 10YR2/1	シルト	砂利層、塩山粘土層	70-1	墨褐色10YR2/3	シルト	鶴ヶ島層少量
55-1	朱褐色10YR2/2	シルト	塩山小ブロック多量	71-1	朱褐色10YR2/2	シルト	塩山小ブロック多量
56-1	朱褐色10YR2/2	シルト	粘土層、塩山粘土層	72-1	朱褐色10YR2/2	シルト	塩山小ブロック少量
2	朱褐色10YR2/2	シルト	砂質シルト	2	赤 10YR4/2	砂質シルト	鶴ヶ島層、土表層
57-1	朱褐色10YR2/2	シルト	塩山小ブロック多量	73-1	朱褐色10YR2/2	シルト	鶴ヶ島層少量



第30図 SB1平面・断面図



No.番	土色	土性	鉛筆名	No.番	土色	土性	鉛筆名
16-1	暗褐色10YR3/3	シルト	松前層、地山小ブロック少量	25-1	黒褐色10YR2/2	シルト	柱状層、地山小ブロック、沈積物少量
16-2	黒褐色10YR2/2	シルト	加古川小ブロック少量	25-2	黒褐色10YR2/2	砂質シルト	地山小ブロック多量
20-1	黒褐色10YR2/2	砂質シルト	柱状層、地山小ブロック少量	25-3	黒褐色10YR2/2	砂質土	黒褐色土ブロック少量
20-2	緑色黄褐色10YR4/3	砂質土	地山小ブロック多量	27-1	黒褐色10YR2/2	砂質シルト	柱状層
20-3	黒褐色10YR2/2	砂質シルト	地山小ブロック少量	27-2	黒褐色10YR2/2	砂質シルト	地山ブロック多量
20-4	暗褐色10YR3/5	砂質シルト	地山小ブロック多量	32-1	黒褐色10YR2/2	砂質シルト	柱状層、地山小ブロック少量
20-5	暗褐色10YR2/2	砂質シルト	地山小ブロック少量	32-2	黒褐色10YR2/2	砂質シルト	地山小ブロック多量
23-1	暗褐色10YR2/2	砂質シルト	柱状層、地山小ブロック少量	32-3	黒褐色10YR2/2	砂質シルト	地山小ブロック少量
23-2	暗褐色10YR2/2	砂質シルト	地山小ブロック多量	32-4	黒褐色10YR2/2	砂質シルト	地山小ブロック多量

第31図 SB2平面・断面図

の、P7、P33、P36・37、P38、P39のように長軸140cm、短軸50cm前後のもの、P12～15のように、別個のものがある。別個のものはSB1と同様に検出レベルが低くなつたため、本来は長楕円形の掘り方と考えられる。また、P8、P10、P34などは長楕円形の掘り方を切つていてことから、建物構築時に掘り直したか、建て替えの可能性が考えられる。P12より、土師質土器と磁器片が出土している。土師質土器は焼成後に底部に穿孔したもので磁器は肥前産の菊花文の染付皿とともに近世のものである。

#### S K 8

V区の東壁際中央に位置する。東側は調査区外となり、全体形は不明だが、楕円形と推定される。現耕作の天地返しにより上部が削平されている。長軸210cm以上、短軸150cm、底面長軸170cm以上、短軸65cm、深さ20cmで、方向はE-16°-Sである。堆積土は1層で出土遺物はないが、底面で15～20cm大の縁が5点出土している。

#### S K 9

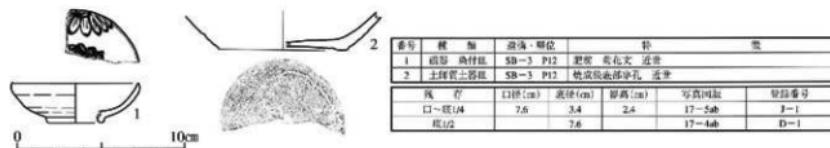
S B3の西側に位置する。平面形は隅丸方形で、底面は南が一段低くなり、段差部分に45×20cmのピットがある。規模は長軸164cm、短軸147cm、深さ50cmで、方向はN-17°-Eである。堆積土は4層に分けられるが、2層は人為堆積の可能性がある。出土遺物はない。

#### 小溝状造構群

V区の北東部に位置する。4.5×3.5mの範囲に6条検出した。幅20～40cm、深さ3～10cm、長さ2～3.5mである。現在の天地返しにより、擾乱されているが、堆積土は地山のブロックを多量に含む層である。出土遺物はない。



第32図 SK8・9平面・断面図



第33図 V区出土遺物

## 第5節 VI区

20Tで焼け跡集中部を検出したため、その箇所を中心に西側に3×4mの、東側に5×4mの拡張区を設定しVI区とした。他に水田跡も検出している。

### 1 基本層序

確認された層は、大別して6層、細別で10層である。

I層：a・b層に細分される。I a層は現水田耕作土、I b層は耕地整理以前の水田耕作土である。

II層：a・b層に細分される。II a層は黒褐色粘土質シルトで、調査区中央に分布するが、下部に酸化鉄の集積がみられることや、下位で擬似畦畔が検出されたことなどから、水田耕作土と考えられた。II b層は暗褐色シルトで、円礫を多く含む層で主に南半に分布し、II a層水田の擬似畦畔を形成している。

III層：a・b層に細分される。III a層は黒色粘土、III b層は黒褐色シルトで、共に調査区中央にのみ分布し、VI層が形成する浅い凹地に自然堆積した層である。

IV層：a・b層に細分される。IV a層は北半にのみ分布する黒褐色シルトとIV b層起源の暗褐色砂質シルトのプロックの混合した層で、人為堆積と考えられる。IV b層は暗褐色砂質シルトで、ほぼ全体に分布し、円礫を多く含む層であるが、特に北半部で焼けた疊層を集中的に含む箇所がある。

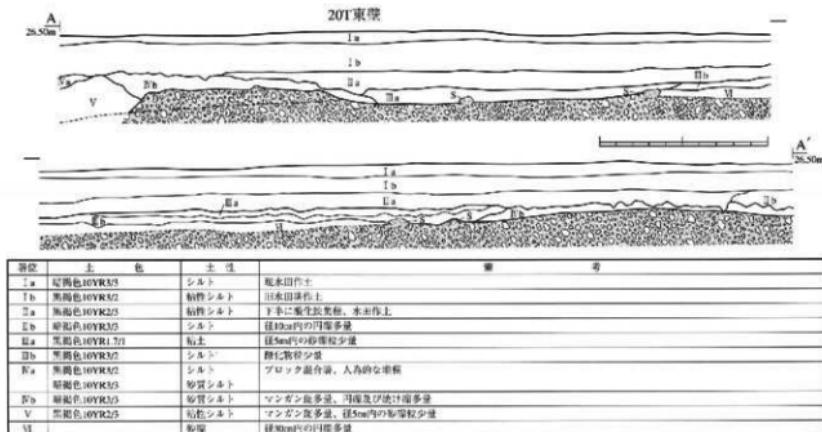
V層：黒褐色粘性シルト。北部のみにみられ、VI層の疊層が落ち込む箇所の堆積土になっている。

VI層：疊層。その標高は25~26mで、上面は凹凸がある。北端付近では前述したように、疊層が北に向かって急速に落ち込んでいる。トレント北端部から、北に約10mで高さ4~5mの段丘崖があり、その上に中町段丘面が広がっている。疊層の落ち込みは段丘崖沿いの埋没した河川の流路跡の可能性が考えられる。

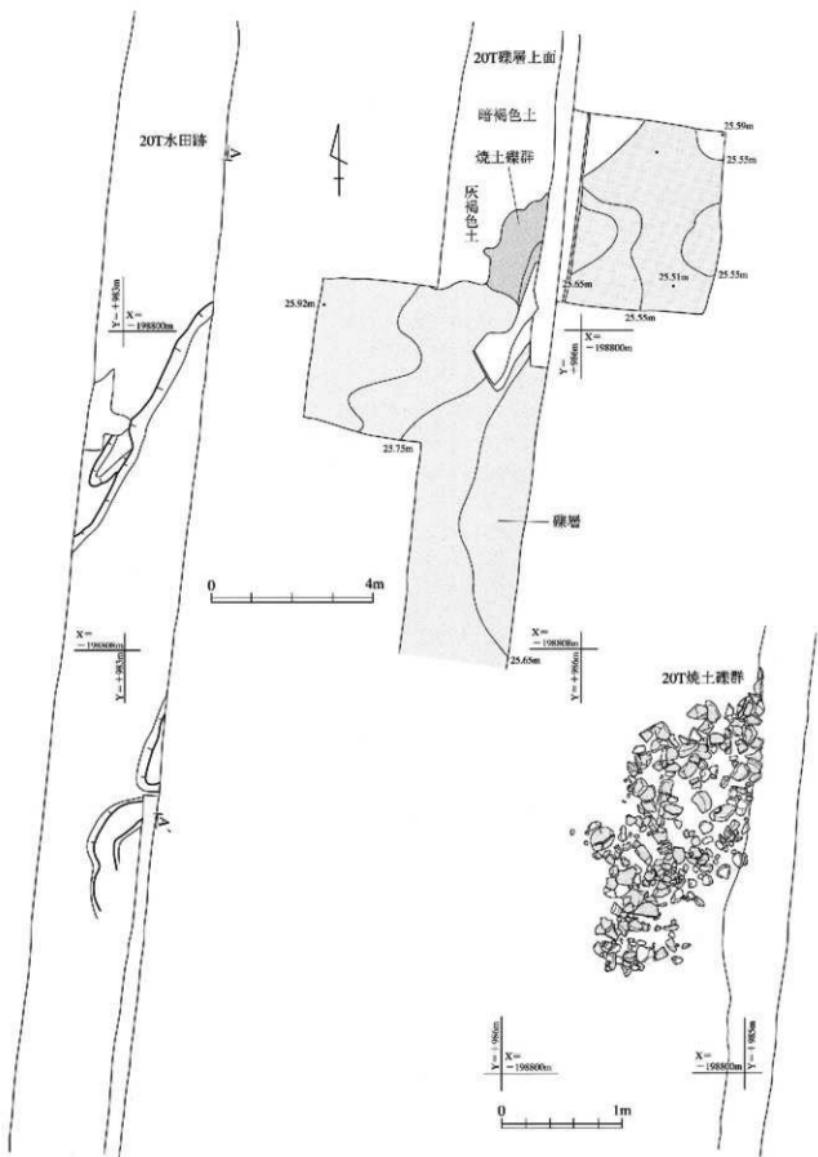
### 2 造構

#### II a層水田跡

南北で擬似畦畔1条、中央で段差1条を検出した。擬似畦畔は、疊を多く含むII b層、IV b層の盛り上がりとして



第34図 VI区基本層序



第35図 VI区遺構平面図

検出され、長さ約8m、幅50~60m、高低差6~10cmで、方向はN-23°-Eである。段差はIV b層と疊層のIV層で、長さ7m、高低差5~17cm、方向N-28°-Eである。擬似畦畔や段差をII a層が覆っていること、II a層には酸化鉄集積がみられること、III a・b層が自然堆積層であることなどから、II a層が水田耕作土で、上記の遺構がそれに伴う擬似畦畔と段差と判断された。II a層からは土器の細片が出土している。水田の時期は古代以降と考えられる。

#### 焼け礫集中部

礫層上面は標高25~26mで、やや凹凸がみられるが、全体としては南東へ傾斜している。II a層水田の段差部分の北側に沿って、北東方向に礫層が盛り上がる箇所があり、そこに焼けた礫が集中する所がある。その範囲は1×3mである。焼けた面は一定しているわけではなく、下面が焼けた礫、焼けて割れた礫、割れた後焼けた礫など様々であることから、動いている可能性が考えられる。出土遺物はないが、東側の拡張区の礫上面でロクロ使用の内壁の壊片が出土していることから、古代以降の時期が考えられる。

## 第4章 自然科学分析

株式会社 古環境研究所

### 第1節 船渡前遺跡における屈折率測定

#### 1はじめに

仙台市とその周辺に分布する完新世に形成された土層中には、十和田火山や肘折火山さらに椎名火山などから噴出したテフラ（火山碎屑物、いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようにになっている。そこで、テフラ層が認められた船渡前遺跡においても、採取された試料を対象として屈折率測定を行い示標テフラとの同定を試みた。

#### 2 屈折率測定

##### (1) 測定試料と測定方法

発掘調査担当者により採取されたⅢ区SI-1の4層（試料番号6）およびⅡA区SR-1の3層（試料番号7）の2点について、屈折率測定を行って示標テフラとの同定を試みた。測定は、温度一定型屈折率測定法（新井、1972, 1993）による。

##### (2) 測定結果

屈折率の測定結果を表1に示す。Ⅲ区SI-1の4層（試料番号6）には、無色透明の軽石型ガラスが多く含まれている。火山ガラス（n）の屈折率は、1.502-1.506である。重鉱物としては、斜方輝石や单斜輝石さらに角閃石がごく少量含まれている。またⅡA区SR-1の3層（試料番号7）には、無色透明の軽石型ガラスが多く含まれている。火山ガラス（n）の屈折率は、1.502-1.506である。重鉱物としては、斜方輝石や单斜輝石がごく少量含まれている。

#### 3 考察—テフラ粒子の起源について

屈折率測定の結果、Ⅲ区SI-1の4層（試料番号6）とⅡA区SR-1の3層（試料番号7）に含まれるテフラ粒子間

には、ほぼ同じ特徴が認められた。したがって、これらに含まれるテフラ粒子は、共通したテフラに由来すると考えられる。分析測定者が現地において土層の観察などの機会を得ることができなかったために、詳細に言及することは困難であるが、これらのテフラ粒子は、既知のテフラに由来するとなれば、その特徴から、915年に十和田火山から噴出したと推定されている十和田a火山灰（町田ほか、1981）に由来する可能性がもっとも高いと考えられる。

#### 4. 小結

仙台市船渡前遺跡において採取されたテフラ試料を対象に屈折率測定を行った。その結果、十和田a火山灰（To-a, 915年）に由来する可能性の高いテフラ粒子が検出された。

#### 文献

- 新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロノロジーの基礎的研究。第四紀研究、第4回研究、11, p.254-269。
- 新井房夫（1993）温度一定型屈折率測定法。日本第四紀学会編「第四紀試料分析法、2、研究対象別分析法」, p. 138-149。
- 町田 洋・新井房夫・森脇 広（1981）日本海を渡ってきたテフラ。科学、51, p.562-569。

表1 船渡前遺跡における屈折率測定結果

測定点	工具	試料	火山ガラス				基準値 [n]	基底物
			基	形態	色調	基準値 [n]		
III-SR-1	4号	6	+++	pm	cl	1.502-1.506	(epx, ep, he)	
II-ASR-1	3号	7	+++	pm	cl	1.502-1.506	(epx, ep, he)	

+++：とても多い、++：多い、+：中程度、\*：少ない、-：認められない。pm：柱状岩、cl：無孔透視、epx：斜方輝石、ep：斜方輝石、he：角閃石。基底物の□は量の少ないことを示す。屈折率の測定は、温度一定型屈折率測定法（新井、1972, 1993）による。

## 第2節 船渡前遺跡における放射性炭素年代測定

### 1 試料と方法

No.	試料名	試料の特徴	前処理・調査	測定法
1	II-SR-1 丸土	木柱	酸/アルカリ/硫酸 ベンゼン洗浄	3-部分燃焼 (液体シランチレーション法)
2	II-ASR-1 20号	木柱	酸/アルカリ/硫酸 ベンゼン洗浄	3-部分燃焼 (液体シランチレーション法)
3	II-ASR-1 轟上層	植物遺体	酸/アルカリ/硫酸 トルエン	AMS法 (加速器質量分析法)
4	II-ASR-1 6号	草植物	硫酸	AMS法 (加速器質量分析法)
5	II-ASR-1 1号	草植物	硫酸 硫酸銅 硫酸	AMS法 (加速器質量分析法)

## 1 測定結果

試料名	14C年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正14C年代 (年BP)	暦年代	測定No. Beta- ID
No.1	1550±60	-26.6	1520±60	文政 AD 560 2 σ AD 420 TO 650 1 σ AD 465 TO 475, AD 515 TO 620	126782
No.2	1510±60	-25.4	1510±60	文政 AD 570 2 σ AD 425 TO 655 1 σ AD 530 TO 620	126783
No.3	1620±60	-24.8	1620±60	文政 AD 490 2 σ AD 330 TO 590 1 σ AD 395 TO 535	126784
No.4	1440±60	-23.5	1460±40	文政 AD 620 2 σ AD 550 TO 690 1 σ AD 590 TO 645	126785
No.5	2190±60	-21.8	2240±40	文政 BC 360, 280, 250 2 σ BC 390 TO 185 1 σ BC 375 TO 330, BC 330 TO 205	126786

(2 σ : 95% probability, 1 σ : 68% probability)

## 1) 14C年代測定値

試料の14C/12C比から、単純に現在（1950年AD）から何年前（BP）かを計算した値。14Cの半減期は5,568年を用いた。

2)  $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定14C/12C比を補正するための炭素安定同位体比（13C/12C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

## 3) 補正14C年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、14C/12Cの測定値に補正值を加えた上で算出した年代。

## 4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中14C濃度の変動を補正することにより、暦年代（西暦）を算出した。補正には年代既知の樹木年輪の14Cの詳細な測定値を使用した。この補正是10,000年BPより古い試料には適用できない。

## 5) 測定No.

測定は、Beta Analytic Inc.(Florida, U.S.A)において行われた。Beta-は同社の測定Noを意味する。

## 第5章 まとめ

### 1 遺物について

比較的まとまって出土した資料は、Ⅲ区のS I 1出土土器群のみといえるので、ここではその資料について述べることにする。

#### (1) S I 1 出土土器群

土器ではロクロ使用の壺、ロクロ使用・不使用の壺、赤焼上器、須恵器が出土している。これらのうち図示できたものは、土器壺10点、高台付壺1点、壺13点、赤焼上器壺1点、須恵器壺2点（第22～24図）である。なお、口縁部破片資料を含めた個体数は、土器壺61点、壺37点、赤焼土器壺3点、須恵器壺3点である。

#### 土器

壺 外面はロクロナデ、内面はヘラミガキ後黒色処理が施されている。底部の切り離しは回転糸切りで、切り離し後の再調整は図示できなかった底部片（6点）も含めて認められない。器形は体部が直線的に外傾し口縁部に至るもの（第22図1・2）、体部がやや丸みをもって外傾しそのまま口縁部に至るもの（5～7）、体部がやや丸みをもって外傾し口縁部が外反するもの（8～12）などがある。口径は13.4～16.2cmであるが、13.8～14.5cmに集中する。法量すべてがわかるものは2点のみで底径／口径は0.43、0.4である。

壺 ロクロ不使用（25・26）と使用（13～23）のものがある。

ロクロ不使用は口径が20cm以上の大形のものである。体部はやや膨らむ長胴形で、頭部は「く」字状に外反する。外面にはヘラナデ後ナデ、内面にはヘラナデが施されている。25の底部にはムシロ状圧痕がある。

ロクロ使用のものは口径により大小に分けられる。口径が15cm前後の小形品は7点（13～19）で、口径20cm以上の大形品は4点（20～23）である。両者とも体部は長胴形であるが、丸みの強いものもある。頭部は「く」字状に屈曲するが、さらに口縁端部が直立あるいは上方につまみ出されているものがある。外面はロクロナデであるが、外面部下半にヘラケズリ、内面にヘラナデ、回転ヘラナデ、ヘラミガキが施されるものがある。底部は回転糸切りのものと切り離し技法不明で手持ちヘラケズリ、ヘラナデのものとがある。

高台付壺 高台部は接合面で剥離している（4）。壺部はほぼ直線的に大きく開き、口縁部が外反気味になる。外面はロクロナデ、内面はヘラミガキ後黒色処理されている。底部の切り離しは回転糸切りで、高台貼り付け後ナデが施されている。なお、図示不可能な破片に両面ヘラミガキの口縁部片1点があり、高台付壺と考えられる。

#### 赤焼土器

壺 内外面ともにロクロナデで底部は回転糸切り無調整である（3）。体部はほぼ直線的に外傾しそのまま口縁部に至る。底径／口径は0.42である。

#### 須恵器

壺 23は口縁部で体部にヘラケズリが施されている。27は大形の壺の破片で外面に平行タタキ、内面にあて目痕がある。

以上、S I 1 土器群の特徴をまとめると、①土器は壺に2点ロクロ不使用のものがあるだけで他はすべてロクロ使用である。②底部破片は観察可能な破片を含めても8点で資料数が少ないという制約があるが、切り離し後の再調整はない。③土器壺は口径14cm前後の中形品に集中し、とくに小形品大形品はない。④土器の構成は土器主体で赤焼土器、須恵器は非常に少ない。となる。

これらの特徴を持つ土器群は、東北南部の土器群編年では平安時代の表衫ノ入式に比定される。表衫ノ入式については、時期が新しくなるにつれ、口径に対する底径の割合が小さいものへ、底部切り離し後の再調整が減少し無

調整へと変化し、土器の構成として赤焼土器が増加する、などの傾向性で変遷することがこれまでの多くの調査成果により示されている（加藤：1982、丹羽：1983、田中：1984、佐々木：1984、菊池：1985、村田：1995）。

その変遷の中で再調整のない段階の土器群としては、仙台市安久東遺跡第2号住居跡出土土器（土岐山：1980）が挙げられる。しかし安久東2件では土器部壺の口径が13~13.8cmに集中しやや小形であること、赤焼土器が約4割近くあり、その中に口径11~13cmの小形品が一定量存在するなどの点で、S I 1出土土器と相違がみられる。これら壺の法量の縮小化はより後出的な要素と考えられ（村田：1994）、S I 1出土土器は安久東2件より古い段階と捉えられる。

安久東2件より古く、底部無調整が主体となる資料を名取川周辺に求めると、仙台市中田畠中遺跡第2次調査第2号住居（佐藤甲：1985）、同市元袋遺跡S I 19住居跡（渡部：1987）、同市下ノ内遺跡第V B群土器（篠原：1990）、伊古田遺跡III b群土器（渡部：1995）、同市四郎丸館跡S I 1住居跡（竹田：1995）などが挙げられる。

これらの土器群と比較した場合、底径／口径は資料数が少ないため対比が困難であるが、壺の法量を口径でみた場合中田畠中2件、元袋19住が約14~15cmに集中し、下ノ内V B群、伊古田III b群は12~13cm台のものが一定量あり縮小化傾向がみられ、本遺跡S I 1は後者より前出的のようである。再調整の割合は中田畠中2件が約2割、元袋19住が約4割、下ノ内V B群では約1割、伊古田III b群では1点のみとなり、本遺跡S I 1は後2者に近いといえる。また赤燒土器の割合は、中田畠中2件が1割、元袋19住、下ノ内V B群、伊古田III b群では約3割となり、中田畠中2件に近い。

前述の土器群は報文によればいずれも9世紀後半から10世紀前半の中に位置付けられている。また近年検討された古代宮城都の10世紀前後の土器変遷（村田：1995）によれば、中田畠中2件、元袋19住は灰白色火山灰（後述）降下前後の土器群（第2群土器）に位置付けられている。

S I 1には灰白色火山灰が堆積土の4層中に比較的大きなブロックで含まれている。1次的な堆積状況ではないが降下後の2次堆積にしろS I 1は灰白色火山灰降下前の遺構と考えられる。しかも堆積状況から降下からあまり隔離しない時期が想定される。灰白色火山灰の降下年代は現在907年~934年の間と考えられており（多賀城跡研：1998）、S I 1の年代は10世紀前半でもより古い段階が考えられよう。

## 2 遺構について

### （1）小崖・礎層・河川跡

小崖 1~4 Tで確認された小崖（小規模な段丘崖状のもの）は、検出された標高や共通した堆積層などから連続したものと考えられ、その長さは約850m以上に及ぶ（第5図）。現在はこの小崖と河川敷との間に高速道路が存在するが、以前はこの小崖から河川敷へ連続していたと推測される。

小崖を覆うV a層の時期は、平坦部が離水し地表面が安定していたと考えられる。その時期については、III a~V b層にかけて出土する縄文時代前期後葉から中期の土器が層位的に混在していることから、遺物が二次堆積している可能性が考えられ年代決定資料とはならず、III a層上面が平安時代の住居跡の検出面であることから、おおまかに平安時代以前と捉えておきたい。

礎層 1~5・13 Tを設定した面と6~12 Tを設定した面では、検出された最上位の礎層の標高が前者では20.8~22.3m、後者では23.5~25mと違いがみられ、特に5・13 Tと6・7 Tとの間では近接するにもかかわらず、2~2.5mの高低差がある（第5図）。これは大きな段丘面のなかにさらに小規模な段丘があるためと考えられ、段差部分は5・13 Tと6・7 Tとの間にあり、そこには前項で述べたような小崖が存在すると推測される。

S R 1 S R 1は5 Tと13 Tの北端部で確認されており、まさに前述した5・13 Tと6・7 Tとの間にある小崖に沿って形成された河川跡と考えられる。堆積土に何層かの洪水堆積物がみられることから、平坦部が離水してから

も門地となり洪水のたびに土砂が堆積していたことがうかがえる。最下層の樹木および堅果類の年代が5~6世紀であり堆積上位に10世紀前半の灰白色火山灰があることから、長期開口していたと考えられる。

#### (2) 住居跡

III区S I 1から北西約120mのI区内にS 51年住居（昭和51年調査の住居跡）がある。とともに平安時代の所産であるが、S 51年住居は9世紀後半に位置付けられており、S I 1よりも古い。規模はS I 1が大きいが、カマドが東辺に付くことや大きな凝灰岩を天井石に用いることなどは共通している。いずれも近くに同時期の住居跡が確認されないことから、孤立した住居であったか、住居がかなり散在する集落が想定される。

#### (3) 溝跡

II区S D 1は全長60m以上の大規模な溝跡である。下位にS R 1があり、まだ埋まりきらないS R 1を利用して造られた可能性が考えられる。時期については年代決定資料がなく、灰白色火山灰層を切っていることからおおまかに10世紀後半以降としか捉えられない。しかし、S D 1はさらに西へ100mも伸びれば名取川に至り、そこはまさに近世に構築された木流堤の取水口付近であり、東へ伸びても木流堤に合流するような位置にあることから、木流堤に間連する近世の溝跡の可能性も考えられよう。

#### (4) 掘立柱建物跡

V区S B 3の柱穴から出土した資料より近世の建物跡と考えられる。瘤のある建物といものとがあるが、ともに柱穴の掘り方が長楕円形になることが特徴的である。類似した掘り方をもつ建物跡は仙台市松木遺跡S B-1・2掘立柱建物跡（T.藤：1986）にみられるがともに廃はなく、時期は15~16世紀に位置付けられている。

#### 参考文献

- 加藤道男：1989 「宮城県における土器研究の現状」『考古学論叢Ⅱ』芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会（稿子は1982）
- 石地逸夫：1985 「中平遺跡」宮城県文化財報告書第108集
- 工藤哲司：1977 「八幡西遺跡」『年報1』仙台市文化財調査報告書第23集
- 工藤哲司：1986 「柳生」仙台市文化財調査報告書第95集
- 佐々木和博：1984 「渡島遺跡」宮城県文化財報告書第101集
- 佐藤昭典：1994 「仙台・水の文化誌ー続「もう一つの広瀬川」」(前編)
- 佐藤甲一：1985 「中山畑中遺跡 第2次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第78集
- 猪俣信彦：1990 「下ノ内遺跡ー仙台市高速鉄道関係遺跡発掘調査報告書Ⅱ」仙台市文化財調査報告書第136集
- 多賀城跡研究所：1998 「第68次調査」『多賀城跡』宮城県多賀城跡調査研究所年報1997
- 竹田幸司：1995 「四郎九郎跡」仙台市文化財調査報告書第200集
- 田中則和：1984 「山口遺跡Ⅱ」仙台市文化財調査報告書第61集
- 十岐山武：1980 「安久東遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ』宮城県文化財報告書第72集
- 舛羽茂茂：1983 「宮前遺跡」『朽木櫛横穴古墳群・宮前遺跡』宮城県文化財報告書第96集
- 宮城県教育委員会：1977 「清太原遺跡・船渡前遺跡」宮城県文化財報告書第49集
- 村田晃一：1994 「第V章1. A〔平安時代〕」「森田新田遺跡」宮城県文化財報告書第163集
- 村田晃一：1995 「宮城郡における10世紀前後の土器」『福島考古』第36号 福島県考古学会
- 渡部弘美：1987 「元袋田遺跡ー奈良・平安時代集落跡調査報告」仙台市文化財調査報告書第103集
- 渡部紀：1995 「伊古田遺跡ー仙台市高速鉄道関係遺跡発掘調査報告書Ⅰ」仙台市文化財調査報告書第193集



1. 調査地東部遠景（北西より）



2. 調査地東部近景（I 区以東、北西より）



3. 調査地西部近景（V 区以西、東より）



4. IT全景（南西より）



5. 2T全景（南より）



6. 2T東壁断面（西より）



7. 3T全景（南より）

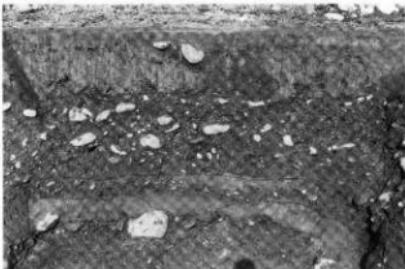


8. 3T東壁断面（西より）

写真1



1. 4T全景（南より）



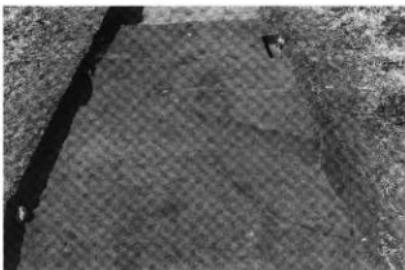
2. 6T東壁断面（西より）



3. 6T全景（南より）



4. 9T全景（西より）



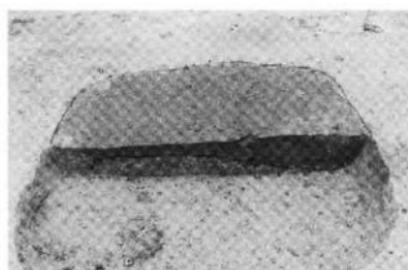
5. 12T SD6（南より）



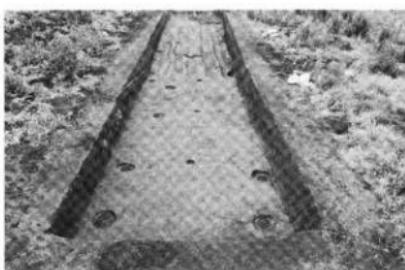
6. 14T SD7（東より）



7. 17T全景（南より）



8. 17T SK12断面（南より）



9. 18T全景（南より）

写真2



1. 19T SD5 (西より)



2. 22T西壁断面 (東より)



3. 22T全景 (東より)



4. 26T全景 (南より)



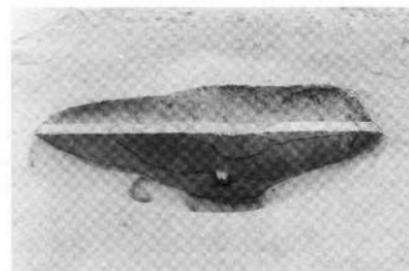
5. 23T全景 (東より)



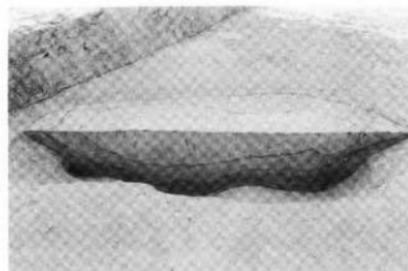
6. 24T自然流路 (北東より)



7. I区全景 (西より)



8. I区SK11断面 (南より)



9. I区SK10断面 (西より)

写真 3

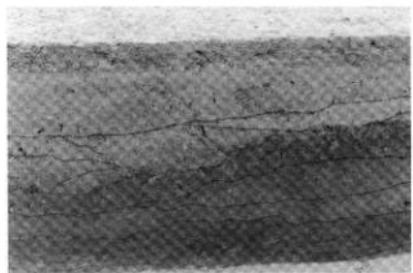


1. II A区SD1完掘（東より）

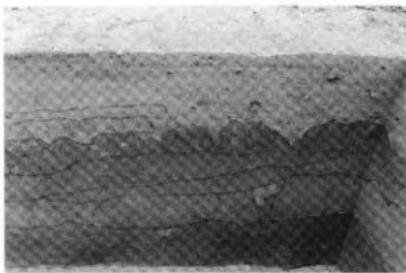


2. II B区SD1完掘（東より）

写真4



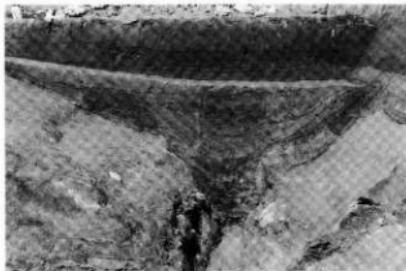
1. II区東壁断面①（西より）



2. II区東壁断面②（西より）



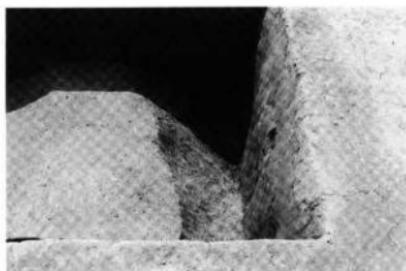
3. II区遺構検出状況（東より）



4. II A区SDI西壁断面（東より）



5. II B区SDI西壁断面（東より）



6. 4T SDI（東より）



7. II区SD2検出状況（西より）



8. II区SD2断面（東より）

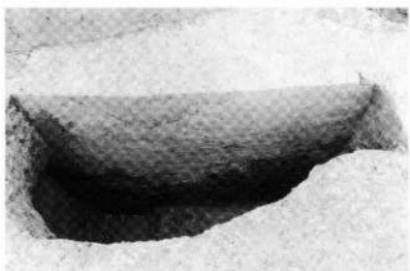
写真 5



1. II A区SR1断面（西より）



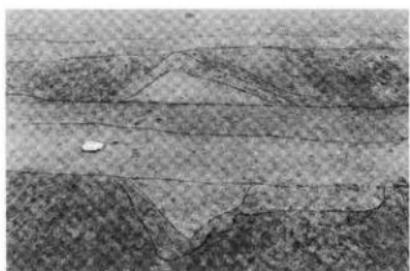
2. II B区DSE1完掘（南より）



3. II B区SX1断面（北東より）



4. II B区SX1完掘（南より）



5. II区SX2・3・4検出状況（南より）



6. II区SX2・3完掘（北より）

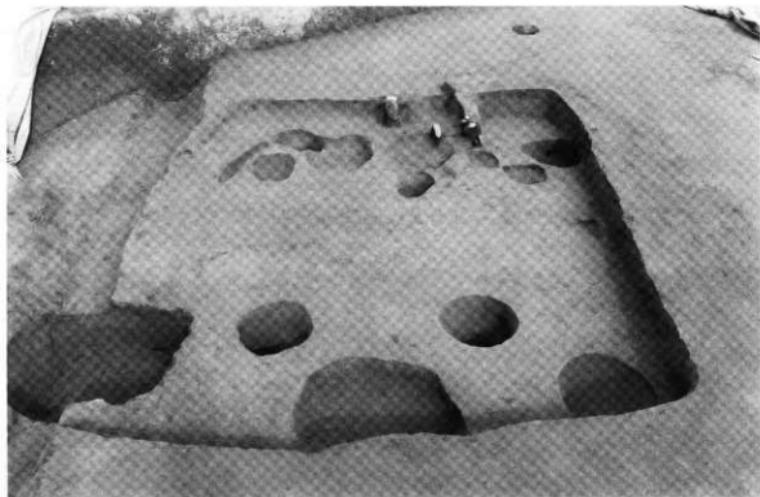


7. II区SX4完掘（東より）



8. II区調査風景（東より）

写真 6



1. III区SII完掘（西より）



2. III区北壁断面（南より）



3. III区調査風景（北より）

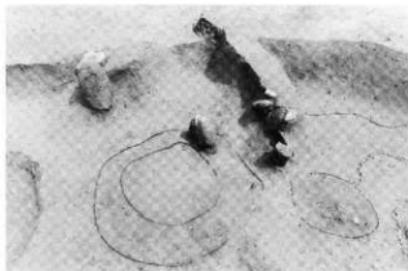


4. III区SII検出状況（南より）



5. III区SII断面（西より）

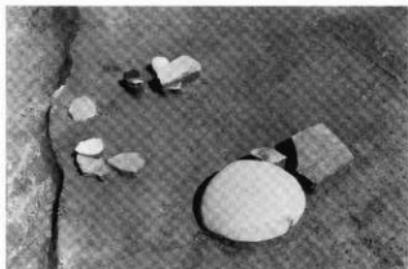
写真7



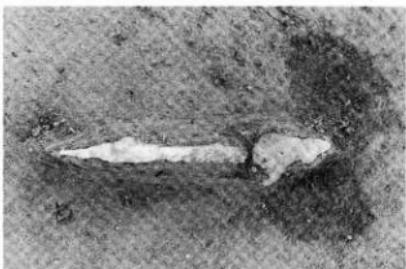
1. III区SI1カマド（西より）



2. III区SI1カマド周辺遺物出土状況（北西より）



3. III区SI1遺物出土状況（北より）



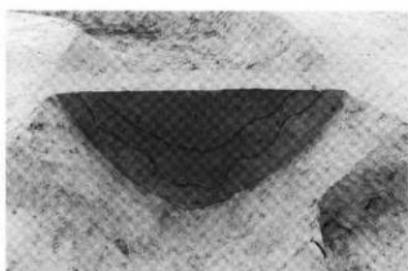
4. III区SI1鉄製品出土状況



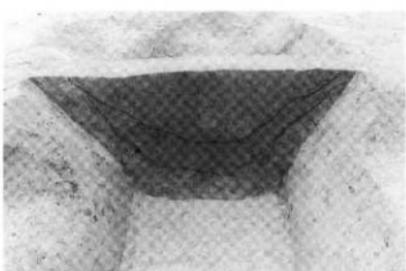
5. III区SI1調査風景



6. III区SD3・4完掘（南より）

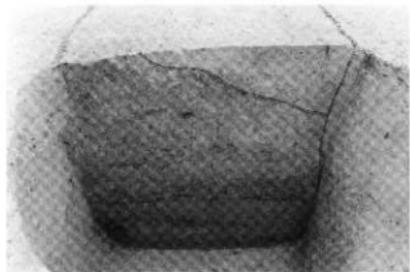


7. III区SD3断面（北より）

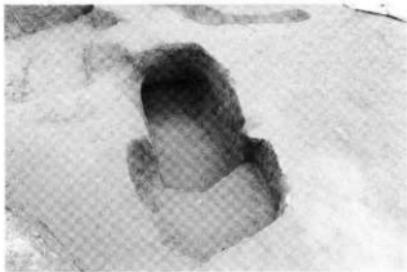


8. III区SD4断面（北より）

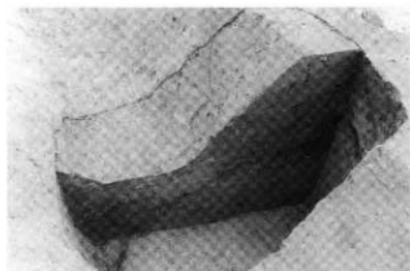
写真 8



1. III区SK3断面（南より）



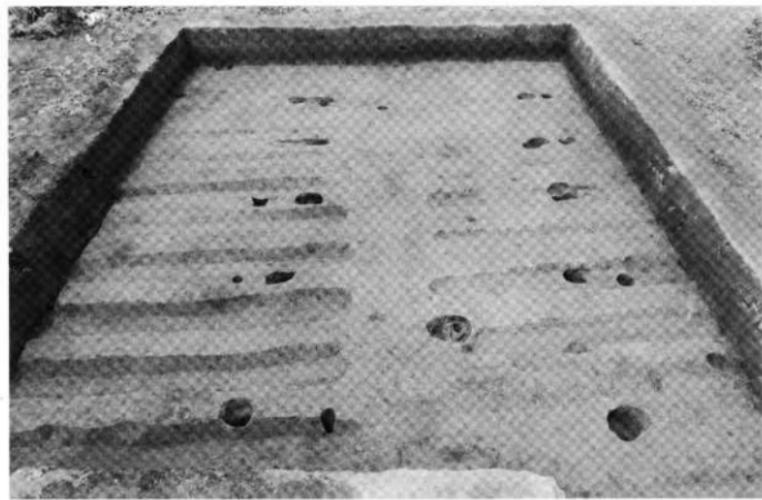
2. III区SK2・3完堀（北より）



3. III区SK7断面（西より）



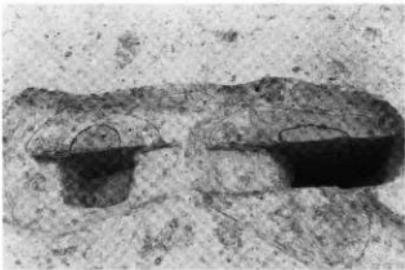
4. III区SK7完堀（北より）



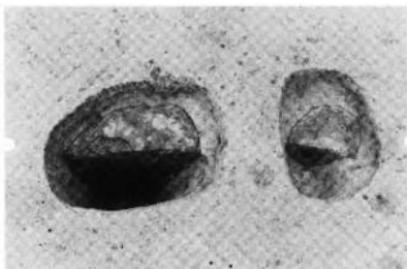
5. IV区SB1全景（南より）



1. IV区北岸断面（南より）



2. IV区SB1 P44・45断面（南より）



3. IV区SB1 P54・55断面（南より）



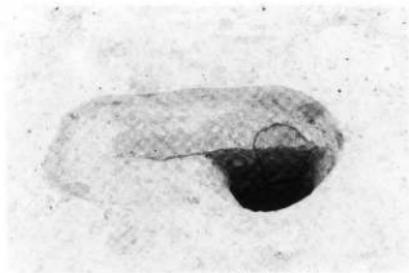
4. IV区SB1 P62断面（北より）



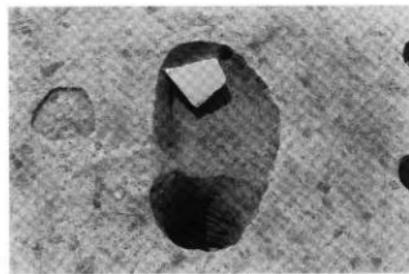
5. V区全景（東より）



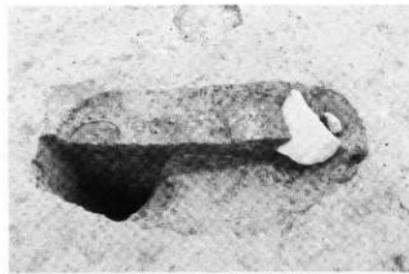
1. V区SB2 (東より)



2. V区SB2 P24断面 (西より)



3. V区SB2 P32完掘 (北より)



4. V区SB2 P32断面 (西より)



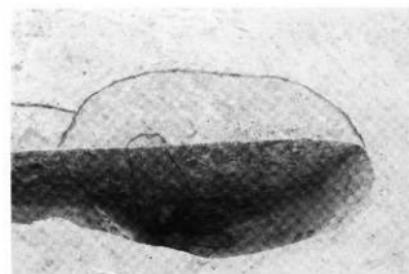
5. V区SB3 (東より)



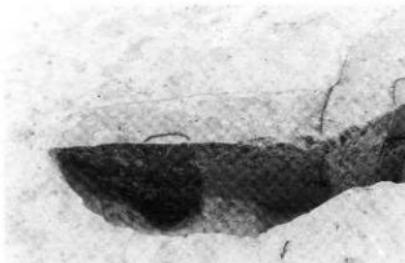
6. V区SB3 P8・9完掘 (北西より)



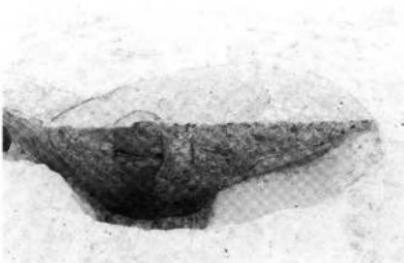
7. V区SB3 P9断面 (南より)



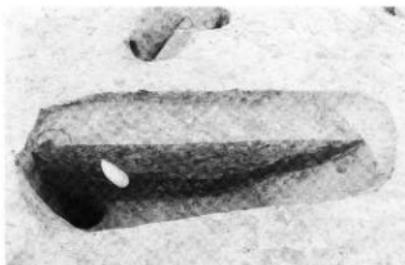
8. V区SB3 P8断面 (南より)



1. V区SB3 P11断面（南より）



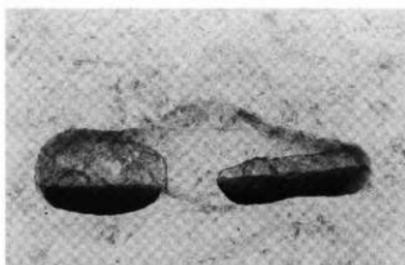
2. V区SB3 P10断面（南より）



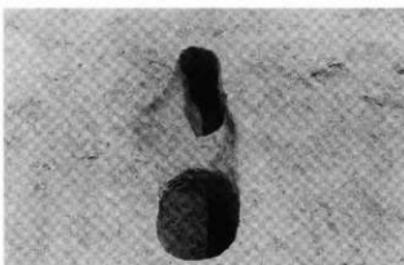
3. V区SB3 P33断面（西より）



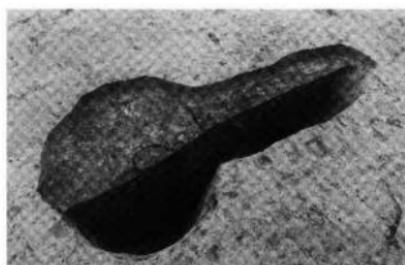
4. V区SB3 P33完堀（東より）



5. V区SB3 P36・37断面（南より）



6. V区SB3 P36・37完堀（西より）

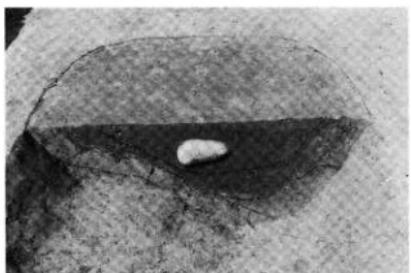


7. V区SB3 P34・35断面



8. V区SB3 P34・35完成

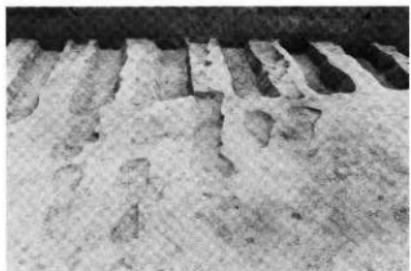
写真12



1. V区SK9断面（南より）



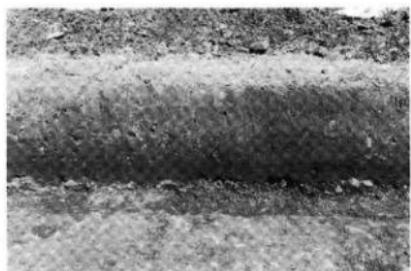
2. V区SK8断面（南より）



3. V区小溝状遺構群完掘（西より）



4. V区調査風景（北より）



5. VI区東壁断面（西より）



6. VI区水田跡（南より）



7. VI区施設跡集中部（南東より）



8. VI区露出状況（西より）

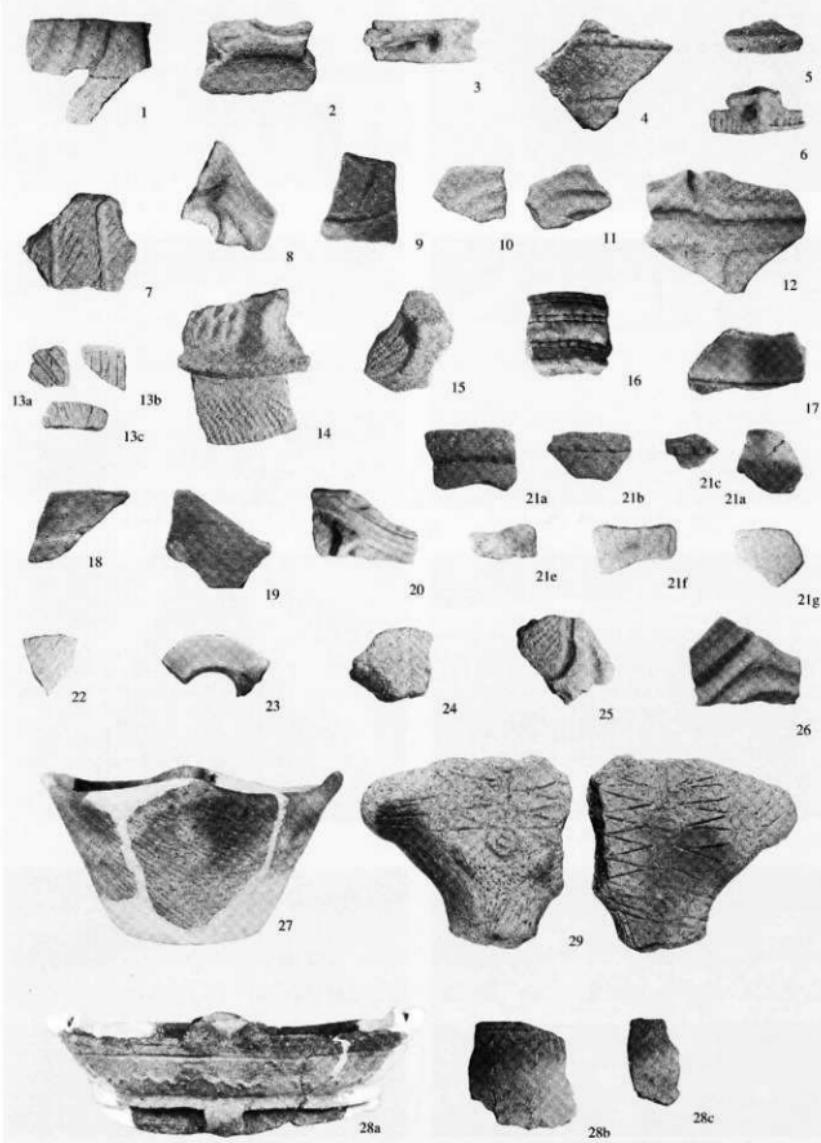


写真14出土遺物(1)

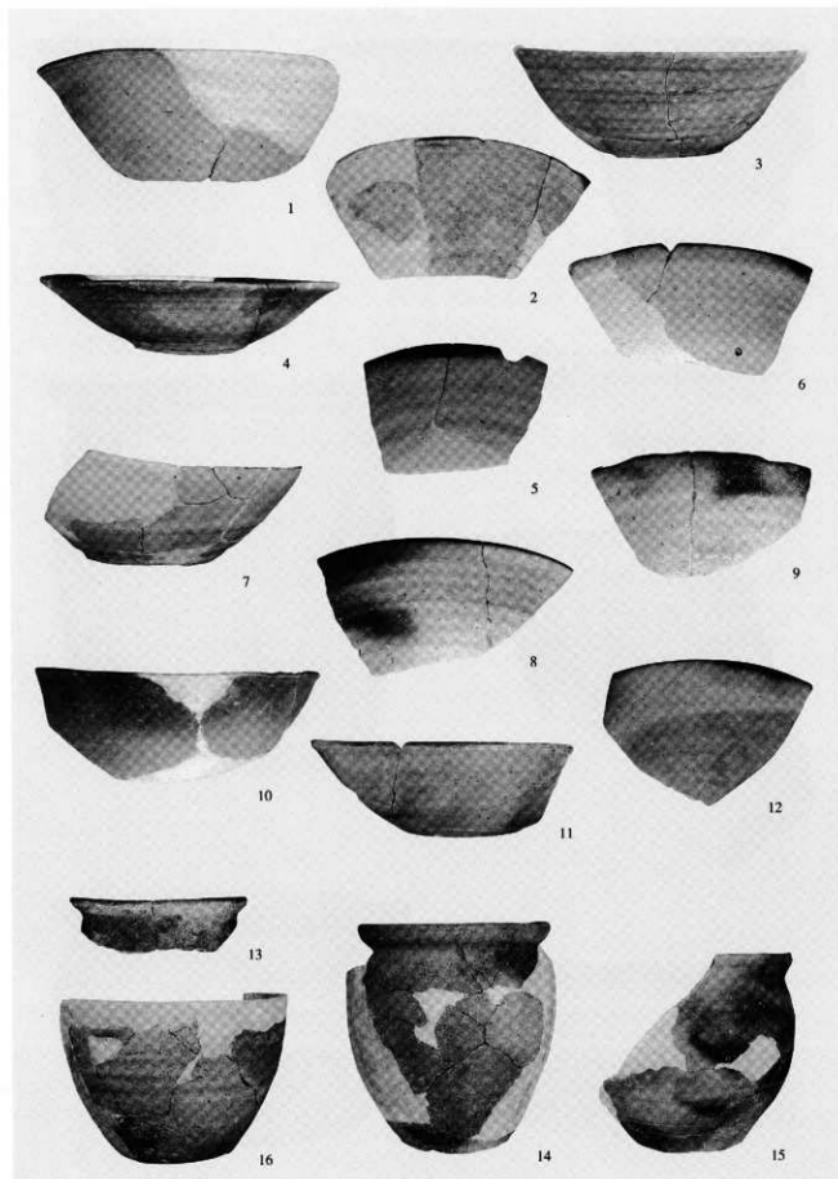


写真15 出土遺物(2)

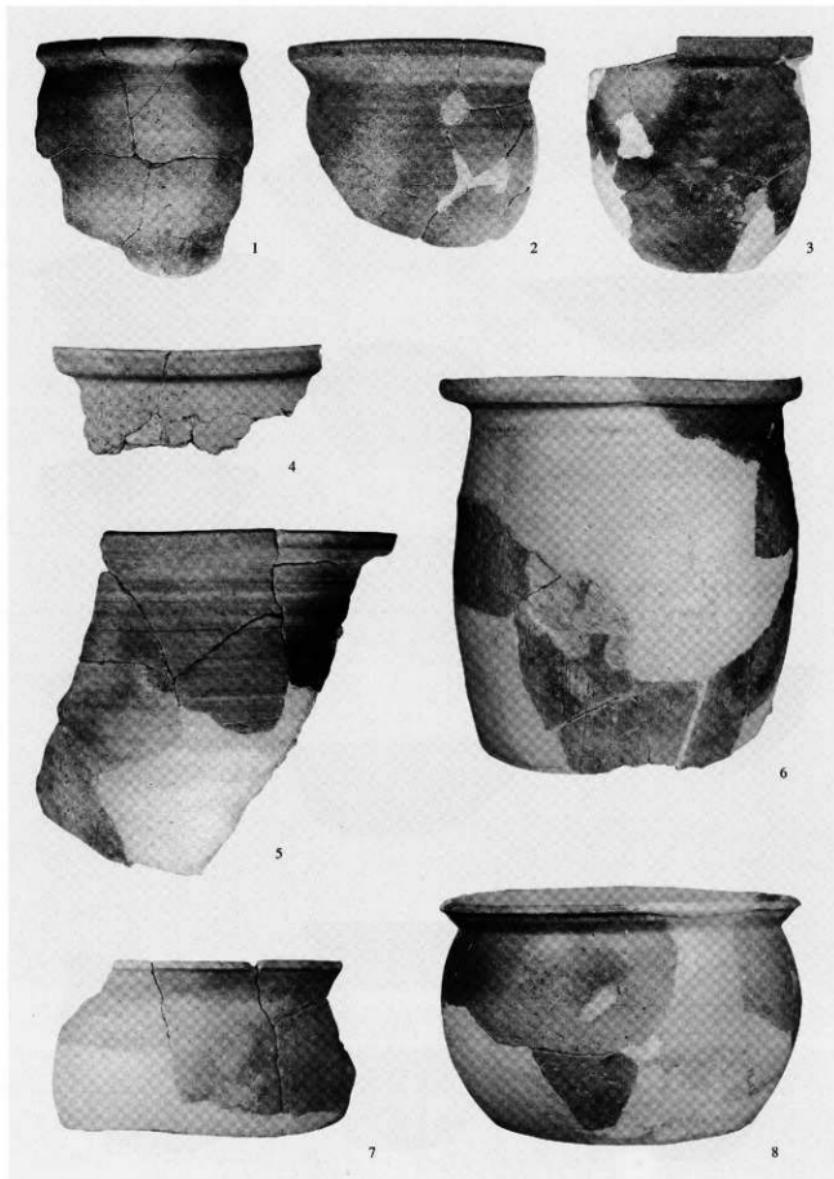


写真16 出土遺物(3)

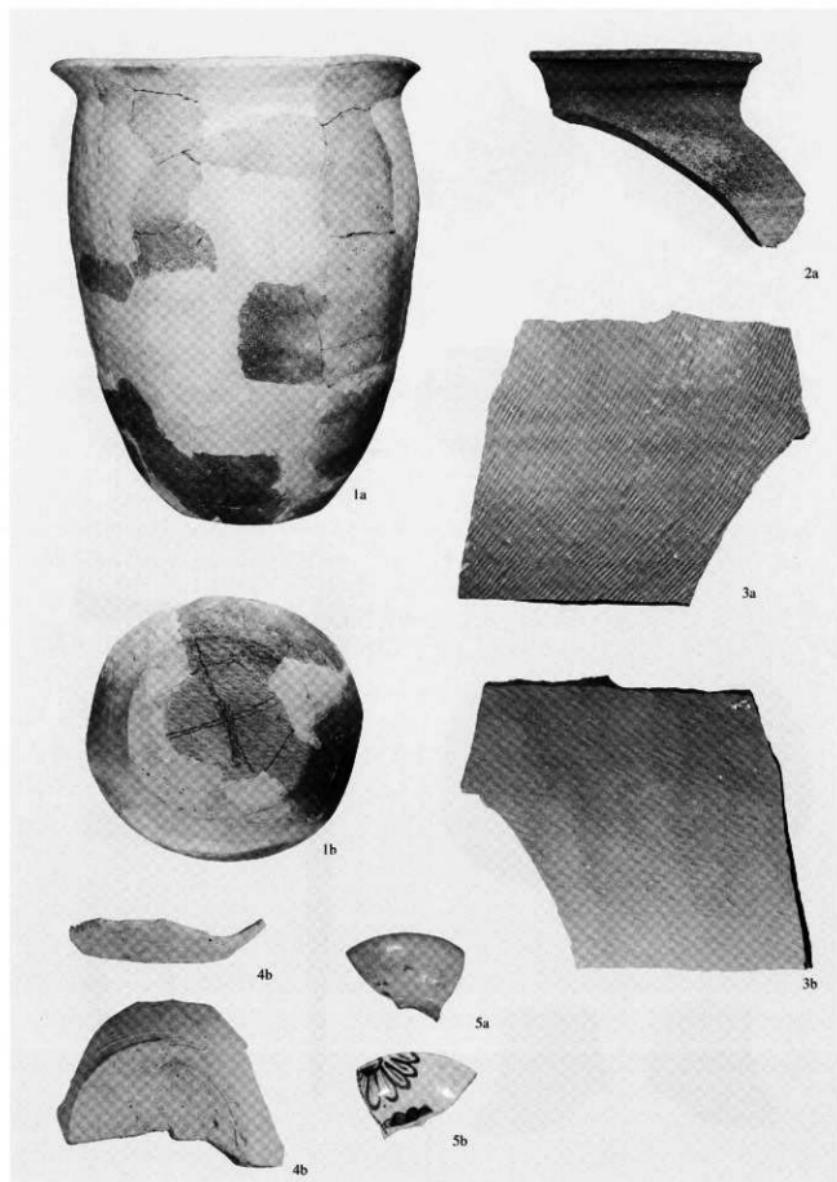


写真17 出土遺物(4)

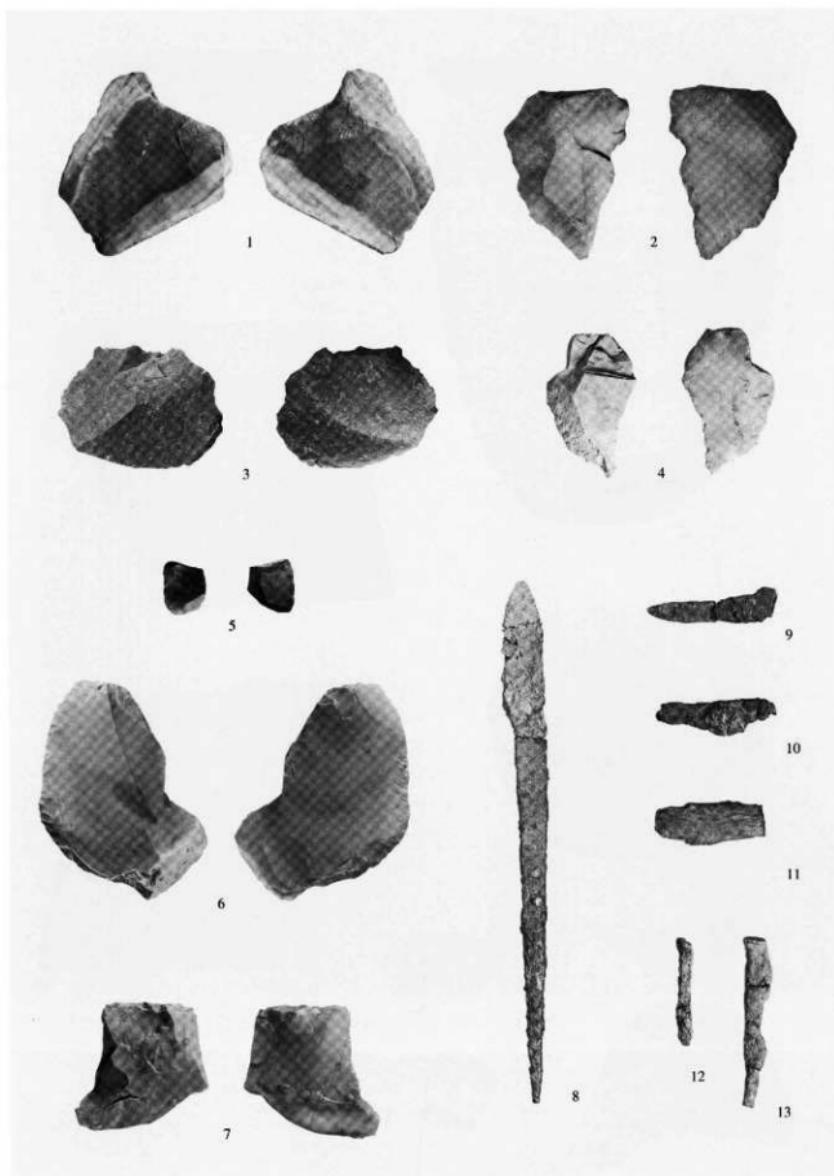


写真18 出土遺物(5)

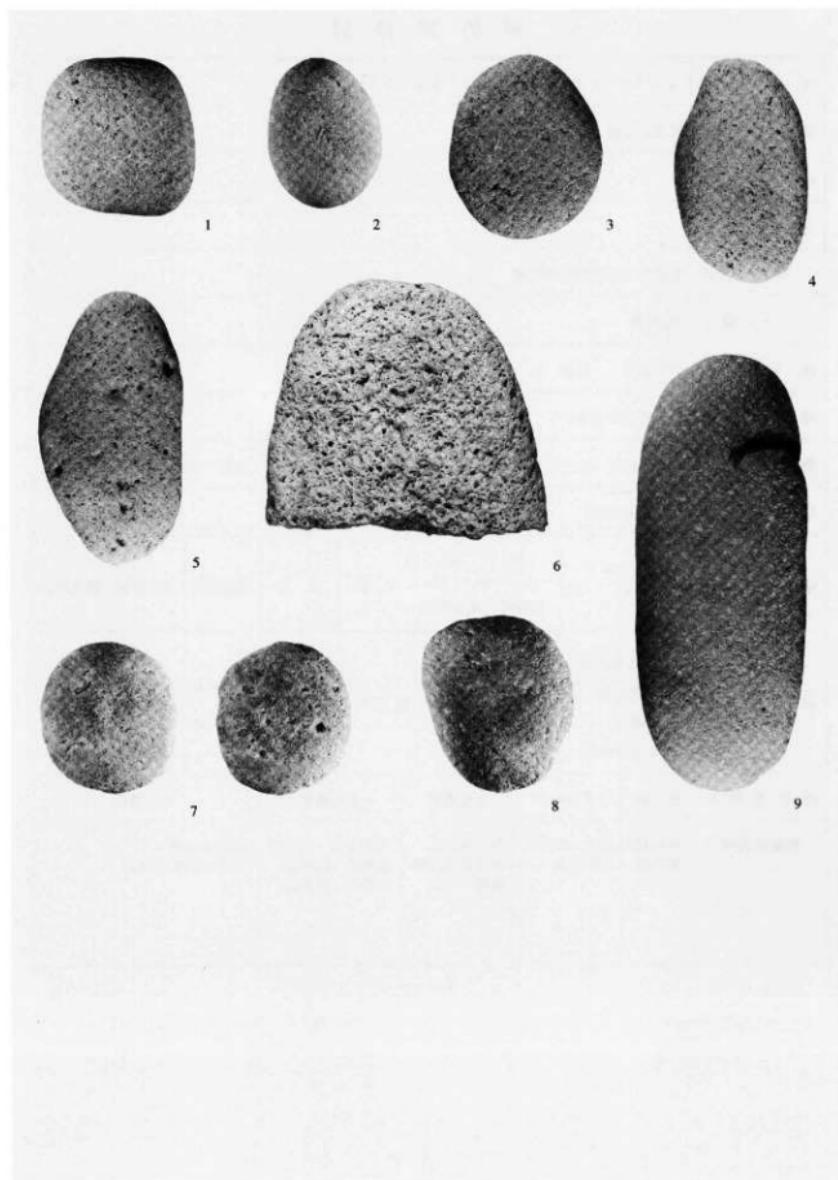


写真19 出土遺物(6)

報告書抄録

ふりがな ふなとまえいせきはくつちょうさほうこくしょ								
書名 船渡前遺跡発掘調査報告書								
副書名								
巻次								
シリーズ名 仙台市文化財調査報告書								
シリーズ番号 第237集								
編著者名 吉岡恭平 佐藤淳								
編集機関 仙台市教育委員会								
所在地	〒980-8671 仙台市青葉区国分町三丁目7-1 TEL 022-214-8893・8894							
発行年月日	1999年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	所 在 地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
船渡前遺跡	宮城県仙台市 太白区山田字船渡前 富田字八幡西	04100	01171	38°12'28"	140°50'45"	1998.04.13 1998.07.29	3200m <sup>2</sup>	インターチェンジ建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
船渡前遺跡	散布地 集落跡	縄文・平安 近世以降	竪穴住居跡 壙立柱建物跡 溝跡・土坑	縄文土器・土師器 須恵器・陶磁器 石製品・鉄製品		古代の集落 近世以降の建物跡		

---

仙台市文化財調査報告書第237集

**船渡前遺跡**

発掘調査報告書

1999年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区調査有三丁目7-1  
文化財課 022(214)8893

印刷 株式会社 仙台紙工印刷

仙台市宮城野区西松3丁目11-44

TEL. 231-2245

---

